

女帝が持つ賢者の杖 《完結》

室賀小史郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もう数多くの作品が出ていますが、自分でも書きたくなったので書きました。

エアグルーヴとそのトレーナーが賑やかな日々を送るって感じのほのぼのを目指しています。

ほぼほぼオリジナル設定と展開で、史実も多々改変しております。日常風景メインなのでレース風景は皆無です。

アニメの方よりアプリの方を重視して書いています故、実際の競走馬たちの年代とか設定とか色々とゴチャゴチャなってますが、そんなの気にしないよ。という方はお読みください。

pixivにも上げています。

目次

女帝と杖	1
チーム・デネボラ	3
トレーナーは多忙	8
女帝の安らぎ	14
女帝の自覚と恋敵	22
新メンバー	31
記者会見	36
女帝の恋心	44
遊ぶこともトレーニング	51
ウマ娘はみんな女の子	59
チームデネボラの金曜日	67
女帝を惑わす恋の魔法	75
夢のグランプリとその後	84
合宿前は多忙の女帝	91
夏合宿は重要イベント	99
女帝の決意	107
友からの鼓舞？	116
夏休みの終盤あるある	125
あと一步の勇氣	134
私は犬である	142
ギアチェンジ	150
女帝の運勢	158
揺らぐ女帝	166
女帝の気苦労と戯れ	173

女帝と杖のお出掛け	181
大切な記念日を控えて	192
トレセン学園のウマ娘は学生	199
女帝が杖と過ごす聖夜	206
グランプリ後の記念日	213
女帝は杖と共に	222

女帝と杖

女帝・エアグルーヴ

ウマ娘界に燦然と揺らめく青い焰。

桜花賞・優駿牝馬（オークス）・秋華賞を制し、トリプルティアラを獲得。また母娘二代でオークスを制覇し、エリザベス女王杯も制した。

多くのタイトルを勝ち取ってきた彼女だが、その旅路は波乱万丈と
言う他ない。

己の信念を貫かんがばかりに専属トレーナーと折り合いが合わず、
何人ものトレーナーと契約を解消してきた。

彼女は女帝として生徒会副会長として、後輩や学園の生徒たちを導
き、ウマ娘たちの模範となるべく過ごしている。

しかしそれでは己のトレーニングの時間が削られてしまうのだ。
これまでのトレーナーたちはそれを何とか阻止したかった。

が、それが毎度女帝の逆鱗に触れ、何本もの杖は折られてしまっ
ていた。

そこに現れたのが、現在も彼女を支えるトレーナーだ。

今でこそチーム『デネボラ』を率いて、エアグルーヴを始めとして
ヒシアマゾン・ナリタタイシン・アイネスフウジン・セイウンスカイ・
マーベラスサンデー・カワカミプリンセスのトレーナーとして数多く
のタイトルを勝ち取っている。

が、エアグルーヴのトレーナーになった頃の彼はまだまだ新人のト
レーナー。あの頃とはかくエアグルーヴの力になりたい一心で、が
むしやらになっていた。

男の名は伊藤幸福（いとう こうふく）。

歳は31で、身長は173の体重66キロの優男。

3人兄弟の末っ子で、実家は大型園芸店を営んでいる。

父親はその社長。兄はその後継者。母親は有名な華道の師範。姉
はその後継者。そこに幸福であり、彼は幼い頃から忙しい両親や歳の

離れた兄や姉になかなか構ってもらえず、その寂しさを埋めてくれたのが彼の父親の弟……ウマ娘専門の料理屋をしていた叔父であった。

叔父は独身で仕事が女房と言うくらいに豪快な男で、幸福を實の息子のように可愛がってくれた。

幸福も華道の稽古や他の習い事が終われば、いつも叔父の店へ行つて家からの迎えが来るまで叔父の手伝いをしていた。

そこで幸福はウマ娘のトレーナーになりたいと思うようになった。幸い家業の後継者は決まっていたし、両親も兄と姉も幸福の夢を心から応援してくれた。

しかしトレセン学園のトレーナーになるとするのは狭き門であるが故、幸福は何度も挫折した。

それでも叔父の店を欠かさず手伝い、そこで出会うウマ娘たちに触発されて、27歳でやっと叶った。

エアグルーヴがまたトレーナーと専属契約を解消した頃に長年の夢であったトレセン学園のトレーナーとしてやってきた幸福。

そこでもむしやりに女帝を支え、激動の3年間を乗り越え、今に至る。

エアグルーヴが女帝と呼ばれ、そのトレーナーは女帝の杖と評された。

それだけ二人の信頼関係は抜群で、当時はエアグルーヴの気性難を危惧していた学園の誰もが、この二人の奇跡を讃えた。

「新入生の皆さん。また新任トレーナーの皆さん。これから在任トレーナーからの話がありますので、心してお聞きください」

学園の理事長秘書、駿川たづながそう言うと、一同が揃って壇上に上がる男に注目した。

「新入生のウマ娘の皆さん、そして同僚となる皆さん、はじめまして。私がこの度、在任トレーナーを代表して話をさせていただきます、伊藤幸福です」

女帝を育てた賢者の杖……男伊藤幸福の話が誰もが真剣に聞き入った。

チーム・デネボラ

「だあ……疲れた」

「あれしきのことでの体たらくか、嘆かわしい」

代表挨拶を終え、幸福は自分が学園から賜ったトレーナー室へと戻ってきた。

そんな彼に苦言を呈するエアグルーヴは、そう言いながらも彼からスーツの上着を預かり、シワが出来ないようにハンガーへ掛けている。

「ああいう堅苦しいのは実家だけで十分なんだ」

「まあ、確かに貴様が常時ああだったら、こちらとしても対応に困るな」

「でしょ？ 俺はこんなゆっくしい感じが丁度いいんだよ」

「私は一切褒めてなどいないからな、このたわけめ」

幸福はネクタイを解いてトレーナー室の彼専用のソファアに腰掛ける。

そんな彼にエアグルーヴは小言を言いながらも甲斐甲斐しく、彼が外したネクタイを手にしてシワを伸ばしながら畳むという風に世話を焼いていた。

在任トレーナー代表の挨拶。

それは昨年最も注目されたトレーナーが任されることが多い。

昨年の幸福とエアグルーヴはURAFファイナルズのマイル部門で王者となり、ウマ娘界隈ではかなり注目を浴びている。

加えてエアグルーヴがトリプルティアラを達成したのを期に、幸福は学園からチーム結成の辞令が出された。

チーム名は「デネボラ」。

名前の由来は獅子座の恒星の二等星から。

二等星ながら、その星言葉は『信念を貫き通す精神』というものから幸福が決めた。

チームの旗揚げから幸福は様々なウマ娘をスカウトし、時にはエア

グルーヴも周りに声を掛けた。

女帝とその賢者の杖がいるチームというのはとても魅力的で、メンバーは一週間で上限の7名を迎えた。

「でも、アタシはトレ公立派だったと思うよ！ あの大量の前で凜々しかったからね！ 声も震えてないし！」

そう言うのはヒシアマゾン。

彼がエアグルーヴの次に契約したウマ娘で、チームの姉御。美浦寮の寮長もしていながら、エリザベス女王杯や有馬記念を制した女傑。エアグルーヴに誘われたのもあってチームに加入。

「あの時のトレーナーはとってもマーベラスだったよ！」

続いて大声とオーバーリアクションを取るのは、ハイテンションウマ娘マーベラスサンデー。

中距離を得意とし、長距離も走れるスタミナを誇る。彼女は幸福に勧誘されてチームにやってきた。

「わたくしはトレーナーさんがいつもより王子様に見えましたわ！」

続いて口を開いたのは同じくメンバーでマーベラスサンデーと一緒にチームへ加入した、カワカミプリンセス。

躓いて転びそうになったところを幸福に助けられて、『運命ですわ！』と逆指名したウマ娘。その名の如くお姫様だが、パワーとど根性でターフを駆ける負けない女。チームでは一番の若手である。

「ん〜、いつものトレーナーさんより二割増し程度にいい男だったんじゃない？」

「あたしはとってもカッコよかったと思うのー！」

長めのソファアにぐでえつと寝っ転がりながら言うのはセイウンスカイで、多くのスーパールのチラシを見比べつつ言うのはアイネスフウジン。この二人も幸福が勧誘して加入したメンバーだ。

どちらもチームデネボラを代表する逃げウマ娘で、セイウンスカイは基本的に気分屋などところがあるが、幸福とはウマが合い皐月賞と菊花賞を（うち菊花賞はレコードタイムで）制した異端の逃亡者。トリックスターとも呼ばれたりする。

アイネスフウジンは人懐っこくて愛嬌満点の逃げウマ娘。しかし

レースになると強気で、朝日杯ステークスではあのマルゼンスキーの「不滅のレコード」1分34秒4と並ぶタイムを叩き出して優勝し、日本ダービーでもダービーレコード2分25秒3で優勝した、まさにその名の通り風神。

「まあ、お疲れってことでいいんじゃない?」

そして最後にスマホを弄りながら話をまとめたのがナリタタイシン。ヒシアマゾンに続いてエアグルーヴの誘いを受けてメンバー入りしたウマ娘。皐月賞ウマ娘であり、メジロマックイーンより先に天皇賞春秋制覇を果たした逆転のウマ娘。

これがチームデネボラ。

チームは他にも数多くあるが、今のところデネボラはかなり注目を集めている。

しかしやはりリシンボリドルフやマルゼンスキーがいるチームリギルやサイレンススズカやスペシャルウィークがいるチームスピカの人気は凄まじい。

「ま、うちは今年度も昨年度と変わらず、狙えるタイトルは全部狙うぞ。リギルやスピカだけじゃなくて、他のチームもまたうちを狙い撃ちしてくるからな」

幸福の言葉にメンバーは揃って力強い頷きを返す。

リギルやスピカとはライバル関係なものもあって当然だが、リギルとスピカの二強と呼ばれていたところに台頭してきたのがデネボラであり、他のチームからすればデネボラの方が狙い目なのだ。

故に毎回レースでは徹底マークされ、最近ではその対策の方が重要性を増している。

「相手が誰であれ負ける気はせん。追う者と追われる者……どちらも経験出来ていいことだ」

エアグルーヴがトレーナーの襟元を正し終えてから、拳を握り絞めて意気込む。

すると、

「だなー、おっしやつ！ 早速トレーニングだっ！」

ヒシアマゾンが両手を高々と挙げて叫んだ。

しかし、

「アマゾン、残念だが今日のトレーニングコースは使用不可だ。これからリギルとスピカによるショーレースがある。加えて他のトレーニングコースはメンバー募集中のチーム等が勧誘活動して体験加入や体験指導を行っているからな」

とトレーナーの髪を整えているエアグルーヴに残念なお知らせを告げられ、「忘れてた!」と耳や肩や尾を落とす。

「そもそもアマゾンはまだレース明けの休養期間中だからね。元々今日は君のトレーニングメニューもない」

「んだと!? おいおい、トレ公! そりゃないんじゃないか? アタシのこの滾りを何にぶつけりゃいいってのさ!?!」

「まな板にでもぶつければ? みんなヒシアマ姉さんの料理食べたいよな?。」

幸福がわざとらしくみんなに問えば、みんなは揃って頷くという連携プレイを見せた。

「んだよ、しょうがないねえ! よっし! ヒシアマ姉さんに晩飯は任しときなよ!」

そしてこのちよろアマゾンである。

「買い出しならあたしもトレーニングお休みだから手伝うのー! 今から行けば夕方前の特別タイムセールに丁度間に合う時間なのー!」

「わたくしはウエイトトレーニングがありますが、トレーニングになりそうなのでお荷物持ちとしてお手伝い致しますわ! プリンセスはパワーとど根性でしてよ!」

「はいはい。じゃあ、アマゾン、アイネス、カワカミは買い出し。支払いはいつも通り俺のカードから。アマゾンにカード預けるから」

エアグルーヴに整えられて見事に小綺麗になったトレーナーがそう言くと、

「ありがとよトレ公♪」

ヒシアマゾンは歯を見せてニカツと笑い、お礼を言った。

「んで、残りのメンバーはジャージに着替えてジムに集合。俺は先に行って準備しとくからな」

『ああ（分かった）（了かい）』
こうして今日チームデネボラは賑やかに始動するのだった。

トレーナーは多忙

その日のトレーニングが終わりを迎えようとした頃、ヒシアマゾンとアイネスフウジンがジムへ顔を見せた。

二人はトレーニングジムの休憩室まで料理を持ってきていて、今日はそのままそこで夕飯を食べることにする。因みにカワカミプリンセスは買い出しが終わったらトレーニング組と合流して、ランニングマシンを使ったスピード&パワートレーニングをした。

「トレーニング組はシャワー浴びておいで。それまでにこっちは盛り付けしとくから」

幸福が指示を出すと、トレーニングをしていた者たちはシャワールームへと向かう。

「はい、トレ公。カード返すよ。ご馳走さん」

「ご馳走様なのー♪」

「はい、お粗末さん。で、何を作ったの？」

「みんな大好き野菜たっぷりチキンカレーさ！」

「なの♪」

幸福の問いにドンと胸を叩いて答えるヒシアマゾンとえっへんと胸を張るアイネスフウジン。

ウマ娘は人間よりもよく食べる。故にチームみんなで食べるとなるとその量は凄まじいことになる。流石にどこかの葦毛の怪物よりは少ないが。

「んじゃ、みんなが来た頃には食べやすい熱さになるように盛り付けしちやおう」

「おう！ んじゃ、アイネスはサラダとスプーンとフォークを並べていてくれ」

「ガッテンなのー！」

幸福がそれぞれに適した摂取カロリーになるようにご飯の量を調節し、ヒシアマゾンがそこへカレーをかける。

当然おかわりも可。幸福はウマ娘栄養学的上最低でもこれだけは

摂取してほしいカロリーを最初によそののみだ。

みんなが席についたところで幸福が『いただきます』と手を合わせれば、みんなも手を合わせて復唱し、賑やかな食事が幕を開ける。

「あ、花びらの形をした人参……」

「おお、タイシンに当たったね！ んじゃ、特賞でこのヒシアマ姉さん特製チーズベーコンオムレツをやろう！」

「余計に食べる量が増えたんだけど……」

ナリタタイシンは複雑な表情を浮かべるが、ヒシアマゾンのオムレツは好きなので拒みはしない。

「タイシン先輩は相変わらず小食ですわねー」

「いや、これでも食べる方になったんだよ？ トレーナーが煩く言うから」

カワカミプリンセスが言ったことにナリタタイシンはそう返して、幸福ヘジト目を向ける。

それでも幸福はどこ吹く風で、

「エアグルーヴ、明日からファン感謝祭の準備期間に入るからトレーニングメニューはあとでウマートフォンに送っとく。花壇の方は俺が責任を持って世話するから君は自分のことに専念して」

「そうか。感謝する。何かあればこちらから連絡するが、貴様も何かあれば気兼ねなく連絡を寄越せ。それとご飯粒をだらしなくつけるな。たわけめ」

エアグルーヴと相変わらず明日からのミーティングをしている。

彼女が取ったご飯粒はそのまま彼女が食したが、メンバーはそんな光景を見ても何も言わない。寧ろツツコンだら負けである。

「そういえば、みんな感謝祭はクラスで出し物あるの？」

そこへセイウンスカイが話題を振った。

ファン感謝祭は人間学生側で言う文化祭に近い。しかし文化祭と違うのはウマ娘たちが提供するサービスが基本無料で受けられることだろう。

理由はファンがいないとレース場の運営費やレースそのものの開

催費、そしてウマ娘たちの獲得賞金が賄えないからだ。

故に年に一度、ファンへその感謝を伝えるべくあるのがファン感謝祭なのである。

当日はクラスごとや有志で出し物があったり、演劇部の公演があったり、特別障害物レースがあったりと、日頃応援してくれるファンを楽しませるためにウマ娘たちがあの手この手で考えたイベントが目白押し。

なのでその準備は在校生の場合は一月前から始まる。新入生たちに至ってはクラス展示などの準備が間に合わないため、基本的に正門前でファンにパンフレットやチラシを配る役が最寄り駅前で学園までの案内係、または学園内のゴミ拾いをする。

そんなこんなでその間、ウマ娘たちはほぼトレーニングはお休み。

しかし幸福のところを含め、無理のないトレーニングメニューを渡しているチームもある。(準備期間中はトレーニングコース場も出し物で使うため使用不可)

「わたくしのクラスはお化け屋敷ですわ」

「アタシのところはメイド喫茶とか言ってたかな……正直やる気しないけど、ウチのクラス無駄にみんな張り切ってるから」

「あたしのところはスタンド内の一角でクレープ屋さんやるのー！」

「マーベラスのところはクイズゲームやるよー！ パーフェクトを取ったらマーベラスな賞品をプレゼントー！」

「アタシんところは駄菓子屋だね。カルメ焼きとか人参焼きとかわたあめとか人参アメを提供するよ」

「私のクラスはハーブティーを提供する喫茶店だ。去年は会長やフジの悪ノリで執事喫茶をやったが、あれはもう勘弁願いたかったから助かっている」

メンバー各々答え、最後にセイウンスカイへ矛先が行く。

「セイちゃんのクラスはアマゾンさんのこと似てるけど、お菓子釣りやるよー。玩具の釣り竿に磁石くっつけてー、5円チョコとかマシユマロとか小さいやつ釣る感じー。ホントは休憩所が良かったんだけど却下されちゃいましたー」

わざとらしく軽く両手を挙げながら言えば、みんながみんな『それは却下されるだろ』と言う反応を見せた。

「にしても、エアグルーヴのここは執事喫茶じゃないのか。アタシはてつきり今年もそうなんだと思ってたよ」

ヒシアマゾンが言うと、エアグルーヴは「冗談はよせ」とこめかみを押さえる。

「俺はエアグルーヴの執事姿凛々しくて良かったと思うけどな。ファンも喜んでたじゃないか」

「私は乗り気ではなかった。しかしだからといって手を抜く私ではない。それだけだたわけ」

幸福の言葉にエアグルーヴは軽く彼の肩を叩いて抗議した。

しかし幸福のスマホにはその時のエアグルーヴの写真がしっかりと嚴重に保存されていることを、女帝は知らない。

「んで、トレーナーさんは何かやるの？ 確か去年は有志発表でトレーナーさん同士でうまびよい伝説披露してたよねー？」

セイウンスカイがニヤニヤして話題を振ると、エアグルーヴの尾が僅かに揺れる。

「そうでしたの!? わたくし知りませんでしたわ! トレーナーさん、また披露してくださいな! 応援はちまきして最前列で応援致しますわ!」

「アタシもアタシもー! マーベラスな応援レイ持って行ってあげるー!」

カワカミプリンセスとマーベラスサンデーが目を輝かせて言うと、エアグルーヴの尾が僅かに上がった。

「トレ公何気生徒に人気あつかんなー。今年は代表挨拶もしたし、やるならセンターはトレ公で決まりだな♪」

「わあ、じゃあトレーナーの投げキッス見れちゃうのー!」

ヒシアマゾンとアイネスフウジンがそう言えば、エアグルーヴの目がカッと見開かれる。

それを見るチームメンバーは『あゝ、見たいんだ』とニヤついた。
「……シンっ、貴様、どうなんだ? 貴様が見世物にされるのは複雑な

気分だが、やるからには応援に行つてやらなくもない」

『(いや、絶対に何を差し置いてでも見に来るね)』

みんなは揃つてそう思う。

「ん、どうだろ？ 去年のあれは理事長からトレーナー陣の本気を見せるのだ！つて言われて、ほぼ強制参加だったからなあ。今のところは何も言われてないから、多分やらなくてもいいんじゃないかなあ。理事長からは校舎玄関に生花頼まれてるくらいだね」

幸福はその道には行かなかつたにしても名門華道家の息子。幼い頃からその修行はしていたので、理事長もその腕を見込んでいるのだ。プラスボーナスも出るのだから、幸福としてはやらない選択肢はない。

しかし、

「そう、か……まあ貴様が見世物にならなくて安心したぞ……」

エアグルーヴのやる気が下がった。

そんな話をしていると、幸福のスマホが鳴る。

画面に表示されている電話の相手の名前は桐生院葵。

名トレーナーを多く出している御家の娘さんで、幸福より年下だが幸福と同期のトレーナー仲間だ。

「はい、もしもしお疲れ様です。どうしたの？」

『あ、お疲れ様です。伊藤さん。今宜しいですか？』

「うん、大丈夫だよー」

『では早速、先程トレーナー会議で決まったらしいんですけど、今年もトレーナーたちでライブをするみたいです』

「へ、へえ……それで？」

『はい、それで……今年も私たち56期組はうまぴよい伝説だそうです……』

「Oh……Jesus……嘘だと言つてよブルータス」

『なんだか色々混じってますが、ショックなのは伝わりました。かく言う私もショックなのですが……ミックがもう見る気満々で、逃げられないです』

「お、俺は理事長から生花頼まれてるから——」

『トレーナー協会から特別手当出るみたいですよ』

「そうか。お互い頑張ろうね」

『あ、はい！ では今度みんなが集まって練習する時間を決めましょう！』

そこで電話は終わった。

思わず追加ボーナスに目が眩んだ幸福に、担当のウマ娘たちは揃って苦笑いを浮かべるが、

「話は聞こえていた。残念だったな、見世物になってしまった。しかもあ、応援しているぞ」

エアグルーヴのやる気が絶好調になった。

女帝の安らぎ

ファン感謝祭を明日に控えた前夜。

準備がまだのところのウマ娘たちは自分らが所属する寮へ外泊届や外出届を出し、明日の準備に向けてラストスパート。

勿論、クラス担任も責任を持って最後まで残っているので、足りない資材の買い出し等も生徒だけに行かせるといふ危険な状況にはさせないし、寧ろそういう場合はクラス担任だけが買い出しに行く。

チームデネボラのメンバーの中でクラスに残っているのは、マーベラスサンデー。

彼女たちのクラスはクイズゲームを提供するのだが、些か出題する内容がマニアック過ぎるのでは？と再度みんなで検討中なのだそう。

例えばロゴ無しで蹄鉄のブランド名を当てるとか、蹄鉄と足跡のみでどのウマ娘か当てるとか、腹の出具合でそのウマ娘の満腹度がどれくらいか当てるとか……パーフェクトを取らせる気がなさそうな問題があるのだ。

何にだってマニアにいたので、そんなマニアにとってはそんなのも余裕かもしれない。しかしファン感謝祭なのだから、出来るだけパーフェクト率を上げた方がいいのでは？との指摘もあり、議論が白熱しているのだそう。

「へえ、そんなことがなあ……まあ確かに蹄鉄ブランドを当てたりは俺でも出来そうだが、誰の蹄鉄かまでは分からないだろうなあ。チームの誰かのであれば分かるけど」

「我々のすら分からなかったらトレーナーとして呆れられるぞ、たわけ」

幸福の反応にエアグルーヴはトレーニングメニューが表示されているタブレットに目を通しながらそんな言葉を返す。

今この二人は幸福のトレーナー室で今後のレースに向けたミーティング中。

ファン感謝祭が終われば、エアグルーヴは来月に控えるヴィクトリ

アマイルへ向けたトレニングを開始する。

前年は惜しくもハナ差で後輩ウマ娘のウオツカに差し切られた。当然今年もウオツカは出走する上、彼女のライバルダイワスカーレットやマイル戦に距離を広げたサクラバクシンオーも出走する。

故に今回も厳しい戦いになるのだ。

「今のエアグルーヴはパワー不足だ。スピードやスタミナなんかは十分だろうけどな」

「貴様が日頃の私を見て思うのなら、そうなのだろう。特に否定はせん」

「どうも。んで、強靱なトモを作るのに重い蹄鉄をつけて階段ダッシュを取り入れる。あそこのレース場は最後の直線途中に高低差2.1メートルの上り坂が設けられてるから」

「去年はそこで失速し、差されたからな。二度も同じ失態は晒さん」
「信じてる。ただ、エアグルーヴも含め、ウマ娘の脚は繊細だ。トレーニング前の柔軟とそのあとマッサージ。それから寝る前のストレッチは欠かさずやるように」

「言われなくてもそうしている。心配するな」

エアグルーヴが慢心ではなく、本当の自信からくる言葉を返すと、幸福は「分かった」と微笑む。

三年間のトウインクルシリーズはウマ娘にとってかなり重要。何故ならそこで何かしらの結果を残さなければ、待っているのは退学の二文字。

勿論、ウマ娘の就職先はいくらでもあるし、その手の専門学校もある。加えて障害物レース、総合レース、エンデュランスといった種目へ転向して成功したウマ娘も数多い。

トレセン学園を去ることは、簡単に言えば純粋なレース競技のウマ娘としては引退することになる。

故にその期間で輝かしい成績をあげれば、トウインクルシリーズでその名を残し、引き続き活躍することが出来る。

またドリーム・トロフィー・リーグ……通称ドリームシリーズに進むことが可能になるのだ。

しかし一度ドリームシリーズに進むと、もう二度とトウインクルシリーズのレースには出走出来なくなる。

エアグルーヴもこの三年間の功績からドリームシリーズへ参戦することが可能だったが、取り逃したタイトルがあるためにトウインクルシリーズに残ることにした。

取り逃したタイトルはヴィクトリアマイル・安田記念・宝塚記念……そしてジャパンカップ。

安田記念はやはりウオツカに。宝塚記念ではサイレンススズカに。そしてジャパンカップは出走せずに同じ時期に開催されているマイルチャンピオンシップに出走したので、今回は満を持してのジャパンカップだ。

「これでミーティングは終わりか？」

「うん、お疲れさん。お茶のおかわりいるか？」

「折角だ、頂こう……」

幸福の提案にエアグルーヴが返すと、幸福は慣れた手付きで茶を淹れ直す。

トレーナー室の設備は意外と充実していて、簡易的な流し台と電気コンロなんかも完備されているのだ。

よってトレーナーの中にはここで寝泊まりしている者もいるくらい。

「……いい香りだ。先程とは別の茶葉だな？」

「ご名答。さっきのはアツサムだったが、今淹れたのは去年取れたとうもろこしのひげ茶だ。ノンカフェインだから今の時間に飲んでも就寝に支障がない」

「ふふ……私が世話をしている花壇の隣に、いつの間にか貴様が作った菜園のとうもろこしか」

エアグルーヴは学園の敷地内にある花壇で様々な花を育てている。学園内で花壇を管理しているのはエアグルーヴだけでなく、他にも多くいて、思い思いの花を育てては生徒たちの心のオアシスになっている。

そしてそんなエアグルーヴが管理している花壇の隣には、幸福が学

園に許可を得て細やかな菜園を耕した。

野菜も実をつける前には可憐な花を咲かせる。幸福はその手の知識も豊富で幼い頃から実家の庭で育てていたのもあり、トレーナーになっても続けている趣味の一つだ。

このお茶に使われているとうもろこしのひげも、去年の物をしっかりと乾燥させて保存しておいたもの。

故にエアグルーヴは彼らしい優しい香りや味に包まれて、自然と尻尾が左右に揺れている。

「今年も順調に育ってるぞ。合宿前には収穫出来る野菜は収穫して、合宿でバーベキューに使うつもりだ」

「同感だな。しかし、そうなるとうもろこし争奪戦がまた勃発するのだな」

クスクスと可笑しそうに去年のことを思い出して笑うエアグルーヴ。

彼女が言ったように、去年の合宿中のバーベキューでとうもろこし争奪戦が起きた。

何しろ特別なことを一切しなかったことで、逆にとうもろこしの味がとても甘く、そのままでも、焼いてバター醤油をかけても、とにかくチームのメンバーに好評を博し、あつという間になくなった。

そして最後の一本をチーム全員がビーチフラッグで争ったという。

「いや、ああならないように今年はやんと用意する。争奪戦にならないように多めに植えたしな」

「そうか……あれはあれでいい思い出になるのだがな」

「エアグルーヴだけに先に教えとく……いやもう知ってるかもだが、今年も二年前に植えておいたパイナップルが実をつけて、食べられそうなんだ。たがらそっちで争奪戦になるかもな。丁度合宿の前には収穫出来るし、合宿に持ってく頃には食べ頃になるんだ」

「ああ、知っている。来月には開花するだろう。花共々楽しみにしている」

「本場とはちよつと味が落ちるかもしれないけどなあ」

「ふつ、そこまで高レベルの物はそうそう出来んだろう」

幸福の笑顔にエアグルーヴもつられるように笑顔でそう返した。他愛もないこの会話がエアグルーヴに安らぎを与える。

トレセン学園にいるウマ娘は日々レースに勝つというプレッシャーがあるので、こうして安らげる時間は大切なのだ。

故にトレーナー側は担当する子たちのこうしたメンタルケアも大事になってくる。

しかしそれはあくまでも会話での安らぎで、エアグルーヴにとってはこのあとに最も安らぎを感じられるひと時が待っている。

「……いつものを、頼む」

「お安い御用ですよ、女帝様」

幸福がそう言ってティーカップをソーサーに置くと、エアグルーヴは躊躇うことなく彼の膝の上に頭を乗せた。

これは所謂『甘える時間』と言うやつである。

エアグルーヴは公私共に己にも他者にも厳しい。

自分は女帝。女帝はそうあるべきと言い聞かせて、そう振る舞っている。

しかし彼女も中身は人間で言えば女子高校生と何ら変わらない。甘えたい時もある。しかしトレセン学園で過ごすウマ娘の多くは寮生活を送る子が殆どで、甘えたい時に甘えられない。友達に対して素直に甘えられるタイプの子はそれでいいかもしれないが、エアグルーヴみたいなタイプになるとそうしたことも難しい。

故に彼女はそう簡単に甘えることが出来ないのだ。

故に最初の頃はそういった自分の未熟さが彼女を苦しめていたが、幸福が甘えたい時が女帝にあつて何がいけないのかと甘えさせたことで、エアグルーヴは己の信念を今も貫いていられる。

「本当に……貴様には何から何まで世話になっているな」

「それがトレーナーの仕事だ。それにエアグルーヴを支えたいと思つて君をスカウトしたのは俺だからなあ」

「たわけ……何も返せていないから、こちらは困っているのだ」

最初はこの男も他の者たち同様、自分の走りしか評価していないとエアグルーヴは思っていた。

故に必要な以上の接触を避け、端的な指示しか仰がなかった。しかし彼はこれまでの者たちと全く別で、自分と同じ目線、同じ目標を達成するために尽力してくれた。

生徒会の仕事も後輩の指導も彼なりに日々努力をしてくれた。

エアグルーヴはそれが嬉しかった。男嫌いな自分でも不思議に思うくらいに、彼と過ごす時間、彼がしてくれること全てが、心を温かく包み込んでくれたのだ。それにエアグルーヴが心を許したとあらば、彼女を慕う後輩たちや男性が苦手なウマ娘たちも自然と幸福を頼るようになった。それは元々彼が持ち合わせていた素質だろう。その証拠に彼は動物や子どもに懐かれやすいのだ。

そんな彼と二人三脚で歩んで来たからこそ、エアグルーヴは現在があり、それは幸福でないとしり得ないことだと常々感じている。

「返してもらってるさ。レースで勝ってくれた時、ウイニングライブの時、日頃から俺やチームのみんなにしてくれる細かなこと……十分返してもらってる」

「そうか……なら、もつと少しわがままを言っても良いな？」

「気兼ねなくどうぞ」

「尻尾の毛並みを整えてほしい。ブラシではなく、貴様の手で」

「お安い御用ですよ」

ウマ娘の尻尾は耳と一緒に本人が許した相手のみにしか触らせない。例外なのは医師や看護師くらいで、それだけ大切にデリケートな箇所。

エアグルーヴにとって、幸福は触ってもいい存在なのだ。

「こんな感じ？」

「ンツ……いい感じだ……」

「あ、毛玉発見」

「そこは黙って取り除くところだ、たわけめ」

「今取るから、揺らさないようにな」

「ああ、頼む……っ」

しかし尾の先を軽く握られ、幸福の息がかかる距離となると、意図しなくても動いてしまう。

「……あの、エアグルーヴさん？」

「……たわけ」

「すぐ済みますからねー。リラックスしてくださいー」

「何ふざけたこと……ンツ、あ……」

「ほい、完了。あとはないかな？」

「んひっ、ちよ、ま、まへ……ぐしやぐしやめっ」

幸福がわざと毛並みを乱すように5本の指でエアグルーヴの尾をかき乱すと、彼女は思わず脚がピコンピコンと跳ねる。

気持ち良い証拠で、呂律も回らず、若干唾の粘度も増して開いた口から糸を引いていた。

「はは、ごめんごめん。でもエアグルーヴ好きだろ、これ？」

「う、ぴう……」

「ほら、尻尾めっちゃ上がってんぞ？」

「たわ、け……」

ふうふうと肩で息をし、火照った顔を隠すように幸福の太ももに押し当てるエアグルーヴ。

それを見た幸福は少しやる過ぎたなど反省して、彼女の首筋を軽くトントントンとリズムカルに叩くように撫でた。

そうすれば、エアグルーヴの呼吸は落ち着いていき、やっと幸福へジロリと視線を寄越す。

「たわけ」

「ごめんごめん」

「……たわけ」

「うん、ごめん」

「………ん」

「はい、よしよし。いたずらしてごめんな」

「………ふん」

ころんと仰向けになり、幸福へ向かって両手を広げたエアグルーヴ。

幸福は彼女の要望に応じて優しく抱き上げて頂を撫でてやると、エアグルーヴはプルルツと満足そうに唇を鳴らした。

こうしてエアグルーヴの甘える時間はゆっくりと過ぎていき、身も心もリフレッシュするのだった。

女帝の自覚と恋敵

最高だった。

ああ、それはもう最高だった。

最高としか言いようがないほどに。

あそこが樂園なのだと思えるほどに。

今日はファンに日頃の感謝を伝える大切な日、ファン感謝祭。

相変わらずフラッシュユライトを焚いて撮影してくるのには慣れな
いが、この程度女帝として耐えて見せよう。

幸い、フジやファインなどの私の事情を知る友がそれとなく反らし
てくれたので、助かった。

今はそのこともあって持ち場を離れ、クラスでファンに提供する用
の飲み水を専用タンクに汲むという名目で、人気のない第二校舎の厨
房まで休憩しにやってきた。

それにしても……

「ほう……」

……最高だった。

今思い出しても、血が、細胞のひとつひとつが歓喜に沸き上がる。

午後1時から始まったトレーナー陣による有志発表。

会長のトレーナーは今年は何もせず会長と仲睦まじくファン感
謝祭を見回りと言う名目で逢い引きしていたが、私はそんなのどうで
も良いほどの光景が脳裏に焼き付いた。

幸い、タキオンが言うような副作用？の涙もそれほどではなく、最
後まで視界が霞むことなく見届けることが可能だった。

そして自覚してしまった。

彼の投げキッスで……私がどれだけ彼を担当ウマ娘としてではな
く、ひとりの女として愛しているのかを。

不思議と認めてしまえば、恋をしていることに落ち着いている自分
がいた。でもそれでいい。私はこれから彼の愛バであり、私から彼
の元を離れるなんてことはないのだからな。

時間はある。浮ついてもいない。私には彼と築いてきた絆がある。ならば、それを永遠の物にしてみせよう。女帝として……ひとりの女として。

「おい」

「？　なんだ、エアシヤカールか。何か問題でも発生したのか？」

私が恋の余韻に浸っているというのに、この友はどんな厄介事を持ってきたんだ？

「あ、ケンカ売ってんのか？　問題は現在進行形で起こってんだよ、オレの目の前でな」

「何……なっ!？」

しまった。ついついタンクに水を汲んでいることを忘れて、盛大に溢れさせてしまっていた。

「す、すまない」

「別にどうでもいい。お前を探して来てみたら、そうやってただけだから。で、こっからが本題だ」

「……なんだ？」

「コレ、お前もいるだろ？　ん？」

「こ、これは!？」

彼女がわざわざここまで足を運んで持ってきたファイルの中身を、私に見せつけるようにして差し出してくる。

そこには彼の先程の有志が様々な角度から撮影されている写真の数々が収録されていた。

おお、あのキス顔もしっかりあるではないか。なかなかいいアングルで撮れているな……ではなく！

「な、何故こんなものがある!？」

「はあ？　んなもんその担当と共に売れっからに決まってるだろ？　各トレーナー共の写真はオレとそのダチらで全員完璧に撮影済みよ。

因みにお前には日頃世話になってるからアルバム代は全部オレの奢りにしといてやる」

「……言い値で買おう」

「へっ、毎度♪　やっぱ女帝サマも、惚れた男には弱いってことだ

なあ♪」

「私にそんなことを言っているのか？ 貴様の弱みはこちらも握っているんだぞ？」

貴様が密かに自分のトレーナーにストーカー紛いなことをしているのを私は知っている。

しかしそれは彼女のトレーナーが庇護欲を唆られるような容姿と態度なのも災いして、押し強いウマ娘たちから守るためだと分かっているから、こちらは理事長や会長には黙ってやっているのだからな。まあ会長は既に分かっている節があるが。

「チツ、ほんのジョーダンだよ。真に受けんな」

「貴様の冗談は質が悪い」

「今に始まったことでもないだろ。んで、どの写真がほしいんだ？」

「……全て頂こう」

「毎度あり、代金は現物が揃ったらこっちからそっちにメッセで知らせるぜ♪」

「ああ、頼む。感謝するぞ」

やはりエアシヤカールは派手な見た目でもイイ友だ。

しかし、本当にいい物だ。何より、私の勝負服をモチーフにした衣装を着用しているというのがまた素晴らしい。上着部分の大きく開いたところから見える彼の男らしい胸筋も、この笑顔も、流れる汗も……ああ、これが良くアグネスデジタルが呟いている『尊い』と言うものなのだろうか。

「あ、エアシヤカール。やっと見つけた。ちよつといい？」

「あん？」

「……ゴールドシチー……」

私がああ時の余韻にまた浸っていると、私たちのところへやってきたのはプラチナブロードのウマ娘ゴールドシチー。マイル路線から始まり、中距離路線へ走る距離を広げ、最近では長距離路線にもレースの幅を広げつつある、実力者だ。私とはたまたまレースが被ったことはないが、強さは知っている。

私は少し……いや正直、かなり苦手だ。

その理由はただ一つ――

「読モサマがオレに何の用だよ？」

「他の子らが話してたのをたまたま聞いちやっただけどき……アンタ、トレーナーたちの写真売り歩いてるんでしょ？ アタシにも売ってよ」

「お前が？ 珍しいもんだな。でもお前のトレーナーは何も出てねえから写真なんてねえぞ？」

「アタシの今のトレーナーのなんていらないしほしくもないから。てか、この感謝祭終わったらアタシはアイツの担当から外れるからね。アタシがほしいのは伊藤トレーナーの写真♪」

――こういう理由だ。

ゴールドシチーとあやつは顔見知りだ。別に彼がうつつを抜かしたとかではなく、圧倒的にトレーナーの数が足りない中で、担当がいなかったり、担当と良好な関係が築けない者たちは、他のトレーナーたちに教えを乞う。当たり前のことだ。

ただゴールドシチーの場合はきつかけがあり、何でも街でナンパに絡まれているのをあやつが助けたことから交流が始まったんだそう
だ。

ウマ娘が人間の男に力で負けることはない。しかし彼女はモデルという立場がある。よって所属事務所に責任が行かぬよう、問題を起こさないように穏便に事が済むようにしていたところで、あやつがたまたま通り掛かったということらしい。

あやつは正しいことをした。話を聞いた時は私も鼻が高かった。

しかし私が生徒会で忙しくしている間に、ゴールドシチーがちよくちよくあやつにアドバイスを乞うことが増えた。

彼女を担当するトレーナーは完璧主義者として有名だ。故に彼女の誇りであるモデル業にも口を挟む上、彼女がレースに負けたらモデル業のせいにしてそれを辞めさせようとするらしい。

そんな愚痴を彼女の口から聞いた時は私も呆れ、怒りを覚えたものだが――

『エアグルーヴのトレーナーって確か……伊藤さんだよ？ 優しい

し理解あつてイイ人だよ。だからアタシ気に入ってるんだ♪」

——などと言われて、呆れも怒りも何処かへ吹き飛んでしまった。彼女はまだトウインクルシリーズを辞すつもりはないらしい。まあそこは私も似たような立場であるから、とやかく言うつもりはない。

ただ、この先トウインクルシリーズに残っても、ドリームシリーズへ進むとしても、自分を担当するトレーナーがいなければレースには出走出来ないのが現実だ。

そこで彼女は私のトレーナーに目をつけている。

チームの上限人数は7人。今学園が定めている一人のトレーナーが本人の体調を崩すことなく責任を持って指導出来るウマ娘の人数だ。

しかし学園側がトレーナーの力量を認めれば、その上限は上げられる。あやつは現在チームデネボラのトレーナーとして確かな実績がある。

よつてゴールドシチーならば十分に指導出来ると判断される可能性が高い。

私の杖なのだから、それは当然であり、私の誇りだ。

しかし——

「宣戦布告ならば受けて立つぞ、ゴールドシチー？」

——やつと自覚した恋とその相手を、やすやすとくれてやるものか。

「うわあ、怖い怖い。そんな闘争心剥き出しでヤダなあ。てかアンタ、やつと自分の気持ちに整理ついたらんだ？」

「余計なお世話だ。それにこちらは真剣だ」

「フーン、燃えてくるじゃん。アタシ、そうやって向かってくるヤツ嫌いじゃないよ？」

「ぽつと出のウマ娘に私のトレーナーは靡かんぞ」

「知ってるよ。だから余計に燃えるの。レースでもそうでしょ？ 一番人気、二番人気……そういう子たちを出し抜いて勝った時に浴びる歓声の気持ち良さって格別じゃない？」

「貴様……！」

「エアグルーヴは今、確実にあの人の一番人気……アタシは多分そういう段階にすらいらない。だってまだ最近良く話し掛けてくる子だなあ、くらいなもの」

そこで言葉を一度区切ると、次の瞬間彼女が纏っていた圧が明らかに増した。

「でも、アタシは諦めない。モデルの仕事だってそう。必死になってレースと両立させてきたんだ。アタシには彼が必要。お人形扱いもしない、ただ結果だけを求めてきたりもしない……アタシそのものを見てくれて、的確なアドバイスをしてくれるあの人がね」

「……チームに加入するのであればチームのリーダーとして貴様を歓迎しよう。しかし、お目当ての物が側にあるからとつけあがらないことだ」

「さあ、それは実際なってみないと、ね？ アタシこれでも尽くすタイプだからさ。アンタはどう？ 日頃、あの人にたわけたわけ言ってばっかじゃん。そんなんじやどんなに優しい人だって愛想尽かされるよ？」

「ふん……貴様と私とはあやつと築いてきた物事が違い過ぎる。現実を知り、その差を思い知るといい」

それに二人きりの時は私の方が良く甘えているんだからな。

「……なあ、ヒートアップしてること悪いけどよ。オレ帰っていいか？」

やつと声を発したエアシャカールの声で私は我に返った。

そうだった。まだ彼女も居たんだったな。申し訳ないことをした。

「すまない」

「別にいい。一人の男を取り合うのはここじゃ日常茶飯事だ。あとゴールドシチー」

「ん、何？」

「蹴り合いはご法度だかな？」

「しないしない。モデル続けらんなくなるじゃん」

ちよつと待て、私だってそもそも貴様を蹴るつもりなんてないぞ。

「ならいい。んじゃ、このファイル渡すからほしいヤツの番号と枚数をメッセに送っておいてくれ。オレは他にも回るところがあるんでな。あとアルバム一冊につきプラス500円だかな。見終わったらオレのクラスまで持ってこい」

そう言い残してエアシヤカールは去っていく。

そして残されたのは私とゴールドシチー。

ここが人気のない場所で良かった。こんな重たい空気を、他の生徒たちの前では見せられん。

「うわっ、どれも素敵だね。ねね、エアグルーヴはどれ頼んだの?」

「貴様……ふざけているのか?」

先程宣戦布告したばかりの相手に何を訊いてきているのだ。

「別にふざけてないよ。恋敵ってだけじゃん。でも、それって一番の理解者同士ってことでしょ? 同じ男の人を好きになったってことだし」

「……それはまあ一理あるな」

「でしょ? だからほら、教えてよ。アタシ、このウインクしてるヤツお気になんだけど?」

「……いい趣味をしている」

「あ、やっぱそう? いいよね、この表情!」

「あ、ああ……私はこちらのも捨て難い」

「はああつ、こんなレースははじめての決めポーズのとき! いい、いい! チョーカッコいい! 濡れる!」

なんだ、こうして話してみれば意外と話の分かるヤツではないか。濡れるはどういう意味なのか理解し難いが。

「やっぱアタシらウマが合うね♪」

「そうかもな」

「これからよろしくね」

「ああ、掛かってくるといい」

私たちは初めて握手を交わした。同じ愛する男を巡る恋敵（ライバル）として。

「因みに私は全て頼んだぞ」

「え」

「なんだ？」

「全部1枚ずつってことだよね？」

「何か問題が？」

「いや、1枚ずつって足りなくない？」

「……………は？」

「だってそうじゃん。考えてもみなよ。全部1枚ずつだと手帳とかに日替わりで入れたりしてたら、いつか破れたり、そうはならなくてもキズがついちやうでしょ？」

「……………確かに」

「まあそれでも保護フィルムに入れとけばキズとかの心配もいらなわけだよ。でも持ち歩いてたら、何かの拍子に紛失することもあり得るワケじゃん？ 掃除してて運悪く水場にポチャとか夕立にあつてヨレちやうとかさ」

「……………そうだな」

「だから普通は持ち歩く用、替え用、保存用って最低3枚はいるの。アタシの場合はそれに加えて、部屋のロッカーに貼る用と部屋で眺める用とペロペロ用の6枚は必要なんだけど」

「なるほど、ペロp……………なんだそれは!？」

「え、キスしたくならない？」

「じゃ、写真にか？」

「写真にしか出来ないでしょ。本人にしたいけど、流石にそれは……………ね？」

「た、確かにそうだな……………しかし、写真に……………」

「このキス顔写真見ても、エアグルーヴは自分の衝動を耐えられるの？」

「うぐつ」

「まあ、あくまでもアタシの意見だけどね。エアグルーヴの好きにしたらいいよ」

「……………私もそれぞれ6枚買おう」

「やっぱアタシらしい友達になれるね♪」

「……誠に遺憾だが、同感だ」

「仲良くしようね」

「その前に貴様がチームに加入出来るかが問題だがな」

「それねー。ま、でも大丈夫っしょ。アタシいい子だし♪」

「自分でそれを言うのか……ふふっ」

その後も私は暫くゴールドシチーと彼の写真について語り合った。
水汲みを忘れている私をフジが呼びに来るまで……。

◇

「はつくしよん！」

「どうしたんだい、トレ公。風邪でも引いたか？」

「きつとエアグリーブがトレーナーが来ないってイライラしてるんじゃない？」

「いや、そんなことは……早く行こ。またなアマゾン、タイシン！」

新メンバー

「今日から新しくデネボラに加わるゴールドシチーだ。まあ俺が言わなくてもみんな知ってるだろうけどなあ」

「どうもー、本日付けでデネボラに加入することになったゴールドシチーだよ。みんな知ってるの通り読モやってて、ちよいちよいそっちの仕事でトレーニングを休む時はあるけど、仲良くしてね」

ファン感謝祭が終わってから一週間ほどが過ぎた頃、幸福がメンバー全員をトレーナー室に集め、ゴールドシチーを連れ立ってやってきた。

チームの上限人数は7人。

しかしチームを預かるトレーナーの力量が学園側から認められれば、上限人数を超えて担当バを持つ。

多くのウマ娘にとって最も重要な時期はクラシック期間。中にはシニア期から出走可能になる春天や大阪杯を目標にしている者もいるが、ウマ娘の殆どが目指すのはやはり三冠とトリプルティアラ。

皐月賞・東京優駿・菊花賞の三冠レース

桜花賞・オークス・秋華賞のティアラレース

他にもNHKマイルやジャパンダートダービーと言った多くのG1レースがこのクラシック期間にしか出走出来ない。

またG1でなくてもスプリングS、弥生賞等々の様々レースがクラシック期間限定で出走出来るため、重要度が高いのだ。

故にその期間中のウマ娘が多くて指導の手が回らず、そのウマ娘のウマ生を台無しにすることは学園として見過ごせない。

よってチームを作るにもトレーナーの能力が必要で、チームを作れるというのは学園に認められた名トレーナーの証でもある。ウマ娘的に言えば、称号とも言えるほどの名誉だ。

そうしたことを加味し、チームを作るトレーナーには担当するウマ娘が最低3名……最高7名と定められている。

ただ今回の場合のように、何故その上限が上げられたのか。

それは幸福の能力が評価されているのも大きいですが、チームに所属しているウマ娘たちの育成レベルも関わっている。

幸福がチームを立ち上げたのはエアグリーブを担当して2年目となり、トリプルティアラを獲得した秋の終盤。

この時既に三年間のトウインクルシリーズを終えていたヒシアマゾンとナリタタイシン、アイネスフウジンがチームに加入。

この3名は元々同じトレーナーが担当していたが、彼の定年退職で担当を外れることになり、選抜レースでスカウトを募ろうとしていたところで幸福やエアグリーブがスカウトした。

よってこの3人はエアグリーブより長くトウインクルシリーズを走っているベテラン勢。

セイウンスカイとマーベラスサンデーは昨年クラシック期間を終えて、今年からシニア。URAFファイナルズの方でも中距離予選にマーベラスサンデー、長距離予選にセイウンスカイがそれぞれ出走することが決まっっていて、この2人もベテラン勢として数えられる。

そしてチームでは唯一カワカミプリンセスがクラシック期に入っている。ファン感謝祭が終わってすぐにあるティアラレースの1冠桜花賞があつたが、それは幸福の判断と話し合いの結果出走していない。

このことから、チームデネボラにはカワカミプリンセスを除いてベテランが多いことが分かるだろう。

そうしたことを踏まえると、今回の場合はトレーナー伊藤幸福の力量は十分で、その担当バたちの育成レベルも申し分ない。

8人目となるゴールドシチーも既にトウインクルシリーズの三年間を終えており、ベテラン。

彼女の場合は前担当トレーナーとウマが合わなかっただけで、学園側が調べても本人の素行や学園内外での生活態度に何も問題がない。加えて彼女たつての希望でもあることから、学園側が安心して幸福に任せた形だ。

そもそもシニアに入ると、言い方は悪いがそのウマ娘がトウインクルシリーズに在籍している限り、同じレースに何度でも出走させるこ

とが出来る。

シニア期となれば、ウマ娘たちもトレーニングやレースに慣れ、あとは己の目標や夢の実現が走る理由となる。

それから後、別の道に進むかドリームシリーズへ挑戦するかだ。

「それじゃあ、カワカミ以外は通常トレーニング。個別にトレーニングメニューを渡してあるメンバーはそっちのトレーニングを行ってくれ。ゴールドシチーは……」

「シチーでいいよ。もうアタシはトレーナーの担当バなんだから」

ゴールドシチーが幸福の左腕に抱きついて、上目遣いでウインクしながら提案すると、幸福は「分かったよ、シチー」と微笑む。

「じゃ、シチー。君とは後日に目標等を改めて決めるから、今日のところはチームに馴染むことを優先して、通常メニューをやってくれ。分からないことがあれば、メンバーの誰かに訊くといい」

「ん、リョーカイ♪」

「よし、今日も一日怪我なくやるように！」

幸福がそう言って鼓舞すると、メンバーも揃って気合の乗った返事をするのだった。

◇

チームの部室へ移動してきたカワカミプリンスを除いたデネボラメンバー。

カワカミプリンスは来月に控えたオークスに向け、トレーナー室に残ってコースの構造や出走予定のウマ娘たちの脚質や性格、近々のレース映像等を観て幸福とミーティング。

残りのメンバーはトレーニングウェアに着替えて、まずは準備体操、柔軟、それからウォーミングアップの芝トレーニングコースを自身の脚の調子を確認しながら5周する。それから個別メニューがある者は個別メニューに向かい、そうでない者たちは並走トレーニングやタイヤを引いてダートコースを走るトレーニングを行う。

「チームっていいねー。アタシ、モデルのこともあるからチームに入るので初めてなんだけど、マンツーマンじゃない分、気が楽かも」

着替えつつ、自分に割り当てられたロッカーに私物を入れていく
ゴールドシチー。

「あく、そういやゴルシチはそうだったね。まあなんかあったら遠慮
なくこのヒシアマ姉さんを頼んなよー」

「ゴルシチって……なんかそれボルシチみたいじゃん。まあいいけど
さ」

「あとゴールドシツプみたいなの〜♪」

「あ、それアタシも思った」

「あ、アイネスもタイシンも言うじゃん？ 敢えてアタシそこは言わ
なかったのにさ〜」

加入してすぐではあるが、ゴールドシチーはチームに溶け込み始め
ている。

ヒシアマゾン、ナリタタイシン、アイネスフウジンと同じ高等部な
のもあって、彼女とはそれなりに顔を合わせているし、元から顔を合
わせれば軽く話くらいはする仲。

ナリタタイシンに至っては先月の後半に大阪杯で対決しているの
もあって、ビワハヤヒテやウイニングチケットほどではないが仲はい
い。

「気持ちは分かるが、もう外へ行くぞ。時間は待つてはくれないのだ
からな」

エアグルーヴがメンバーの気持ちを引き締めると、みんなは『はー
い』と明るく返してトレーニングコース脇へと繰り出した。

「しかし本当に来るとはな……。正直少し……。いや、とても驚いてい
る」

「アタシはこれでも行動派だからね。まあ、改めてよろしくね、チーム
リーダーさん」

「貴様なら問題ないとは思いますが、チームの名に……。あやつの顔に泥を
塗るような行動は取るなよ？」

「大丈夫大丈夫。顔につけるなら、アタシの匂いだから♪」

「ほう……。私がそれを許すとても？」

「わざわざ許可が必要なことでもないでしょ？ そうなっっちゃう雰囲気

気になるかもだし?」

フフフ……あはは……と柔軟をしながら火花散る両者。

アイネスフウジンとマーベラスサンデーはその両者の空気に揃って小首を傾げるが、

「なんだい、ゴルシチもうちのトレ公狙ってんのかい?」

「というか、エアグルーヴ先輩……とうとう自覚したって感じ?」

「みたいだね。まあ感謝祭のあとからちよつと雰囲気が変わったのは知ってたけど……」

ヒシアマゾンとセイウンスカイ、そしてナリタタイシンは両者の雰囲気で確かな物を感じ取った。

そう、あれだけ幸福に好き好きオーラ全開だったのに、それを自覚してなかったエアグルーヴがハツキリと自覚しているのだ。

しかもゴールドシチーはその恋敵なのだから、その驚きも増す。

「え〜! 先輩やつとトレーナーのこと好きって認めたの〜!?
マアアベラアアスツ!」

「わあ! それホントなの!? やきもきしてたから嬉しいの〜!」

分かってなかったマーベラスサンデーとアイネスフウジンも、ヒシアマゾンたちの話を聞いてその場で万歳する始末。

これには流石のエアグルーヴも頬を赤らめて、「静かにしろ」と注意しつつこめかみを押さえた。

「……エアグルーヴ、アンタ……どんだけ周りにバレバレだったわけ?」

「……言うな」

「この分だとカワカミも知ってるだろうね」

「……だろうな」

周りの反応とエアグルーヴの反応に思わず苦笑するゴールドシチー。

しかしながらこうしたエアグルーヴの反応は素直に可愛いと思っただゴールドシチーであった。

記者会見

5月に入り、レース開催日が間近に迫ったエアグルーヴ。その会場となる東京レース場へ幸福とやってきた。

本日はヴィクトリアマイルに出走するウマ娘たちの意気込みを各メディアに向けて語る合同記者会見。

「こちらがエアグルーヴさんの控室となります。会場の方の準備が少し遅れてまして、予定よりお時間が過ぎるかと思えます。会場が整い、会見を始められる10分前には必ずスタッフがお声掛けしますので、それまでお待ちください。伊藤トレーナーさんは事前の打ち合わせがありますので、後ほど会見スペースへお越しください」

案内してくれた女性スタッフに二人して礼の言葉を返し、控室に入る。

「緊張してる?」

「たわけが。そんなはずがないだろう。何度目だと思っている」

「でもこのやり取りやつとかないと、落ち着かないだろう?」

「それは貴様だろうが、全く。そんなことより、さっさと自分の仕事に向かえ」

「着いたばっかじゃなかよ。少しは休憩させてくれ。昨日やつと満足に眠れたばっかなんだわ」

そう言っただけで幸福はパイプ椅子に座り、用意されているペットボトルのお茶に手を伸ばした。

エアグルーヴを初めて担当した時や去年のセイウンスカイやマーベラスサンデーのクラシック期間中を考えたらだいぶ余裕があるが、やはりトレーナーとしてやれることを全部やっている、1日の24時間なんて時間じゃとても足りない。

同レースに出走する他のウマ娘たちのコンディションや脚質。同レースと同じ距離のレースや普段の模擬レースから見えてくる癖や仕掛けのタイミング。

色んなことをデータ化し、分析し、自身の担当するウマ娘を勝たせ

る。そのためにはこうした地道な情報収集が鍵になってくるのだ。

しかしどんなに準備をしても、どんなに万全でも、勝負というのは結局のところは時の運。

勝者は1人しかいないのだ。

「……まあ、昨日に比べれば幾分はマシな面構えになったな」

「流石に限作ったままで記者会見には出れねえからなあ」

「ふっ、その時は私が直々にメイクして醜い隈を隠してやる」

「なら昨日も徹夜すれば良かったかな？」

「ふふ、このたわけが」

エアグルーヴは穏やかに笑い、幸福の肩を軽く小突く。

この男が自分やチームのメンバーのために、どれだけ身を粉にしてやってくれているのかをエアグルーヴはちゃんと分かっている。

メイクデビューレース前の初の記者会見で、幸福は不安や緊張が強く出ていてエアグルーヴは頭痛がしたほどだ。

しかし、それなら自分がメイクデビュー戦に勝って、この男がしてきたことが正しかったと教えてやろうと思い、エアグルーヴは2着に8バ身差をつけて圧勝してみせた。

どうだ、貴様のやってきたこととは正しかっただろうとエアグルーヴが幸福を見ると、男は人目を憚ることなくレース場で、自分を一心に見つめて泣き叫びながら手を振っていた。

『ありがとう！』

『流石だったよ！』

『俺もつと頑張るよ！』

会場に訪れた人々から向けられた大きな歓声より、幸福のその言葉がエアグルーヴの耳に一番大きく届く。

そんな頃に比べれば、この男も頼もしくなったものだとエアグルーヴは嬉しくて仕方がない。

故にエアグルーヴは尻尾がゆらりふわりと左右に揺れている。

「さて、それじゃあ行きますかなあ」

「しっかりと打ち合わせしてこい」

「エアグルーヴもしつかりメイクアップされてくれ」
「ああ」

幸福がエアグルーヴと別れて会場へやってくる、
「よっ、今回もよろしく頼むぜ。賢者の杖さんよお♪」
チームスピカのトレーナー、安藤航平（あんどう こうへい）がにこやかに声を掛けてきた。

歳は34歳で幸福より長い間ウマ娘を育ててきた名トレーナー。ジャパンカップ王者スペシャルウィークと天皇賞秋をレースレコードで制したサイレンススズカ、そして度重なる怪我から奇跡の復活を果たしたトウカイテイオーと多くのスターウマ娘を育て上げている。パツと見はチャライ感じだが、面倒見が良くて人懐っこいのでウマ娘や後輩たちに慕われている。そして天性の勝負師であり、その鋭い観察力で相手ウマ娘の本質を見事に見抜き、レース直前に作戦を変更するなんてこともしばしば。

故に去年は彼が担当するウマ娘ウオッカに破れてしまったわけだ。
「こちらこそよろしく願います、安藤先輩。出来れば勝たせてくれると助かるんですが」

「おいおい、レースはそんな甘い世界じゃないぞお？」
「知ってますよお」

ワハハと笑い合う男たち。

しかし二人は共に名トレーナーとして名を馳せているため、他のトレーナーたちは『うわあ』といった感じで二人を見ている。

それでもこの人たちが育てたウマ娘に勝ちたい。勝って自分も名トレーナーの仲間入りしたいし、担当の子をセンターで輝かせたい。そんな強い気持ちで溢れていた。

「これでも簡単にいけると思うか？」
「無理でしょうね……」

そんな空気を察して二人は思わず苦笑い。

するとスタッフがトレーナーたちに声を掛け、打ち合わせが始まるのだった。

記者会見が始まる10分前。

打ち合わせを終えた幸福がエアグルーヴの控室に戻ってきた頃には、既に彼女はいつもの勝負服に着替えさせてもらい、威風堂々とその時を待っていた。

「10分前です。会場にお集まりください」

スタッフの声掛けに幸福は返事をする、椅子に腰掛けるエアグルーヴに向き直る。

「んじや、行きますか」

「ああ」

エアグルーヴが意気込み十分に頷きを返すと、幸福はコスメポーチから真っ赤なアイシャドウを取り出した。

これは彼女の母が現役時代も今も愛用するお揃いの気品ある深紅のアイシャドウ。元々彼女が自らしていたのもあり、エアグルーヴの代名詞だ。

幸福は記者会見やレース前に願掛けや気合入魂といった意味合いとして、エアグルーヴにアイシャドウをするようになった。

エアグルーヴも最初は自分やメイク師がすればいいと思っていたが、試しに彼にしてみようと何故か気分が高揚し調子が上がり、気分も軽くなるので、今ではすっかり最後の仕上げとして幸福に任せている。その理由も今ではハッキリしていて、彼を信頼し、愛しているからだとエアグルーヴは思う。

「未だに思い出すが、貴様がメイクまで出来ると知った時は驚いた」

「はは、めっちゃ驚いてたもんなあ。まあ俺もトレーナーになるための養成学校でメイクまで授業にあった時のあの驚きつたらなかった……が、こうして役に立ってるから真面目に受けといて良かった」

「授業は全て真面目に受けるものだ、たわけ」

「だな……ほいつ、出来た。今回も我ながらバッチリだ。綺麗だぞ、エアグルーヴ」

今回も会心の出来にニカッと白い歯を見せながら、エアグルーヴに手鏡を渡す幸福。

「……ああ、完璧だ」

それを確認してエアグルーヴも満足そうに頷き、耳はピコピコ、尻尾もゆらゆら。

こうして二人は幸福を先頭に記者会見の場へと向かった。

パシャパシャとたくさんフラッシュライトが焚かれる。

会見はどのウマ娘も平等にその意気込みを聞くが、多くのメデイアが最も注目するのは前年覇者ウオッカとそのライバルダイワスカーレット。

更に二人は並ぶと絵になるため、二人並ぶとフラッシュの嵐だ。

「ウオッカさん、今回のレースの自信は？」

「いつもと変わらず絶対調だけ！ どっからでもかかってこいや！」

自信に満ちたその言葉に記者たちがどよめく。

「ダイワスカーレットさんはどうですか？」

「前は目の怪我也あったので出走とコイツとの対決は叶いませんでしたが、今回は万全のコンディションで迎えることが出来ます。一番は譲りません」

またもどよめく記者たち。

それだけ彼女たちが注目されていることが分かる。

「安藤トレーナー、スピカとしては二人出るということになりますか、チームの雰囲気はどうですか？」

「チームの雰囲気は悪くないです。寧ろ、うちのチームは全員が仲間でありライバルとして意識し合ってますから、こうしたことが今後もあるのでもいい刺激になってますよ」

「ということはやはり今年のジャパンカップはスペシャルウィークさんとサイレンススズカさんが出ることもあり得ると？」

「あり得ない話ではありませんね。しかし彼女たちのコンディションを見て決めますから、こればかりはお楽しみに、としか言いようありません。今ここにいるウオッカやスカーレットを出走させるかもしれませんしね」

安藤が冗談めかして返すと、記者たちは一番のどよめきを見せ、ペ

ンを走らせ、キーボードを叩く。

やはりスピカは今年も注目を浴びる。それは安藤のしている側、聞いている側をワクワクさせる勝負師ならではのトーク術とも言えるだろう。

そして、

「それではそんな二人に対抗する注目バ、エアグルーヴさんに伺います」

エアグルーヴの番になった。

しかしこの時ばかりはフラッシュの嵐は起こらずにシャッター音のみが響く。

何故ならエアグルーヴがフラッシュユライトを苦手としているため、幸福が事前に記者たちには前々からフラッシュユライトを焚かぬようお願いしてきたからだ。

宣材写真やブロマイドといったことが目的の写真撮影なら、彼女も我慢する。しかし記者会見中ずつととなると、話は変わってくるのだ。

最初はそんな弱みを見せなくなかったエアグルーヴだが、それで調子を崩しては元も子もないし、レースで圧倒してやればいいだけだと幸福が背中を押したことで、エアグルーヴは記者会見も今では落ち着いて臨むことが出来ている。

それにエアグルーヴと同じようにフラッシュユライトが苦手なウマ娘たちも、彼女のお陰で変に構えることなくフラッシュユライトのお断りが出来るようになったので、色んな意味で良い方向に傾いた。

その代わりにフラッシュユライトが駄目なウマ娘たちに向けられる照明は一際明るくなるが、それはそれで注目を浴びている印象を与える。

「今回の意気込みはどうでしょう？ 前回は惜しくもウオツカさんに差し切られてしまいましたからね」

「ええ、そうですね。前回は私の負けです。しかし今回は負ける要素が自分でも見当たりません。よって、勝つのは私だと自信を持って言えます」

女帝からの勝利宣言。

こうした展開が好物のメディアにとっては、これだけで今回の記者会見に来た価値が上がる。

「彼女はこう言っています、いつも側で見ている伊藤トレーナーとしてはどうでしょうか？」

「そうですね……負けな準備はしてきました。なので負けることはないでしょうね。彼女はうちのチームのリーダーでもありますし、今シーズンチームで初のG1レースに挑みます。今シーズン初G1勝利をチームに持って帰るのは彼女で間違いないと思います」

おお、と記者たちの声があがる。

毎回G1レースは盛り上がるが、今回も同様……いやいつも以上に盛り上がるレースになるだろうと。

最後は一番人気のウオツカをセンターにして、その左に二番人気のエアグルーヴ、右に三番人気のダイワスカーレットという配置で写真撮影を行い、最後に出走する全員の写真撮影を終えて、合同記者会見は終了した。

「到着。お疲れさん」

「送迎、感謝する」

幸福の運転で寮まで戻ってきたエアグルーヴ。

助手席から降りると、幸福は助手席の窓を開けていつものを彼女へ手渡した。

それはウマ娘も大好きな黒糖を使用した黒飴で、幸福はお疲れ様という意味合いで良く自分が担当しているウマ娘たちに渡しているのだ。

「ふっ、いつもの黒飴か……ありがたく受け取るとしよう」

「おう。それじゃゆつくり休んでくれ。明日からレース当日までエアグルーヴのトレーニングはコンディション調整だけだ。くれぐれも怪我はしないようにな」

「ああ」

エアグルーヴが頷くと、幸福は助手席の窓を閉め、エアグルーヴに

軽く手を挙げて自分も自分が学園の近くに借りているマンションへ車を走らせた。

車の影が小さくなるまでエアグルーヴは彼を見送り、そのあとで貰った黒飴を口に含む。黒糖の優しい甘さがまるで彼みたいで、エアグルーヴは幸せそうに飴を転がしながら、尻尾を上機嫌に揺らして寮へ戻るのだった。

女帝の恋心

「ハナを進むのは得意の逃げを打ったダイワスカーレット！ レースも残り200！」

ワアアアツ！

「ウオツカ！ ウオツカだ！ ウオツカがここで上がってきた！ 並んだ！ このまま差し切るか!? ダイワスカーレットも譲る気はないぞ！」

ワアアアアアツ！

「凄い勢いで大外から上がってきたのは女帝だ！ 女帝エアグルーヴ！ これは完全に抜け出した！ 差し切ってゴオオオオオオツ！

今ここに最強の淑女が誕生しました！ 女帝エアグルーヴ！ 驚異の追い上げで見事レコードタイムで女帝の輝きを見せつけました！

2着はダイワスカーレット！ 3着はウオツカ！」

淑女たちの熱き闘いが、押し寄せたファンの大声援で終わりを迎える。

「かあ、マジかあ！ 完璧に仕上げて来やがったな、クツソソソツ！」

「いやいや、残り200切るまで分からなかったじゃないですか」

「んだとお？ あんだけ余裕に笑ってレース見てたくせによう！ このっこのっ！」

「うわつ、やめてくださいよ、安藤さん！」

コースに一番近い関係者が犇めく立ち見席で、安藤と幸福が戯れ合っていた。

安藤としては今回も自信があつたし、出走した二人も調子は良かった。

しかしそれ以上に仕上がっていたのが向こうだったということ。故に安藤は幸福に祝福という建前で渾身の熟練脇腹デユクシを見舞う。

「今回は負けたが、次は負けないからな」

「うちだって負けませんよ」

すると周りで見ていた他のトレーナーたちも、自分たちも負けないといい、皆が皆硬い握手を交わすのだった。

勝者に与えられる栄誉は何もウイニングライブでのセンターだけではない。ウイニングランや勝利者インタビュー、そして最も喜ばしいことがウイナーズサークルでのトロフィーの授与と優勝レイの授与だろう。また今回のヴィクトリアマイルでは優勝バ服も授与された。優勝バ服は勝負服の上から羽織れるマントである。

ウイナーズサークルとは本来の競馬では優勝馬表彰区画のこと。従来はスタンド内で表彰を行っていたが、ヨーロッパ流に観客が優勝馬やその関係者と身近に接することが出来るように設置された。

ウマ娘の世界のウイナーズサークルもそれと同じだが、少し違うのは優勝バが優勝レイや優勝バ服を羽織ってサークル内を歩き、ファンたちと交流することが出来るファン待望のひと時。

今回は優勝バ服もあることから、ウイニングライブのあとでも多くのファンがウイナーズサークルにやってきて、エアグルーヴの姿を一目見ようと集まっていた。

「凄くカッコよかったです!」

「私これからも応援してます!」

「ありがとう。その言葉に恥じぬ走りをこれからも約束しよう」
表彰式が終わり、サークル内をゆつくりと歩くエアグルーヴ。

そんな彼女へファンたちの応援や賛辞があちこちから聞こえ、その度に彼女は足を止めてファンたちへにこやかに言葉を返す。

優勝レイを首から掛け、優勝バ服を肩に羽織る女帝エアグルーヴ。そしてそんな彼女の左隣には女帝の杖たる幸福が寄り添っている。

彼女のその姿はまさに女帝であり、記者もファンもその姿が色褪せぬよう、カメラに収めていく。その際にはエアグルーヴもその場に快く立ち止まり、撮影しやすいようにしている。

当然、フラッシュライトはお断りしているため、調子が崩れる心配もない。

しかし、

「写真お願いしましゅっ！」

不意に下から聞こえた可愛らしい声とシャッター音。それと同時にフラッシュユライトが焚かれてしまった。

それでもエアグルーヴの悲鳴が聞こえることはない。

何故なら幸福が事故を装って自分を盾にして、彼女にフラッシュユライトが当たらないようにしたから。

「あはは、嬢ちゃん。撮影の邪魔をしてすまないなあ。でもエアグルーヴはフラッシュユライトが苦手だから、撮影の時のフラッシュユライトは遠慮してもらってるんだ」

フラッシュユライトを炊いてしまったのは、まだ小学校低学年ほどであらう鹿毛のウマ娘。

幸福はその子と同じ目線になるよう膝を折り、優しく注意する。すると少女はしよんぼりと耳を垂らしながらも、ちゃんと「ご、ごめんなさい」と謝った。

「うん、ちゃんと謝れて偉いぞ。いい子いい子」

幸福はそう言ってその子の首（頬の下辺り）をトントントンと軽く撫でる。

ウマ娘は首を撫でられるのが好きなので、その子も「えへへ……♪」と喜んだ。

「嬢ちゃん、カメラ貸してみ？」

「？ はい」

「じゃあちよつと失礼するぞ」

「びっ!？」

幸福は少女からカメラを預かってから、空いている片手を少女の腰に手を回してふわりと少女の体を持ち上げた。

「ほい、エアグルーヴ」

「ああ……私のトレーナーがいきなりすまん。許してほしい」

「え……え、え……？」

少女は困惑しながらエアグルーヴと幸福の顔をキョロキョロと交互に見る。

何故なら幸福が少女をサークル内に入れて、エアグルーヴに抱えさせたからだ。

「大切な小さなファンだからなあ。特別だぞ？」

「ほら、笑うといい。私と君だけの記念撮影だ」

「……うんっ！」

少女はエアグルーヴの肩に掴まり、カメラを構える幸福へ満点の笑顔に向けてピースサインを取る。

エアグルーヴも優しい笑顔を浮かべ、幸福は数回シャッターを押した。

その光景は周りで見守っていたファンや記者たちも微笑ましく思い、その時が一番シャッター音が響く時となった。

全ての行程が無事に終わり、エアグルーヴは学園の制服に着替えて幸福の運転で帰路につく。

車内では先程の少女の話題となった。

「流星の対応と判断だったな。フラッシュの盾になってくれたことも感謝する」

「ん？ ああ、あの時のあれね。相手は子どもだし、ああした方があの子にとっていい思い出になると思ってな。せつかく憧れの存在の写真を撮りに来たのに、その思い出の最後が注意されたことになるのは流星に可哀想だからなあ」

「確かにそうだな。しかし……」

「？」

ふと隣から冷ややかな視線が送られたことで、幸福は内心首を傾げる。

「いくら子どもと言えど、いきなり女性の腰に手を回すのは紳士がすることではないな」

「いやあれは……ちゃんと失礼って断りは入れたんだが……」

「それでもだ。せめてサークルに入れてやることを告げてから抱えるべきだったと思うぞ」

「……もし次にそんな機会があつたらそうするよ」

「そうしろ。たわけめ」

一先ずそれで会話は終わり、エアグルーヴは窓の外へ視線をやる。

(また私は余計なことを……)

そして、ついつい口にしてしまった小言に後悔した。

少女に悪気は一切なく、幸福の対応は己のトレーナー……杖として十分な対応だった。

苦手なフラツシユライトから卒なく守り、それでいて少女には紳士的な対応をしたのだから。

しかし、

(あんな大勢の前で、相手は子どもとは言え私以外の女の首を撫でるとは……しかも抱きかかえるなどと……くっ)

今のエアグルーヴは女帝の仮面を外した恋する乙女。

幸福が彼女の見ている前で他のウマ娘の首を撫でるのは前からある。チームのメンバーを褒める際や慰める際には良くしていることだ。首だけでなく、頭を撫でてくれと強請るメンバーもいるので、そうなるも幸福はその子の要望にしつかり応える。

そもそもメンバー同士の間でも幸福のナデナデテクは凄過ぎるといい意味で評判がいい。

その子その子の撫でられて嬉しい箇所を把握し、優しいながらしつかりとインパクトを持ったポンポンナデナデは魔性とすら言える。加えて頭の場合はウマ娘によって様々だが、アイネスフウジンやマーベラスサンデーは髪型が崩れ耳も触れるくらいクシャクシャツと雑にされるのを好み、ナリタタイシンやヒシアマゾン、セイウンスカイは耳に触れないよう丁寧にゆつくりと手櫛するように撫でられるのが好みだ。エアグルーヴを含め、カワカミプリンセスとゴールドシチーは後頭部から頭頂部間をワシワシと逆撫でされるのが好き。その際には耳も触れてくれると尚良。

故に先程の少女も撫でられた時は嬉しそうにしていた。耳がピョコンピョコンと跳ね、尻尾もリラックスし下がって左右に揺れていたし、何より表情が蕩けていた。

エアグルーヴは嫉妬してしまったのだ。名も知らぬ幼気な少女に。

何しろ別れ際、少女は乙女の顔をして幸福に手を振っていた。

(このウマ娘誑しめっ)

そもそも貴様が優しく格好良くて頼り甲斐があるからいけないのだ。

エアグルーヴはこめかみを押さえながら心の中でぼやく。

担当になった当初はこれまでのトレーナーたちより、明らかに新人で不慣れなものもあって頼りないと何度も思った。

しかしそれはレースにおいて新人というだけで、それ以外では養成学校出身というのもあつて元々頼り甲斐があつたのだ。

トレーニングメニューとその説明や解説は的確。ウマ娘に関する栄養学や心理学、身体学等々の知識も豊富で栄養指導や接し方、心の寄り添い方も申し分ない。

そして何より、ウマ娘は優しい人間を好む。そもそも優しい人間でないと、ウマ娘であれ他の動植物であれ何かの世話する職業には就けないだろう。

故にエアグルーヴ本人も常日頃から口調や態度は厳しいが、その裏にある彼女なりの優しさがあるので多くのウマ娘たちに慕われているのだ。

よつて幸福はウマ娘に好まれる人種であることが分かる。

だからこそ今があるのだが、エアグルーヴはこうも嫉妬するとは自分でも思わなかった。なのでこの気持ちとどう向き合えばいいのか分からない。

「あゝ……エアグルーヴ」

「……なんだ？」

「まだ時間あるし、どっか寄り道でもしないか？」

「……何の真似だ？」

「いやあ、帰ったらチームのみんなまで外出届出して部室で祝勝会する予定だろ？ その前に俺からお祝いになんか甘い物か小物でもプレゼントしたいと思つてな」

その言葉にエアグルーヴの胸の奥で鼓動がトクントクンと高鳴つた。

まるでレース前のファンファーレを聞いた時のように。

「……好きにしろ。しかしそう時間は取れんぞ。みんな私たちの帰りを待っているだろうからな」

「何かリクエストは？」

「そうだな……」

エアグルーヴは火照る頬に手をやりながら考え、すぐに小さく口端を上げる。

「……貴様が考えろ」

「うえ、マジかよ……そういうの考えるの苦手だからリクエスト訊いたってのに」

「何だ、出来ないのか？ 我が杖ながら嘆かわしいな」

「出来ないとは言ってねえ！ でも絶対文句言うなよな!?!」

「ふふ、さあな。それはその時になってみないと分からん」

エアグルーヴの言葉に幸福は悔しそうに唸り声を上げた。

（そうだ。考えろ。そうすれば今だけは、貴様の頭の中は私で一杯なのだから）

我ながら卑しくて狡いことをしているとと思うエアグルーヴだったが、それでも好いた男が一生懸命自分だけのことを考えているという甘美な悪戯がとても心地良く胸の奥を満たしてくれる。

嫉妬し、素直になれず、自分でも面倒くさい女だと思おうエアグルーヴ。

しかし、

（それでも私の傍に居続ける貴様がいけないんだぞ……たわけ）

この恋心が与える気持ち良さは嫌いではないエアグルーヴだった。

遊ぶこともトレーニング

「やりましたわー！ わたくしが1着ですわー！」

本日はオークス。

チームデネボラで唯一のクラシック期間にいるカワカミプリンセスが、その大舞台を制した。

チームのG1勝利二つ目。そしてカワカミプリンセスにとつては、エアグルーヴやメジロロードーベルと同じタイトルを取れたことがとてもとても嬉しく、その後のウイニングライブでもウイナーズサークルでも満点の笑顔が咲き誇っていた。

オークスが終わり、6月に入った。

6月の前半には安田記念。後半には宝塚記念とG1レースが続く。

「はい、到着。自由に過ごしていいが、怪我だけはしないように」

幸福の言葉にチームメンバーは揃って返事を返した。

今日は休養日……というわけではなく、本日は土曜日だが座学がない、普通の学生であれば休日だ。

こういう日は一日丸々トレーニングを行えるため、トレセン学園の各トレーニング施設に多くのウマ娘たちが集まる。

しかしそうなるといくら広いトレセン学園でも混雑するため、事前に使いたい施設にはそのトレーナーが予約を入れていなのだ。

そしてチームデネボラも施設を使う時はあるが、大抵は学園の外へ繰り出してトレーニングを行う。

トレーニングと言ってもリフレッシュも兼ねているので、ウマ娘たちからすれば遠足みたいなものだ。例えばテニスコートだったりボーリングだったり登山だったり、幸福が担当バを連れて行く場所様々。なのでチームのみんなはそうした日を毎回楽しみにしている。あのエアグルーヴでさえ、こうした時間が必要だと言うくらいだ。

今回、幸福がこういう時のために使う大型バンを運転して、みんな

を連れてきた場所は海。勿論、トレーニングということなのでみんな服装はジャージだ。

6月なので海開きもまだ先だが、人気が少ない砂浜を走るなり、仲間とビーチバレーをしたり、海釣りをしたりとやれることはたくさんある。

それに――

「ほら、カールも遊んでもらってこい」

「ワンツッ！」

――こういう日は幸福が飼っている愛犬『カール』も一緒なのだ。カールは北海道犬によく似ているが、実際のところの犬種は分かっている。いない。

何故ならカールは捨て犬で、カラスか何かに襲われて怪我をしていたのを、たまたまその日学園の外に出掛けていた幸福とエアグルーヴが見つけたのだ。

幸い怪我は軽かったものの、診てくれた獣医が院のゲージがいつぱいで預かれないので、そちらで預かってほしいとお願いされたのが事の始まり。

最初はエアグルーヴもどうしようかと考えたが、飼い主が見つかるまで特別に学園に許可を得て彼女が預かることにした。

カールという名はエアグルーヴが授けたもの。預かるにしても名前がないと何かと困るからだ。因みに名前のカールはその子犬がメスだったのもあり、彼女の母『ダイナカール』から頂いたそう。

そしてとうとう飼い主が現れなかったため、ならばと幸福が飼い主になることになったのだ。幸い彼が借りているマンションはペットを飼うことも可能だったし、カールも幸福に凄く懐いていたし、エアグルーヴも『まあ、貴様になら……』とカールを託した。

今ではすっかりチームデネボラのアイドル犬。大きく健やかに成長し、エアグルーヴにも相変わらず凄く懐いている。

「よし、では走るか。カール」

「ワンワンツッ」

「はは、ではついて来い！」

「ワンツ」

エアグルーヴはカールと共に砂浜を駆け出した。

セラピードッグがいるくらいなので、カールもウマ娘たちに安らぎを与えてくれる存在なのだろう。

「私は海釣り一択♪ 大物釣り上げるために、泳がせ釣りの魚も準備しといたしね♪」

セイウンスカイはブレずに釣り竿やら諸々を持って、いいポイントへ向かった。

「よくしっ！ 潮干狩りすっぞ〜！」

「マーベラスな貝をたくさん取ってネイチャやマヤノを驚かせよー！」

「今夜はアサリご飯なのー！」

「気合とど根性でハマグリをたくさんゲットしてみせますわ！」

一方でヒシアマゾン、マーベラスサンデー、アイネスフウジン、カワカミプリンセスは幸福の奢りでたまたま開催していた潮干狩り大会に参加。

そして、

「トレーナー、パラソル差して」

「トレーナー、日焼け止めクリーム頂のところに塗ってくれない？」

ナリタタイシンはパラソルの下で音ゲー三昧で、ゴールドシチーは幸福に甘える。

「荷物は俺が見てるから、二人も遊んで来いよ」

「遊んでるじゃん。それにアタシそもそも今日はトレーニング休みだし」

流星はナリタタイシン。どこに行ってもブレない眠れる獅子である。

「アタシはトレーナーが日焼け止めクリーム塗ってくれたらエアグルーヴたちと走ってくるよ」

そしてゴールドシチーは相変わらずだ。

「つたく……ほら髪上げろ」

「ふふっ、サンキュ♪ ムラなく塗ってよね」

「人気モデルを日焼けさせちゃ俺にクレームが来るからな。しっかりと塗ってやるよ」

幸福が慣れた手付きでゴールドシチーの項にクレームを塗ってやる。

すると流石のゴールドシチーでもくすぐったくて「ひゃあ」と小さな悲鳴をあげた。

「我慢しろ。頼んだのはシチーなんだからよ」

「分かってるけど、やっぱちよつとね……うひゃっ」

「読モがしちやいけない声してない?」

「仕方ないじゃん。トレーナーの手冷たかったんだから……てか、今は読モ関係ないから」

ナリタタイシンのツツコミにゴールドシチーはそう返しながらも、幸福から項を撫でられてご満悦である。

「貴様ら……何を戯れ合っている?」

「ワフツ」

そこへエアグルーヴとカールがドス黒いオーラを纏って戻ってきた。

エアグルーヴとカールからすれば、大好きな人が他の女と戯れているようにしか見えなのだ。

「何って日焼け止めクリーム塗ってもらってるだけだよ。エアグルーヴも塗ってもらえば?」

「な、わ、私の肌はそんな軟な肌ではない!」

ゴールドシチーにエアグルーヴは顔を赤くして返す。

因みにナリタタイシンはそんな二人のやり取りを気にすることなく、ウマ娘専用イヤホンを付けてノリノリに音ゲーをプレイ中。

「元々ウマ娘の肌は人間より焼けにくいからな。シチーみたいに見られる仕事をしてれば気い使うだろうけどな……ほい出来た」

「ありがと、トレーナー♪ んじゃ、エアグルーヴ、カール。走ろうよ。

アタシせっかく仕事もオフでチームのみんなと遊べる機会だしさ」

「……それもそうだな。ならついて来い」

「ワンツ！」

「へえ、面白いじゃん！」

そして走り出す美女二人と一匹の美獣（びじゅう）であった。

お昼時になると、担当バたちはお腹を空かせて幸福がいるパラソルへと集まってくる。

まるで腹を空かせた子どもが親の元へ集まるように。

今年はゴールドシチーも増えたことから、レジャーシートは一回り大きな物にし、パラソルも大きめのを四本用意した。

なので目立つ。しかも彼女たちは見目麗しい上にスターウマ娘だ。幸福も雑誌等に何度も載っているため二重三重の意味で目立っている。

「あの、ゴールドシチーさん握手してもらってもいいですか？」

「俺、ヒシアマゾンの大ファンなんです！」

「マーベラスサンデーちゃん尊い！ マジマーベラス！」

当然海に来ていたファンたちがわあつと押し寄せるが、幸福は自分の担当バたちがみんなから愛されてる光景を見て誇らしく思っている。

しかし、

「あの……伊藤幸福トレーナーさんですよね？」

「はい、そうですか？」

「わあっ！ あのあの、私、伊藤幸福トレーナーさんの大ファンでして！ 良かったら一緒に写真撮ってもらえませんか!？」

幸福も幸福で彼の女性ファンに囲まれてしまった。

彼はそんなことないと言うが、彼はそれなりに甘いマスクをしている。

チームデネボラが注目を浴びた去年には、リギルトレーナー、スピカトレーナー、そして幸福というイケメントレーナー特集が組まれたくらいだ。

硬派で強面ながら担当バたちのファンには微笑むリギルトレーナー。

派手な見た目とは裏腹にレースや担当バたちのことになる真剣になるスピカトレーナー。

そして誰に対してもいつも笑顔でたおやかで溢れる清潔感。なのに普段の口調はちよつと雑。しかしその雑さがまたいいという評価を受けた幸福。

その特集記事が掲載された増刊号は女性を中心にかなりの部数を売り上げたので、今シーズンから春と秋にはイケメントレーナー特集が生まれ、夏と冬には美女トレーナー特集が組まれる予定なのだろう。ご贖記者・乙名史悦子談。

『っ!!』

当然、幸福に群がる女性ファンを黙って見ていられるエアグルーヴとゴールドシチーではない。

すかさず目配せし、

「トレーナー！ マーベラスお腹減ったー！ ご飯ー！」

「お恥ずかしながら、わたくしもお腹が空きましたわあ……」

「おお、了解。すみません皆さん、そろそろお開きということで。これからも彼女たちのこと応援よろしくお願いします」

無邪気なマーベラスサンデーとカワカミプリンセスという刺客を送り、幸福の奪還に成功。

「女帝と人気読モは自分の手を汚さない」

「汚い、流石恋する乙女きたない」

ヒシアマゾンとセイウンスカイがコソコソとそう話していたが、女帝と人気読モの耳はバツチリキャッチしている。

「コホン……ほら、手洗いに行くぞ。特にアマゾンたちは入念に手を洗え」

『はーい』

◇

みんなが手を洗って戻ると、幸福が大風呂敷を解いてお重の準備をしていた。

それは全て幸福が前の日から下ごしらえをして早朝に仕上げた手料理ばかり。

ソフトボールサイズのおにぎり（ナリタタイシンには普通サイズ）に、骨付き唐揚げ、アスパラベーコン巻き、つくねハンバーグ、甘い厚焼き玉子と普通の出汁巻き玉子。レタスと人参を入れたツナサラダに切り干し人参。そしてデザートにはスーパーで安く仕入れた大粒のブドウがいくつも用意されていた。

『おぉー！』

「ほい、じゃあ手を合わせて……頂きます！」

『頂きまーす！』

ここで我先にとはならない。最初は必ず幸福とエアグロウが共にそれぞれの紙皿へ各々がほしい物を取ってやるのだ。こうした秩序正しいところがチームデネボラである。

「んー、マーベラス！ とっても美味しー！」

「ほっぺたが落ちてしまいますわ〜♪」

おにぎりを頬張り、満面の笑みを浮かべるマーベラスサンデーとカワカミプリンセス。

おにぎりの中はおかかや昆布で、わかめのふりかけを混ぜ込んだものもある。

「トレーナーさんって本当に料理上手だよね〜」

「そうなの。だから毎回楽しみなの♪」

「アタシも負けてらんないな！」

「出たよ、アマゾンさんのタイムン魂」

他の面々も思い思いの物を口に運んでその味を堪能。

「カールはいつものカリカリと骨な」

「ワンツ♪」

「うわ、トレーナーの手料理とか最高なんだけど……」

「早く食わんとなくなるぞ」

「こちらもちちらでほのぼの。ゴールドシチーに至っては今日が初なので、とても感動していて幸福の手料理をウマホのカメラで撮影中。後にウマッターやウマスタに上げるのだろう。」

「毎回余ってもいいくらい作ってくるが、不思議と余らねえんだよなあ」

「ふっ、これだけ美味しいんだ。余るわけがないだろう」

「嬉しいねえ……作った甲斐があるよ」

「トレーナー、今度アタシが仕事行く時にお弁当作ってよ♪」

「ゴールドシチー、こやつの仕事を増やすな」

「だってロケ弁って外れ多いんだもん」

「フードロス減らすためにも我慢して食ってくれ」

「ちえり、残念♪」

そうは言うゴールドシチーだが、幸福に頭を撫でられたのでご機嫌である。当然、エアグルーヴとカールは物凄い顔で睨んでいるのだが、幸福は知らない。

その後も夕方までみんなは一足早い海を満喫した。

因みに潮干狩りは大漁だったらしく、夜は夜でみんなしてアサリチャーハンやハマグリ焼きを部屋で堪能したそう。

ウマ娘はみんな女の子

安田記念。

6月の前半に東京レース場で行われる最強マイラー決定戦。

レースの目玉はなんとと言ってもURR Aファイナルズマイル覇者の女帝エアグルーヴだ。

先日のヴィクトリアマイルでウオツカを破り、最も勢いのある今回の一番人気。

一方先の敗戦から並々ならぬ闘志を燃やすウオツカは僅差の二番人気。

そして三番人気はアグネスデジタル。普段は推しの尻尾を追い掛けるのに全身全霊なウマ娘だが、その実彼女の戦績は素晴らしいの一言。ファンの間では『オールラウンダー』や『万能の名バ』と称される。

「大櫓を抜けて最後の直線コースへ！ ハナに立っているのは変わらぬぞサクラバクシンオー！ しかしその差は僅か！」

「さあ、残り僅かとなった安田記念！ どのウマ娘が来てもおかしくない体勢に入っている！ ウオツカ！ やはりここで上がってくる！ その外からはオールラウンダーアグネスデジタル！ 驚異的な追い上げ！」

「しかしその内から隙間を縫うようにやってきたエアグルーヴ！ 女帝エアグルーヴが来たぞ！ アグネスデジタルも粘っている！ ウオツカも負けてない！」

「三人並んでゴオオオオオオ！ これは分かりません！ 体勢的にアグネスデジタルが有利か!?!」

ワアアアアツ!!!

掲示板には写真判定の文字。鎬を削った三人のウマ娘たちは息を整えながら、その時を待つ。

「はあはあ……くあくつ、早く判定終わってくれえ！」

「ぜえはあぜえはあ……か、勝ったら、トレーナーさんから新しいペン

タブ……それで更なる尊みを……!」

「ふう……はあ……貴様は相変わらずだな、デジタル……ふう」

ワアアアアツ!!!

『っ!』

「エアグルーヴ! 安田記念を制したのはURAファイナルズマイル女王、女帝エアグルーヴです! 2着はアグネスデジタル! 3着はウオツカ! ヴィクトリアマイルに続き、エアグルーヴが連勝を飾りましたっ! この女帝にマイル戦で膝を突かせるウマ娘はいないのかっ!」

ハナ差の1着。しかし女帝は見事に昨年の雪辱を晴らした。

「見たか……これが、女帝の走りだっ!」

感極まり、観客席に向かって手をかざすエアグルーヴ。

今日一番の歓声が東京レース場を揺らした。

「くあくっ! マジかよっ! 連敗じゃねっ! しかもまた3

着かよっ! またスカーレットのやつに嫌味言われるうっ!」

ウオツカは頭を抱えながら、ターフを転げ回る。

「……ペンタブ……尊みが遠退く……ガクリッ」

アグネスデジタルに至ってはターフの上で明後日のジョーみたいに真っ白に座り込んだ。

「貴様ら、何をしている。ファンにそんな不甲斐ないところを見せるな。胸を張り、己を応援してくれたファンたちに最後まで応えろ」

エアグルーヴが一喝するれば、ウオツカもアグネスデジタルもすぐに姿勢を直し、スタンドに押し寄せたファンに手を振るのだった。

安田記念の翌日。

レースの翌日であろうと、この日は月曜日であり、座学もある。

そしてエアグルーヴはそれが終われば、今度は生徒会としての役目が待っている。

「昨日はおめでとう、エアグルーヴ。友として、心からの賛辞を君に送ろう」

「ありがとうございます、会長」

「見ていて私も思わず血が騒いだぞ、エアグルーヴ」

「ふっ、ブライアンにしては珍しいな。貴様なりの賛辞として受け取っておく」

生徒会室で送られたシンボリドルフとナリタブライアンの祝いの言葉に、エアグルーヴは柔らかい笑みを浮かべて返した。

「それにしても、まだまだトウインクルシリーズには君を始め、猛者が多いな。そんな猛者がドリームシリーズに入ってくるのかと思うと、うかうかしてられない」

「そうですね。皇帝を超える女帝が誕生するのも時間の問題でしょう」

「君もなかなか言うようになったじゃないか」

「会長には負けますよ」

ふふふ、あはは、と穏やかに笑う皇帝と女帝。

そして、

「皇帝と女帝を食らう怪物というのも、有りだな」

ふふんとシャドーロールの怪物がほくそ笑む。

この中でシンボリドルフ以外はまだトウインクルシリーズで走っている。次の宝塚記念ではこのシャドーロールの怪物も出走することから、既に各メディアは盛り上がっている。

今シーズン、学園内模擬レースも含め無敗の女帝。大阪杯と春天を制して今年の春三冠を狙うシャドーロールの怪物。更にそこに前年覇者でレースレコード持ちのサイレンススズカが立ちはだかる。

無敗の女帝が無敵の怪物か。はたまた異次元の逃亡者が逃げ切るか。

春を締めくくるレースとして、これほどまで盛り上がるのは必然だろう。

「まあ先ずは女帝から食ってやることにする。女帝の血肉はさぞ私の渴きを潤してくれるだろうからな」

「やれるものならやってみるがいい。今の私に不安要素は一つもないぞ」

睨み合い、不敵な笑みを浮かべる両者。そんな二人をシンボリドル

ルフは『切磋琢磨、情意投合』と微笑んだ。

そこへノックの音がトントントンと控えめに響く。

するとシンボリルドルフの耳が僅かにピンと立った。

「どうぞ」

努めて平静を装いシンボリルドルフが返事をすれば、開いたドアから男のトレーナーが入ってくる。

「失礼する。ルドルフ、ブライアン……今日のトレーニングで学園のプールを使用する予定だったが、残念なことに排水設備の急な点検が入ってしまったようだ。よって今日のトレーニングは学園外のプールに移動して行うことにした。そちらの仕事が終わり次第用意して正門前に集合してくれ。学園指定の水着も忘れるなよ」

この男はチームリギルのトレーナーである岡部正巳（おかべ まさみ）で、シンボリルドルフを無敗の三冠バ……そして八冠の皇帝にし、ナリタブライアンもまた無敵の三冠バにしたトレセン学園屈指の名トレーナー。歳は40歳。

体格も良く高身長。短めのスポーツ刈りで強面。いつもディープグリーンのカジュアルスーツを着用しているのもあって、初見では先ずそっち系の人間に見えてしまう。しかし老若男女問わず優しく接することから、そのギャップの虜になって学園内に非公式ファンクラブまであるほどの伊達男だ。

「ああ、分かったよトレーナー君。わざわざ伝えに来てくれてありがとう」

「分かった」

「何、礼なんていらん。ルドルフの顔を見るとブライアンがサボってルドルフや副会長を困らせていないか確認するついでだ」

「トレーナー君……君って人は本当に……ふふっ♪」

「……チツ」

岡部のストレートな物言いにシンボリルドルフは思わず顔をほころばせ、ナリタブライアンは鬱陶しそうに舌を打つ。

「副会長も、いつもうちのブライアンがすまないな。出来るだけサボらせないようにするから、これからも目を光らせてやってくれ」

「はい。こちらこそいつもブライアンの確保捕縛をありがとうございます。お陰で助かっています」

それだけ言葉を交わすと、岡部は「では失礼した」と告げて足早に生徒会室をあとにした。

岡部が去ったドアをシンボリルドルフは彼の足音が小さくなるまで見つめ、その顔は皆の皇帝ではなく、一人の恋する乙女であった。「また皇帝の心がトレーナープリズムパワーによってルナティック可愛子ちゃんにメイクアップしたな」

「ブライアン、最早何語なのかも分からん文章を作るな」

ナリタブライアンは『なか〇し』の愛読者である。同志はメジロライアンとミホノブルボン。

「会長……会長、戻ってきてください」

「ルナ、トレーナー、しゆき……」

「知っています。バレています。そしてルナっています」

説明しよう。シンボリルドルフはトレーナーを愛するあまりルナってしまうと語彙力が低下するのだ。

「はっ……コホン、すまない。私としたことが」

「いえ、近頃は駄洒落を言う頻度よりルナる方が多いですからお気になさらず」

「そ、そんなにか？ というかルナるとは？」

「ああ、私らがいようがいまいが、トレーナーの前ではルナーモードに切り替わることが近頃の会長は多いからな。まあ大抵はトレーナーが皇帝にだけ送る愛情深さを受けたらって感じだがな」

「マナーモードみたいに言わないでくれないか!？」

ナリタブライアンにハッキリと指摘されると、シンボリルドルフはツツコミを入れながらも耳を垂れさせ、兩人差し指を突き合わせながら「だって、好きなんだもん」と頬を膨らませる。

「いえ、私もブライアンもそれが悪いとは言ってません。寧ろ会長が心を許せるお相手がいることに安心しています」

「私としては会長たちみたいな大人な展開より、ベタな展開が見たいものだな。会長がトースト啜えたまま走って、道端でトレーナーとぶ

つかるとか……そんなのが見てみたいな」

「いや、ウマ娘の速力で人とぶつかったら大惨事になるぞ」

「トレーナーとぶつかってルナがトレーナーを押し倒してウマ乗りに……きやー！ ルナ大・胆！」

「ですから会長、ルナらないでください。ブライアンも会長の乙女心を刺激するな」

恋する気持ちは十分に理解するエアグルーヴだが、これはこれで生徒会室がカオスになるので困る。シンボリルドルフがルナつても手と目は書類の山を猛スピードで処理しているのが流石だが、エアグルーヴは未だにそのギャップに慣れない。

これならまだ前のようにシンボリルドルフが冷房いらすの駄洒落をいきなり言い出す方がマシだ。

前にナリタブライアン本人の前で、

『下着を嫌がるブライアン。ブラ、いやん』

なんてドヤ顔で披露した時に、ネタにされた本人が本気で会長の顔へシャドーブレイクを叩き込もうとしていたのを止めたあの時が懐かしく思えるほどに。

「じゃあ代わりにエアグルーヴはどうなんだ？」

「……は？」

ナリタブライアンから急に話題を向けられ、思わず素っ頓狂な声が出てしまうエアグルーヴ。

「だから、エアグルーヴはそっちのトレーナーとどこまでいったんだ？ 手は繋いだのか？ それとも服の袖裾か後ろの裾を掴むまでか？ ま、まさか指と指を絡め合う恋人繋ぎまでしてしまったのか!？」

「……お前の基準は少女過ぎる」

「なっ!? まさかチュウまでしてしまったのか!? チュウするとコウノトリが赤ちゃんを運んで来るんだぞ!!? いや、トレーナーなら収入もあるから大丈夫だろうが、やはり色々と問題があるはず……」

「……お前は今まで保健体育の座学で何を学んできたのだ？」

「保健体育なんて寝ていてもいい授業だ」

エアグルーヴのやる気が下がった。

そこへまた生徒会にノックの音が響く。

今度はエアグルーヴが耳をピンと立たせる番だった。

即座に皇帝スイッチがオンになったシンボリドルフが返事をすると、エアグルーヴの想い人こと幸福が中へ入ってくる。

「お邪魔しま〜す」

「わざわざ生徒会室まで何の用だ？」

素っ気ない態度でも、エアグルーヴの尻尾は幸せそうに揺れていた。

「昨日帰ったら、実家から在庫品押し付けられててな。んでジャム作ったからお裾分けだ」

「ほう、バラのジャムか。ありがたい。生徒会室にあるのも少なくなってきたところだったのだ」

幸福からバラのジャムが入った瓶をいくつか受け取ると、エアグルーヴはほわわとティエムオペラオーでもないのに周りに花びらが舞う。

彼の実家は大型園芸店。時期が終わりかけになって売れなくなつた無農薬栽培の花を幸福に良く送りつけてくるため、毎回そうなるとうとうしてジャムにしたりお茶にしたり、押し花の葉やドライフラワーにしたりするのだ。量が多いとウマ娘たちの寮へ彼女たちが普段使う浴槽へ浮かべる用として届けたりする。香りもいいため意外と好評。

「エアグルーヴのトレーナー君が作る花のジャムは、私を含め生徒会の皆が喜んでいる。今回もありがたいがたく受け取るよ」

「私は甘い物はそんなに食べないが、このジャムは甘さ控えめで好きだぞ」

「そう言ってもらえると作り甲斐があるよ。それじゃ、邪魔したな。生徒会の仕事頑張ってくれ。あ、俺これから理事長やたづなさんにもジャム渡しに行くんだが、なんか二人のところに持ってく物あるか？」

「ああ、ならばこちらの確認済みの書類を持っていってってくれると助かる。今持ちやすいように紙袋へ入れてやる」

「いつもありがとな」

「それはこっちのセリフだ、たわけ」

このやり取りを見るシンボルドルフとナリタブライアンはまるで二人が熟年夫婦のように見えた。

エアグルーヴのやる気が上がった。

チームデネボラの金曜日

トレセン学園で過ごすウマ娘は、座学に加えてレースに向けたトレーニングを日々行っている。

しかしそれ以外にも大切なことがある。

それは、

「ほら肘が曲がってるぞ！ 表情を崩すな！ 背筋も伸ばせ！ 前を見ろ！ 笑顔を忘れない！」

ウイニングライブのダンスストレスと、

「アイネス！ いつもの口癖出てる！ マーベラスもただ大声を出さずんじやなくて、音程を意識しろ！」

ボーカルレッスんだ。

ウイニングライブはレース場まで応援に来てくれたファンたちへ、ウマ娘たちがする恩返し。

レース競技ウマ娘がレースが行えるのもレース競技場が運営出来るのも、全てファンがいるから。

だからこそファンの声援に走りど歌とダンスで応え、誰よりも早く、誰よりも輝いてこそ、真の愛されるウマ娘となるのだ。

「ほい、一旦休憩」

幸福の号令にチーム一同はふうと一息つく。

各トレーナーや他チームの中にはレッスンに至っては指導員を雇っている場合もある。

しかし幸福みたいに自ら指導するトレーナーも一部いるのだ。こうすることで指導員を雇うコストを節約して、他のことにそのコストを割けるといったメリットがある。

幸福の場合、最初の頃は指導員を自腹で雇っていたが、自分がうまぴよい伝説をやることになったのをきっかけにこちらの指導もすることにした。幸い体を動かすのも歌を歌うのも好きだったし、トレーナー業をしているとなかなか体を動かす機会やストレス解消が出来ない。

なので自分の健康や体力維持にも繋がるので一石二鳥なのだ。

「麦茶はたくさんあるが、ダンスレッツスン組はがぶ飲みするなよ。このあともたんまり踊るんだからな。ボーカルレッツスン組はプロポリス喉スプレーしてケアだ」

幸福の言葉にボーカルレッツスンのエアグルーヴやヒシアマゾン、ダンスレッツスンのゴールドシチーはしつかりと返事をするが、他の面々はその顔に『うへえ』という文字が浮かんでいる。

「トレーナーさん、セイちゃん、このまま踊り続けてたら脚が棒になっちゃおうよ?」

「へえ、脚が棒になるのか。是非とも変化の過程を見てみたいな」

「うう、この時のトレーナーさんってスパルタだよお」

「終わったらご褒美があるんだけどなあ? そうかあ、ウンスはいらねえかあ。残念だなあ。せつかく駅前の人気店の高級人参プリンを予約して用意しといたのになあ」

「にやははく、何言ってるのかねトレーナーさん。ウマ娘はご褒美があるって頑張るんだぞ?」

誠に現金なセイウンスカイであった。

「えつと、ここでターン……わつとつと!? うう……やっぱりちよつとよろめいてしまいますわ」

「マーベラス、そこ得意♪ くるくつしてしてマーベラス! つて感じにやれば出来るもん!」

「感覚的過ぎてカワカミちゃんの頭にハテナマーク浮かんでるの……」

こっちはこっちで和気あいあいとしている。

「ぷはあ……冷えた麦茶って最高だねえ!」

「アマゾン、飲む前にスプレーしろ。声が枯れたら大変だぞ」

「このヒシアマ姉さんがそんな軟な喉してるわけないだろ?」

「いやケアはしといた方がいいって。ほら、モデルで姿勢キープするの慣れてるアタシだって、こうやって冷やしたりしてるんだから」

「わあつたよ……」

「ゴールドシチーが言うと言得力が違うね」

そしてこちらはこちらでついついケアを怠りがちなヒシアマゾン
をエアグルーヴとゴールドシチーが注意し、そんな三人をナリタタイ
シンは麦茶で喉を潤しつつ感心して眺めている。

「よし、じゃあもう一度頭から！ 3……2……1！」

時刻は夕方。

ダンスレッスンとボーカルレッスンを終えたチームデネボラの
面々は制服に着替え、チームの部室へと引き上げてきた。

いつもならばその場で解散となるが、今日は金曜日。そしてチーム
デネボラは毎週金曜日には部室の掃除を行うのである。

ただ今は、

「ほれ、カワカミ。届いたぞ」

「まあまあまあ！ わたくしのぱかプチですわ！ これでやっど皆さ
んとお揃いになれましたわー！」

カワカミプリンセスのぱかプチのサンプル品が幸福の元へ届いた
ので、そのお披露目中。

ぱかプチとはそのウマ娘をモデルに玩具会社が制作したぬいぐる
み。G1勝利やファンからの強い要望があると制作されるため、今回
初めてカワカミプリンセスのぱかプチが制作されたのである。因み
にぱかプチは勝負服バージョンとトレセン学園制服バージョンの二
種類と大小の二サイズあり、表情のバリエーションも何種類がある。
いつも送られてくるサンプル品は勝負服バージョン。

「どうだ、どこかここは変えてほしいところとかはないか？」

「ありませんわ！」

「ん。ならそれで先方には返事しとくな」

「はい！ ああ、これでやっど皆さんと一緒にわたくしのもトレー
ナー室に飾れますわ」

「おいおい、カワカミもトレーナー室に飾るのか？ いいんだぞ、自分
のところに持って帰って」

「嫌ですわ！ これは親愛なるトレーナーさんがいるトレーナー室に
飾るのが一番ですの！ ずっとそう出来る日を待ち望んでいたの

すからー！」

「ああ、分かったよ」

カワカミプリンセスの有無を言わせぬ力説に幸福は苦笑いで折れる。

他の面々は既にトウインクルシリーズで活躍しているため、ぱかプチが制作されており、サンプル品は全てトレーナー室に飾ってあるのだ。

最初はエアグルーヴがやったこと。自分で自分のぬいぐるみを持つているのはナルシストっぽいからと、トレーナー室の日が当たらず、トレーナーが使うデスクの向かい側にある背の低い本棚の上に飾った。

するとあとから加入したメンバーも『なら自分のも』とエアグルーヴの真似をしたのだ。正直なところ、みんなもエアグルーヴと似たような意見で、ただ寮室の押入れに入れておくよりはいいだろうとトレーナーに押し付けた感じ。内ヒシアマゾン、アイネスフウジン、ナリタタイシンは既に前トレーナーにプレゼントしていたが、他から貰ったぱかプチを幸福に渡し、ゴールドシチーは加入したその日の内に幸福へ自宅用とトレーナー室用とプレゼント済み。

なのでずっと自分のぱかプチがなかったカワカミプリンセスは、みんなと同じように飾れる日を待ち望んでいたのだ。

「じゃあそのカワカミプリンセスは掃除が終わったら俺が預かるな」
「是非そうしてくださいな♪」

そしてやつと部室の掃除が始まる。

毎週掃除をしているのでこれといって目立った汚れはないため、軽く床を掃いて、窓を拭き、ゴミ袋にゴミを集めてゴミ捨て場を持っていくだけ。

一部を除いて。

「セイウンスカイ……どうしたらこうもロッカー内が乱雑になる？」
「にゃはは、どうしてですかね？ きつといたずら好きの妖精さんが、セイちゃんのロッカーに集まって来ちゃうのかな？」

セイウンスカイのどこ吹く風に、エアグルーヴは軽い頭痛がする。何せセイウンスカイのロッカーには、釣り竿やら釣り具やらは勿論、座学で使うプリントやドリルといった物がどっさりと入っているのだから。

「こうした物は寮の自室に持って帰って予習復習に使えと言っているだろう」

「え、でも全部覚えてますし、理解もしてますよ?」

「そうだとはいえ、勉強はしっかりしろ。お前は要領が良くて頭の回転が早いんだ。ならば予習復習することでその才が更に伸ばせるだろう」

「セイちゃんは程々でいいのです」

「ああ言えばこう言いおって……!」

チーム一の問題児セイウンスカイはエアグルーヴを翻弄する天才だ。しかし本人のその憎めないキャラクターが人を惹きつける。こういうところはどこことなく幸福も似ていたりする。

「まあまあ、エアグルーヴ。その辺にしとけ。いつまで経っても終わらないぞ」

「……ああ、そうだな。セイウンスカイ、ロッカーに不必要な物は全てお前のカバンに詰め込むからな」

「はいはい♪」

エアグルーヴはそう言うが、なんだかんだ釣り竿や釣り具はそのままにしてくれるというのが優しいところ。

口うるさくしていても、結局はその本人が大切にしているものに対しては決して口出ししないのだ。アグネスデジタルのように学園内に腐属性本を持って来る場合は、いくらその子の趣味でも没収するが。(放課後に必ず返すプラス説教)

部室の掃除(主にセイウンスカイのロッカー整理)はエアグルーヴが驚異の手捌きであったという間に終わった。

あとは解散するだけだったが、幸福が「門限まで時間もあるし、折角だから飯でも行こうか」と言い出したことで、みんな揃って近場の

定食屋へ向かう。

そこは幸福の叔父が営む定食屋と雰囲気似ており、幸福が地方からこちらにやってきて一番鼻屑にしているお店だ。

「いらっしやいっ！ おう、来たか！ 空いてる席に座ってくれ！ どうせ今の時間帯は暇してるからな！」

店に入ると中年男性の店主が威勢の良い声と豪快な笑顔が出迎えてくれる。

それに皆は笑顔で返し、空いている大テーブルに座った。

今は夕方。この定食屋は駅から離れているのもあって、この時間帯はトレセン学園の関係者やウマ娘たちしか利用しないのだ。

それでも店主の心意気から、トレセン学園の生徒には無料大盛りサービスをしてくれる上、学生割引でどの定食でもワンコインで食べられる。ただしどこかの芦毛の怪物と日本総大将の場合は大盛り無料でも10合までと制限が付く。因みにその2名専用の丼と炊飯ジャーもあるくらい。

「俺が奢るから好きなように頼んでいいぞ」

幸福がそう言えば、みんなは笑顔で返事をしてメニュー表を眺めた。

「アタシは野菜炒め定食かな。ご飯少なめの人参多めで♪」

「アタシは……やっぱりカツ丼だな！ 大盛りで！」

即決するゴールドシチーとヒシアマゾン。

「わたくしは……デミグラスハンバーグ……いえ、それは前回頂きましたし、今回はこちらのトマトソースハンバーグに……」

「カワカミちゃん、ならマーベラスと半分子する？ アタシもハンバーグ食べたいから！」

「まあ！ 是非お願いしますわ！」

「わはあ、やっぱりアタシってマーベラス♪」

カワカミプリンセスとマーベラスサンデーは仲良くそれぞれのハンバーグをシェアすることに。

「あたしはミックスフライ定食にするのー♪」

「ほうほう、ならセイちゃんもそうしようかな」

「アタシもそれにする。こここのエビフライ大つきくて好きなんだよね。ご飯は少なめで」

アイネスフウジン、セイウンスカイ、ナリタタイシンは仲良く同じメニューを頼む。

「エアグルーヴは？」

「そうだな……この前のチーズハンバーグ定食も美味だったが、今回はオムライスにしよう」

「おー、俺と同じじゃん。流石俺らって感じだな」

「たわけ……たまたまだ、たまたま」

そうは言っても偶然自分が食べたい物が幸福と被ったエアグルーヴは、そっぽを向いていても耳はピコピコと嬉しさが隠せていない。

当然ゴールドシチーから「ふーん？」と意味深な視線を受けたエアグルーヴは、それを誤魔化すようにみんなの分のお冷を汲みに席を立った。

それをゴールドシチーが逃さない。

「良かったね、エアグルーヴ。トレーナーと同じ物が食べれてさ」

わざわざ自分もエアグルーヴの手伝いを装いながら、コソツと耳打ちしてくるゴールドシチー。

「うるさい。いちいち言うな」

「耳は正直だよ？」

「……見るな」

「あはは、可愛いんだ♪ でもアタシも負けないからね♪」

「ふん」

その後、それぞれ頼んだ料理を食べ、みんなはその味に舌鼓を打った。

食事中、ゴールドシチーが自分もオムライス一口と言って幸福にアーンをさせるといふ強かな戦法を打ってきた。

しかも幸福も幸福で「仕方ねえな」と言って食べさせてしまうのだから、エアグルーヴは物凄い勢いで幸福を睨み、そんなエアグルーヴに幸福は困惑するのだった。

「いやはや、見てらんねえや。茶が甘くて糖尿になっちまうぜ」

う。そんな愉快(?)な食卓を店主はケラケラと笑って眺めていたとい

女帝を惑わす恋の魔法

6月も半ば。湿度も高くなり、何もしていなくても汗ばむ時期だ。それでもエアグルーヴは早朝トレーニングのあとに、自分が校舎裏で世話をしている花壇の水やりが日課で、今朝も花たちに水をやっている。

「うむ、今日も綺麗に咲いているな。これからも精一杯咲けよ」
今水をやっているのはキキョウとユリ、そしてツユクサ。

どれも夏頃まで花を咲かせ、キキョウに至っては長いもので10月まで咲いている。

「こちらはもう少しで花開く頃か？ いや、そう焦ることもないな。ゆっくりと力を蓄え、7月にはその美しい姿を見せてくれ」

その隣ではヒマワリとアサガオが順調に育って、背を高くしていた。

こうした花々の生き様と健気なところがエアグルーヴは好き。

物言わず、ただその時その時を懸命に生きるその姿に、世話をしているのにまるでこちらが励まされているように感じられる。ただそこに居るだけで、見た相手にそう思わせることが出来る花々にエアグルーヴはいつも感銘を受けているのだ。

しかし――

「む……」

――花を育てていると、必ず向き合わねばならないことがある。

「ハチか……？」

それは花に寄ってくる虫たちだ。

エアグルーヴは虫が大の苦手。アブラムシを食べてくれるテントウムシなどの見た目が比較的可愛いらしい部類に入る虫ならばまだなんとかかなるが、ハチやバツタと言ったザ虫は見るだけで思わず鳥肌が立つ。

（大きき的にあれはミツバチ。ミツバチはこちらが何もしなければあちらも何もしてこない。寧ろハチだって生きるため、そして子育ての

ために花の蜜や花粉を集め、その過程で花たちの受粉を促す、花にとっては大変有り難い存在だ)

冷静さを取り戻すために頭の中で早口で解説し、そっと距離を取るエアグルーヴ。

どんなにその知識があつたにしても、苦手な物は苦手なのだ。

ブオーンツ

「っ!?!」

突然の大きな羽音に、エアグルーヴは身を硬直させた。

その正体はクマバチ。

クマバチの餌はミツバチと同じく花粉や花の蜜。なのでこうしてエアグルーヴの花壇にも餌を集めにやってくる。

大きな羽音と大きくて黒い胴体。スズメバチやアシナガバチのような危険性が高いハチではないと分かっているにもかかわらず、エアグルーヴはその迫力に思わず尻尾も縮む。

「ひっ……あ、あっちへ行ってくれ……」

エアグルーヴの懇願も虚しく、この個体は彼女が持つじょうろのハス口(じょうろの先端)に止まってしまった。ハス口についた水滴に口をつけていることから、きつと水を求めていたのだろう。

しかしこれによってエアグルーヴは余計に身動きが取れない状況に陥った。

「ううっ」

ギョツとまぶたを閉じて飛び去ってくれるのを待つエアグルーヴ。すると、

「なあにしてんだよ、エアグルーヴ」

ふと聞き慣れた声と安心感のある温かさが肩に伝わってきた。

「き、貴様か……」

「よう。大丈夫か？」

「大丈夫な訳ないだろう、このたわけ」

すぐ隣にやってきたのは幸福。彼もここで自身の菜園の世話しているのやってきたのだが、エアグルーヴがずっと固まっていたので状況を察して落ち着かせるように肩を抱いたのだ。

「クマバチか。見た感じオスだな」

「ま、待て貴様、何をす——」

「よつと」

ブブブブブツ！

「——ぴやあつ!?!」

幸福が躊躇なくクマバチを摘み上げ、そのせいでクマバチの羽音が激しくなりエアグルーヴは悲鳴をあげる。

「大丈夫大丈夫。クマバチのオスは針がないから刺さない。でも噛まれるけどな」

「こちらに見せつけるなっ！ 早く向こうにやっつけてくれっ！」

「はいよ」

クマバチを持ったまま、幸福は自分の菜園に連れていき、咲いている花の上に乗せてやる。

するとクマバチは今度は一心不乱に花粉を集める作業に入った。

「もう大丈夫だぞ」

「そ、それは見たら分かる。しかし本当に貴様大丈夫なのか？ か、噛まれて血が出たりとか……」

「ないない。てか噛まれないように摘んだし」

「ならいいんだが……ふう」

今度こそ安心して緊張の糸を解くエアグルーヴ。その証拠に尻尾がいつものように垂れ下がっている。

「まあ花を育てているとどうしても虫は集まってくるもんだ。それだけ綺麗に咲かせることが出来てる証拠だと思えばいい」

「頭ではそう理解している。しかし苦手なものは苦手なんだ」

「だよな。俺は小さい頃から慣れてるからいいが、苦手な人にとっては無理だよな」

「ああ……」

エアグルーヴが虫を苦手とすることは学園でも割と有名。何しろ寮で夏になると現れる名前を言っただけはいけない黒い奴に出くわすと彼女の悲鳴がこだまするのだから。そうでなくても力が止まって血を吸われているのに、半泣きで助けを求めてくる姿が多々目撃されて

いる。

当然、それだけでなくクモやゲジゲジも、害虫を食べてくれる益虫だと知っていても悲鳴をあげてしまう。

「ほら、元気出せ」

幸福がしょんぼりと耳が垂れている彼女の頭を優しく撫でると、

「……もう少し強めにしろ」

彼女には珍しく外だというのに素直に甘えるのだった。

「よしよし……」

耳を後ろに倒して、幸福が撫でやすいようにするエアグルーヴ。自然とその距離も詰めており、彼女は自らの頭を幸福の胸板に押し付けていた。

「よっほど怖かったんだな。もう大丈夫だぞ」

「……たわけ」

「素直に甘えられて偉いぞ」

「たわけ」

「よしっ、そろそろ教室に向かう時間だぞ。あとの水やりは俺がやっ
とくよ」

「ああ、感謝する。頼んだぞ」

「はいよ」

その別れ際、エアグルーヴは自身の尾の先を掠めるように幸福の指先に当てる。尾にも大好きな彼の匂いが付いてこのあとも安心出来るように。

それから時間は何事もなく過ぎて座学も終わり、エアグルーヴは生徒会の仕事をこなす。

宝塚記念も近くなってきたので、今日はエアグルーヴのトレーニングは軽めのメニューのため、生徒会の仕事を優先する。

ただ、

「はあ……」

エアグルーヴは生徒会室の自身の机で、珍しく頬杖をついて、散漫な様子。

「……エアグルーヴ」

「はあ……」

「エアグルーヴ？」

「はあ……」

「……やあ、エアグルーヴのトレーナー君じゃないか」

「ど、どうした貴様!?! 何の用だ!?!」

「あはは、冗談だよ」

「会長……からかわないでください」

シンボリルドルフに一杯食わされ、エアグルーヴは恥ずかしそうに席に戻った。

「何やら心ここに有らずといった感じだね。君にしては珍しい。私の声も届いていなかったくらいだ」

「す、すみません。それで、私に何か？」

「いや、生徒会の今日の仕事も取り敢えず一段落した。君もこれからトレーニングがあるだろう。でもその前にお茶でもどうかなと、ね」
「分かりました。では私が淹れて——」

「それならライオンが率先してやってくれている。ライオンが言うには、何やらラブストリーーの波動を感じる……と言っていたな」
「何なんですか、それは……」

何のことやらさっぱりなエアグルーヴだが、

「その名の通り、エアグルーヴにラブストリーーの波動を感じたんだ。生徒会の仕事をサボらずに来て良かった」

ナリタブライオンがコーヒーと紅茶を購買から買って戻ってきた。その表情はいつも通りに見えるが、どこか期待に満ちた目をしている。

「わざわざ買ってきたのか？」

「私の奢りだ気にするな。実体験のラブストリーーを聞かせてもらおうお代だと思え。つまみも買ってきたしな」

「映画鑑賞ではない。全く……何がしたいんだ、貴様は……」

エアグルーヴのやる気が下がった。

「まあまあエアグルーヴ。取り敢えずはお茶でも飲もうじゃないか」

「……ええ」

「で、エアグルーヴ。お前のトレーナーと何があった？ 隠さず全て吐け。いつもは買わないが、今回は特別に購買で一番高い黒毛和牛のジャーキーを買ってきたんだ」

「何で私が貴様に尋問紛いなことを受けねばならんのだ？ しかもそれはお前用で私は何も受け取ってないんだが？」

ナリタブライアンは黒毛和牛ジャーキーをエアグルーヴに見せつけるだけで、自分だけでモヒツている。加えてエアグルーヴはジャーキーを好んで食さない。

「しかし私もエアグルーヴの様子が気になっていた。何かあったのなら話してほしい。友として力になりたいんだ」

シンボリドルフが柔らかい表情でそう言えば、エアグルーヴは「えっと……」と控えめに今朝の花壇のことをポツポツと語り聞かせた。

◇

「なるほど、素直に好きな相手に甘えることが出来たのは良かったじゃないか」

「うむ、実にいい話だ。これは塩辛いジャーキーが進む」

二人の反応にエアグルーヴはどんな反応を返せばいいのか分からず、誤魔化すようにペットボトルの紅茶を口に含んだ。

「苦手な虫に出くわしてしまったのは気の毒だったが、そんなことがどうでも良くなるくらい良いことがあって何よりだ。一陽来復とも言おうか」

「……はあ。ただ、柄にもなく『このまま時が止まってしまえばいいのに』などと思ってしまうました」

「ブフオツ」

『ブライアン!』

「一体どうした!？」

突然、飲んでいたお茶を盛大に吹き出したナリタブライアン。

しかし彼女は至って冷静に、タオルで口や濡らしてしまったテーブル

ルを拭く。

「いや、すまん……まさか少女漫画のセリフがエアグルーヴの口から生で聞けるとは思わなかったんだ。生で聞くとまたいいな」

「貴様のツボが私には分からん」

「しかし『時が止まってしまえばいいのに』か……いいな。私もトレーナー君と二人で過ごしていると、エアグルーヴと同じことを思ったことは多々ある」

「からかわないでください」

シンボリドルフの同意に流石のエアグルーヴも赤面して、こめかみを押さえた。

「なあ、今度はそのセリフをお前のトレーナー本人に言ってみてくれないか？ きつと面白い展開になると思うんだ」

「お前を楽しませるためにこちらは恋をしているのではない、たわけ」
ナリタブライアンの少女漫画脳についてツツコミを返すエアグルーヴ。

すると、

「それは無理だとしても、助けてくれたことへ何かお返しをするのはどうか？ これなら君のトレーナー君も変に思わず受け取ってくれるはずだ」

シンボリドルフが名案を思いついた。これにはエアグルーヴも思わず尻尾が揺れる。

「いいな。私の好きな少女漫画の展開なら、ヒロインがお礼としてお弁当を気になる男に作って渡すのがあったな」

「いいじゃないか。トレーナー室で二人きりで食べるという手もあるし、その場で感想や反応も確認出来る」

「お決まりのあーんイベントも二人きりなら、お堅いエアグルーヴでも出来るだろう」

「ま、待て！ 何故そこまでする必要がある!?!」

自分を抜きに話が進んでいく中、やっとナリタブライアンが言ったことに対して言葉を発したエアグルーヴ。

「あるに決まってるだろう。いいか、エアグルーヴ。お前のチームに

は既に恋敵が居るんだったよな？　だったらこういうところで差をつけないと、恋敵に差し切られるぞ。お前はそれでいいのか？」

ナリタブライアンの的確な指摘にエアグルーヴは「ぐっ」とたじろぐ。

確かにゴールドシチーは着実に幸福との距離を縮めてきているし、普段から距離感が近い。対してエアグルーヴは今までと変わりなく、ちよつとだけ嫉妬深くなってしまったくらいだ。

「何も私は二人きりなのをいいことに押し倒せと言っているんじゃない。そんなのは少女漫画ではなく、卑猥漫画だ。恋と言うのはだな、誰にでも平等にあることで、自由でなんとというか、救われてなきやあダメなんだ……エアグルーヴだってトレーナーに恋をして救われたことはあるだろ？」

「ま、まあ、確かにそうだが……」

「ならば一歩でも多く、一秒でも長く、恋敵より好きな奴の近くに行け。あーんが無理なら次は何が食べたいとか自然な流れで次回に繋げる手もある。私が言いたいのはチャンスのみすみす逃すなどということだ。さつき購買に行った時にお前のトレーナーに会ったんでな。エアグルーヴから目を離すなど釘も刺してきてやった」

ナリタブライアンの的確なアドバイスにエアグルーヴは今まで初めて彼女のことを頼もしいと思った。それと同時に余計な真似をするなどと思う。

「ブライアン……私は貴様を蹴飛ばせばいいのか、お礼を言えばいいのか分からない」

「崇めればいいんじゃないか？」

エアグルーヴが素晴らしい笑顔のまま無言でナリタブライアンの胸ぐらを掴むが、シンボルドルフが「まあまあ」と止めに入った。「ブライアンの言うことは後半はともかく、前半は私も同意見だ。あーんまでいなくなるとも、自分が作ったお弁当を相手が美味しいと食べてくれる。それだけでも幸せにならないかい？　それに少しの勇気でまた彼に手料理をご馳走するチャンスを得られるかもしれないのだから」

「あやつが、私の料理を美味しいと……また作ってほしいなどと……あわわわわっ!!!?」

シンボリルドルフの提案に思わずそうなった時のことを想像して、顔を真っ赤にして頭から湯気が出るエアグルーヴ。これはもうどこからどう見ても恋する乙女。

そんなエアグルーヴを見る二人は『恋とは凄い魔法だ』とつくづく思うのだった。

夢のグランプリとその後

票に託されたファンの思いを胸にターフを駆けるウマ娘たち。春を締めくくるグランプリレース宝塚記念。阪神レース場、芝2200。バ場は稍重。天気は曇り時々小雨。

このグランプリを彩るのに相応しい、選ばれし優駿たち。

前年覇者でレースレコードを持つサイレンススズカ。同じチームスピカのゴールドシップとメジロマツクイーンも出走。

対して絶対的王者チームリギルからはグラスワンダーにテイエムオペラオーとナリタブライアンが出走。

そして今年も注目を集めるチームデネボラでは、エアグルーヴとゴールドシチー、マーベラスサンデーが出走する。

中でも一番人気はサイレンススズカ。続く二番人気はナリタブライアンで三番人気はエアグルーヴと続く。

スピカ、リギル、デネボラの三チームがそれぞれ出走上限一杯の三名を出走させることで、各メディアでは『中央最強チーム決定戦』などと注目が集まり、阪神レース場には蒸し暑さを吹き飛ばすほどの10万人を超える大観衆が押し寄せた。

◇

ワアアアアアツ!!!

大観衆の声が阪神レース場に響き渡る。

当然だ。今まさに歴史的なことが起こっているのだから。

「サイレンススズカ逃げ切れない！ 捕まった！ 捕まえたのは同チームゴールドシップ！ やはり強い！ 捲くって上がってきた！」「ラストの直線ですよ！」

「エアグルーヴも上がってくる！ ナリタブライアンも続いたぞ！

しかしゴールドシップハナを譲らない！」

ワアアアアアツ!!!

誰が勝つか分からない。それがレースだ。

「間からすうっと上がってきたのは赤いリボンマーベラスサンデー！」

ホープフルステークス以来のG1制覇なるか!? 伸びるか! 伸びるか! マーベラスサンデー抜け出せるか! 真ん中を割った赤いリボン! マーベラス! マーベラス! ゴールドシップ! エアグルーヴ! ナリタブライアン! 出た! ついに二度目のG1制覇だ! マーベラスサンデー! やったーやったーマーベラス! 春を締めくくるグランプリを制しました!」

宝塚記念を制したのは今レースの大穴マーベラスサンデー。序盤は後方で足をため、最後の直線から一気にその足を解放。

これには観客たちも大きな拍手と声援を送る。

「やったー! マアアアベラアアスツ!!!」

マーベラスサンデー本人も全力を出し切ってフラフラになりながらも、輝く笑顔でスタンド前へ両手を挙げて走っていく。

ジュニア期に出走したホープフルステークス以降、G1勝利に手が届かなかったマーベラスサンデー。

辛かった。でも持ち前の明るさで弛まぬ努力を重ねてきた。マーベラスサンデーに限らず、どのウマ娘もこの瞬間のために日々努力を重ねるのだ。

「応援ありがとー!ー!ー! みんなの声援もちゃんと聞こえてたよー!ー! とつてもとつてもマーベラスだったよー!ー! マーベラアアスツ!!!」

ワアアアアツ!!!

ぴよいんぴよいんと跳ね回るマーベラスサンデー。その度に揺れる彼女のトレードマークの赤いリボンは、この日レースを観ていた誰の記憶にも残るだろう。

「アタシやったよ、トレーナー! やったー! やったー!」

はしやぐマーベラスサンデーだったが、体は正直。その証拠にマーベラスサンデーはバランスを崩した。

「おわわわっ!?!」

「全く……嬉しいのは分かるが、それで怪我をしては意味がないだろうが、たわけ」

しかしすぐにエアグルーヴが支えてくれたことで、転倒することは

なかった。

「えへへ、ありがとエアグルーヴ先輩！」

「ああ……おめでとう、マーベラスサンデー。負けはしたが、心からの祝福を送ろう」

「うん、ありがと！ マーベラス！」

「お前と言う奴は……ふふふ」

あの女帝にもマーベラスサンデーの笑みは伝染る。

エアグルーヴも負けて悔しい気持ちはあるが、こんなにも嬉しそうにしているマーベラスサンデーの気持ちが分かり、つついその頭を撫でてしまうのだった。

「……………」

宝塚記念が幕を下ろし、結果はチームデネボラのマーベラスサンデーが九番人気から1着という劇的勝利に終わった。

因みに2着はゴールドシップで、ハナ差3着のエアグルーヴ。続いてナリタブライアン、サイレンススズカという着順だ。

エアグルーヴは今年も宝塚記念を逃してしまっただが、彼女の表情は晴れやかである。何しろサイレンススズカとナリタブライアンには女帝の背中を見せることが出来たのだから。

それに何より、チームメイトで可愛い後輩が自分を抜き去ってグランプリウマ娘に輝いたのだから、エアグルーヴにとっては悔しさよりも嬉しさの方が圧倒的に大きいのである。

「マーベラスサンデー、宝塚記念勝利！ そしてエアグルーヴ3着入賞！ おめでとう！ 乾杯！」

『カンパニー♪』

宝塚記念の翌日。チームデネボラはトレーニングを早めに切り上げて、部室で祝勝会を開く。

何故今日なのかというと、昨日は日曜日でレースが終わればすぐに中央へ帰らないと明日の座学に支障が出るからだ。

それでも昨日はレース場の責任者のご厚意で人気の特別お重弁当を貰い、みんなして帰りの新幹線の中でその味に舌鼓を打った。

今回もいつも通りヒシアマゾンを中心に料理を作り、テーブルに所狭しと並んでいる。

マーベラスサンデーは優勝レイを改めて首から下げて、くるくるとその場で回っていた。

「おいおい、嬉しいのは分かるけどなあ……汚しちまったら嫌だろ？」

大人しくしてろよ」

「はーい！ でももうちょっとだけー！」

「なら、もう少しテーブルから離れろ」

「はーいっー！」

幸福に注意されてもマーベラスサンデーは有頂天。こんな彼女を見るのは久々なので、幸福も口では注意しているが、その表情はとても優しい。

「はあ……」

「どうした、ゴールドシチー？」

「あ、エアグルーヴ……見れば分かるでしょ？ アタシはしよげてるの」

マーベラスサンデーとは正反対に部室の隅で肩を落として人參ジュースをちびちび飲むゴールドシチー。

彼女は昨日のグランプリで六番人気であったが、結果は9着に沈んだ。

リギル、スピカ、デネボラの三強が共に三名ずつを出走させた大一番。後輩が1着で恋敵が3着。なのに自分は三強の中でも最下位となったことが何よりも悔しかった。

「大阪杯も今回も、自信はあった。なのに勝てなかった。まあレースに出てれば当たり前前なんだけどさ、でもキツイよ、ホント。勝てないって」

「……………」

エアグルーヴは黙って彼女の言葉を聞く。何かしら言葉をかけることは容易いが、順風満帆の戦績を持つ自分がそれを言うのは嫌味になってしまうからだ。

例えゴールドシチーがそう受け取らなくても、エアグルーヴ本人が

そう考えてしまうので、ただ聞き役になって鬱憤を吐露させてやる方がいいと判断したのである。

「でもアタシさ、これがアタシの実力なんだって思わない。負け癖なんて絶対つけない。だってトレナーはそんなアタシを信じてくれてるんだもん。今のアタシの実力はこんなもんだけど、絶対にこんなもんで終わらせないし、終わりたくないんだ」

「……そうか」

エアグルーヴはそれを聞いて思わず微笑んだ。

負けが続くと辛い。それに耐え切れずトレセン学園を去って行ったウマ娘も多い。

マーベラスサンデーだって普段は明るく過ごしていたが、負けが続いて自慢の明るさに時折無理が見えていた。

それでも努力を重ねて勝つたのだ。女帝や怪物、逃亡者という並み居る強敵を打ち負かして。

だから負けても次を見据えるゴールドシチーをエアグルーヴは頼もしく、それでいて良きライバルだと嬉しく思った。

「次は天皇賞秋……その前に京都大賞典で勝って弾みを付けるんだ」

「ゴールドシチーなら出来るさ。私の恋敵（ライバル）なのだからな」

「うん。楽しみに待ってなよ」

「楽しみにしているぞ」

笑い合い、互いの決意に人参ジュースで改めて乾杯した二人。
しかし、

「トレナー……シチーちゃんのやる気を上げるためにあーんってしてえ。フォークとお皿持つ気力ないからさ」

直後に幸福の背中に抱きついて卑しくも素直に甘えるゴールドシチーを見て、エアグルーヴは持っていた紙コップをペシヨツと握り潰し、手から床に人参ジュースが滴り落ちた。

当然、

「ん……ああ仕方ねえな。ほれ、あーん」

「あ……ん……ん」

幸福は何も考えずそれに応えてしまう。

ヒシアマゾン特製の鶏の竜田揚げを食べさせてもらい、ゴールドシチーは耳もピコピコ、尻尾もふわりふわりと上機嫌。

「……ぐぬぬぬっ」

エアグルーヴの手にする紙コップが小さな小さな紙の塊に変わる。尻尾は高く上がり、その怒りの度数が高いことを物語っていた。

「トレーナー、次頂戴……あく♪」

「ちよつと甘え過ぎじゃねえか？ ほれ」

「あむ……ん♪ 次頑張るために甘えてるの。いっぱい甘えて、次のレース頑張るからさ。それに甘えるのはトレーナーにだけだから」
「そうか……でも無理だけはしないでくれよ。無理して怪我でもしたら元も子もないからなあ」

「うん。そこはちゃんと注意するよ」

「ん、約束な」

幸福はそう言うと、ゴールドシチーの首をトントントンと軽く叩く。するとゴールドシチーは嬉しそうに微笑み、彼の胸に頭を擦り付けるのだった。

「……おい、スキンシップは結構だが、少々目に余るぞ」

当然、これにはエアグルーヴも黙ってはいない。鋭い眼光でゴールドシチーを睨み、幸福との間に割って入る。

しかしゴールドシチーは片側の口端を上げて『きたきた♪』としたり顔。

「えー、これくらいいいじゃん。アタシは落ち込んで、それをトレーナーに慰めてもらってるんだからさ」

エアグルーヴを押し退け、再び幸福の胸に頭を寄せるゴールドシチー。

それを見てエアグルーヴのこめかみにハッキリと血管が浮かび上がった。

これにはヒシアマゾンやナリタイシンは『あ、キレグルーヴが来る』と思って耳を塞いだが、

「エアグルーヴも甘えたいならこっち来れば？ 左胸空いてるっしょ？」

「な……ななななっ!？」

ゴールドシチーの先制ジャブのせいで、エアグルーヴは壊れかけたレディオのように声が震え出す。

「エアグルーヴも今回は3着だったしなあ。俺の胸でいいなら貸すぞ」

幸福がそう言つて左腕を広げると、エアグルーヴは一瞬躊躇いながらも、すぐに磁石のように吸い寄せられていった。

「……今回は特別だ」

「あはは、素直じゃないんだ♪ そんなんじや、損するよ?」

「私の勝手だろう。たわけ」

「はいはい」

今の表情が蕩けているエアグルーヴに何を言われても怖くない。寧ろゴールドシチーは『ホント可愛いなこの女帝』と思つている。

「これからも頑張ろうな、二人共」

「勿論!」

「ああ」

ただ幸福だけは二人の空気とは全く別の次元にいるので、二人から暫く離してもらえなかったそうなの。

合宿前は多忙の女帝

梅雨が終わり、季節は本格的な夏に入った。

普通の学校と同じくトレセン学園も夏季休業がある。

しかし少し違うのは夏季休業が7月の頭から始まるということ。

トレセン学園所属のウマ娘たちの多くは、この時期になると夏合宿期間に入る。夏はレース場に訪れるファンが熱中症などで体調を崩してしまう可能性が高く、それによつて近隣の医療施設・機関が切迫してしまうことを避けるため、大きなレースもあまり開かれないうで、その間に秋から冬の後半戦を勝ち抜ける強い体を作るのだ。

学園所有の合宿施設は海に面したオーシャンビューのホテルと民宿があり、ホテルは勿論だが民宿の方も生徒たちからの評判が高い。古い建物で所々リフォームを施しているが、それがかえって味があるのだとか。加えて民宿の女将さんが作る和食も人気な理由。中には泊まるのはホテルだが、食事は民宿を利用するなんていうウマ娘もいるくらいだ。ウマ娘の中にはお嬢様育ちの子もいるので、民宿で庶民的な日々を過ごしたいという子もいたりする。

ただどの合宿施設にも部屋数に限りがあるので、予約が必要。

夏の時期だと合宿施設の近くで毎週のように縁日や花火大会が催されるので、各トレーナーは担当ウマ娘とよく相談してから予約を入れるんだとか。

一方、学園が休みだからといって、学園内に学生が全くいないというわけではない。

合宿施設を利用しなくても通常トレーニングとして学園の設備を使うウマ娘も多いからだ。

それに生徒会の面々に至っては、この時期はかなり忙しい。

夏のオーブンキャンパスや生徒たちからの要望確認及び提案等々のこのまとまった時間が取れる今でしか出来ないことがあるからだ。

今日はカフェテリアの新メニュー試食会。

前々から生徒たちにリクエスト形式で食べたいメニューを募り、実

現可能なレベルの物を生徒会役員たちで選定して、今日の試食会でカフェテリアのメニューに採用か否かを決めるのだ。

「……で、これを全部食うのか……腹減らして来いって言うから、来る前に軽く体を動かしてはきたが……」

今回試食会に半強制的に連れて来られた幸福は、エアグルーヴに手渡された今回のラインナップの多さに思わず顔が引きつる。

料理の数が多い上に生徒会メンバーの何人かは既に夏合宿に入っているため、今回は身近な者たちも集められたのだ。

「そう心配するな。貴様が残しても、残りは全てあちらのテーブルに行く予定だからな」

エアグルーヴがそう言って視線をやる先には、

「トレーナーさん、私早く食べたいです！」

「トレーナー……今日のために朝ご飯はあつさりと控えめにカツ丼5キロだけにしてきた。間食もしてないからいくらでも食べられるぞ。空腹は最高の調味料だ」

あの芦毛の怪物と日本総大将がいた。ちゃんと料理が残らない対策もバッチリ。

これには幸福も「あ、なら全然残せるじゃん」と表情に明るさが戻った。

「今回は私たちから見ても唆られるメニューが多くてな。あれもこれももとなった結果、試食会に出すメニューがかなり多くなってしまったのだ」

「まあそれはいいんじゃないか？ 食事は大切だからな」

「そう言ってくれるとこちらとしては気が軽くなる。やはり生徒たちにはより良い環境で過ごしてほしいからな」

そう言うエアグルーヴの表情はとても穏やかで、優しい眼をしている。

幸福はそんな彼女を見て、『本当に優しい女帝様だな』と思うのだった。

◇

最初に運ばれてきたのは5キロの和牛ステーキプレート。ソース

は和風おろしポン酢、ガーリックペッパー、デミグラスの3種類から選べ、焼き方は付属されているペレットで自分好みにして食べる事が可能。またシンプルに岩塩や出汁醤油で食べても良さそうだ。

添えられた山盛りの人参とコーンも色が良く、ソースに絡めればライスにもパンにも合うだろう。

「……こんな量食う奴いるのか？」

「それが意外とリクエストが多くてな。たまには肉をとことん食べたという生徒が多かったんだ」

「生徒はそうだろうが、俺らならほぼほぼ頼まないな。値段見たくない。そもそも食い切れない」

カフェテリアのメニューはトレセン学園の生徒であれば無料で提供されるが、トレーナー陣は割引を適用されるのみで有料。

理由はトレーナー陣はちゃんと自分でお金を稼ぎ、管理出来る責任ある社会人だからだ。プラス学園に所属する生徒の数から考えて、トレーナー陣にまで無料にすると予算がいくらあっても足りなくなる。

「ブライアンやオグリキャップたちなら余裕だろう。それが数人でシェアすることも可能だ」

「ああ、なら俺らも割り勘で食うって感じでいけるな。でも数量限定とかにした方が良さそうだ。フードロスになったら痛いだろこれ」

「ふむ、確かにそうだ。いい意見だ。感謝する」

幸福の意見を聞き、エアグルーヴはメモ帳にそれを書き残す。

いくら大量に仕入れることで仕入れ値が抑えられても、それを無駄にしては意味がない。その点、数量限定にしておけば仕入れる量に悩まなくていい上、限定にすることで希少価値も上がって余ることも減るのだ。

◇

「これは私もいいなと思ったメニューだ」

「……でも猫舌のやつは苦労しそうはメニューだなあ」

肉料理が続いてからの次なるメニューはオムライス。

しかしただのオムライスではなく、オムライスにホワイトソースとチーズをかけてオーブンで焼いたオムライスグラタンだ。

中のチキンライスを薄味にすることでホワイトソースやチーズの味とマッチしている。また好みに応じて仕上げにかけるソースをケチャップかデミグラスか選べるのも嬉しい点だ。

「俺猫舌なんだよなあ……というか、もう腹一杯なんだが……」
「ゆっくりでいいから一口だけでも食べろ」

エアグルーヴは幸福にそう言う和幸福の皿から一口スプーンにより、甲斐甲斐しく冷ましてから彼の口元へ持っていく。

「もつと念入りにおなしやす」

「そこまで甘えるな、たわけ」

「はいよ。ふー……ふー……あむ」

「どうだ？」

「んー、デミグラスの方貰っていい？」

「ああ」

幸福の要望に答え、エアグルーヴは今度は自分の皿から一口よそつて、今度はちゃんと冷ましてから彼の口元へ運んだ。

「あむ……俺はケチャップの方が好きかな」

「なるほど……なら貴様のを一口貰おう。ん……」

「ほいほい。ふー、ふー……はいよ」

「はむ……うむ、私もこちらの方が好きだな」

ナチュラルに食べさせ合う二人に周りは決して驚かない。今回が初めてでないのもあるが、普段から二人はナチュラルにこういう行動をするからである。これで寧ろ付き合っていないという事実の方が周りは驚きでならない。

「トレーナー君、私も君の方を貰ってもいいだろうか？」

「急に甘え出したな……ほら」

「あむ……ふふっ、美味しい。ルナ、これ、ちゆき」

「そうか」

「トレーナー、私もトレーナーの方のを食べ……え、全部くれるのか？」

嬉しいぞトレーナー！ あ、でもそれだと食べさせてもらえない

……いや、何でもない。では頂くぞー！

なので周りにいる恋する乙女たちは幸福たちに触発されて想い人

へアタツクする。

皇帝はアタツクするまでにはいいが相変わらずルナってしまい、オグリキャップに至ってはまだまだ道が遠そうだ。

◇ 試食会も終盤戦に差し掛かり、メニューは主菜からデザートへ移る。

元から人気メニューだった人参プリンと人参ソフトクリームを合わせた人参プリンアラモードはトレーナー陣にも好評だった。

そして今は――

「なあ、これはデザートに入るのか？」

「これも私はデザートとは思えないのだが、何分リクエスト用紙にはデザートとあったからな。しかしデザートではないにしても、これはこれで頼む生徒もいるだろう」

――ハニートーストが運ばれてきた。

大きさはスープパーにも置いてある普通の四角い食パンだが、ボリュウムは一斤丸ごと。

食パンの端を下にし、中は包丁で九等分になるように切り、あとはオーブンでこんがり焼き上げる。

焼き上がったら、そこにバターまたは好みのアイス。アイスの種類はバニラ、チョコ、チョコミント、ストロベリーのどれかから選べる上にダブルやトリプルも可能で、当然全部乗せも可。生クリームをバターやアイスを囲うように盛り付け、仕上げに蜂蜜かメープルシロップを掛けた大変ボリュミーなデザート。追加でストロベリーソースやチョコソースを掛けることも出来る。

「甘いのは好きだが、これ見てるだけで胸焼けする……前は食べたけどなあ」

「まあ残っても向こうのテーブルに持っていけばいいだけだ。とにかく味見をしよう」

「だな」

ナイフとフォークを持ち、トーストにナイフを入れる。するとサクツとした小気味良い音が響き、中からふわふわの生地が現れた。

「別にハニートーストにしくなくてもこの食パン食いたいな」

「同感だ。確か普通のメニューで食パンを選択すると、同じ食パンが出てくるはずだ」

「んー、どこのパン屋の食パンか分かる？」

「あとで確認してやる」

「サンキュ。もし買えるところだったらお礼にサンドイッチご馳走するよ」

「ほう、それは楽しみだ」

ハニートーストの感想よりも、二人の会話は既に別の方向へ向かっていた。

「毎回毎回作るのはいいがジャムの使い道を考えるのが難しくてな。チームのみんなに食わせるのが一番手っ取り早いんだよ」

「もつといい言い方があるだろう。たわけ」

「おいら正直者だから」

「……たわけ」

不覚にも少年つぼさにキュンと来たエアグルーヴは、そつぽを向いて誤魔化した。しかし周りのテーブルからは『あらあ』と生温かく見られていることを彼女は知らない。

◇

試食会のメニューも次でラスト。

なのにスペシャルウィークもオグリキャップもまだまだ余裕綽々で、寧ろ次がラストだと知ると残念そうに耳と尾が垂れる。

最後に運ばれてきたのは、

「パンケーキか」

「？ 生パンケーキと書いてあるな」

「あれ、エアグルーヴは知らなかったのか？」

「ああ、この選定に私は関わってないんだ。この時は宝塚記念が近かったのもあってな」

「なるほど」

生パンケーキであった。

提供する店によって名前は生ホットケーキやスフレパンケーキな

ど様々である。

最近は駅前にもこの専門店がオープンしてウマ娘を始め、女性を中心に大人気なのだ。

「しかし生パンケーキとは……これは本当に大丈夫なのか？ ポンポン痛くなったりしないか？」

「いや、スフレだから平気だよ。俺も何度かホットケーキミックスで作ったことあるし」

「な、本当か!? なるほど……私はこういう流行は良く分らんが、貴様がそう言うのならそうなんだろう」

ふむふむと頷いているエアグルーヴだが、あの女帝がお腹のことを「ポンポン」と呼ぶことに周りは驚愕している。

エアグルーヴも普段はそんなことはないが、今は素が出てしまうほどの驚きがあつた証拠だ。現に今は生パンケーキに興味が湧いて眼がキラキラしている。

「はは、エアグルーヴもやっぱ女の子だなあ」

「う、うるさい。いいだろう、別に……」

「悪いとは言っていないだろ。そういう素直な反応見ると可愛いなっと思っよう」

「た、たわけ……」

「ほいほい。ま、味見ようぜ」

「あ、ああ……」

しかしエアグルーヴの頭の中は、

（可愛いって言われた可愛いって言われた可愛いって言われた可愛いって言われた！）

かなり掛かってしまっていた。

しかしこれも恋する乙女故である。

「お、美味しいなこれ」

「そ、そうだな……しかし私は貴様が作った物も食べてみたい」

「おお、いいぞ。そんなに難しい物でもないし。なら今度トレーニング終わりにでもみんなの分を作るか」

「あ、ああ……楽しみにしている」

そう言つてふにやりと笑うエアグルーヴは女帝ではなく、デレグ
ルーヴだった。

エアグルーヴは絶好調をキープしている。

夏合宿は重要イベント

夏合宿。それは多くのウマ娘たちが、この期間中に集中的にトレーニングを行う。

真夏の日差しが苦手な一部のウマ娘たちは時期をずらして合宿を行ったりするが、やはり座学等のスケジュールを考えると夏季休業のこの時期が一番タイミング的に取りやすいのだ。

「よし、一旦休憩！」

チームデネボラも先週から夏合宿期間に突入し、力を付けてきている。

中でもエアグルーヴとゴールドシチーはやる気に溢れ、他のメンバーたちにもいい刺激を与えていた。因みに合宿中、カールはペットホテルで預かってもらっている。

皆がパラソルの下で休憩していると、

「こんにちは〜」

「失礼します」

二人組の女子高生がやって来た。

「あ、アンタたち、本当に来たんだ？」

そんな二人組にいち早く反応したのはナリタタイシン。

実はこの二人組はナリタタイシンが小学生の時に同じ小学校に通っていた同級生。

ただ二人はその時からつい数年前まではナリタタイシンを『ちび』と嘲笑っていた。ナリタタイシンは周りから身体の小ささをからかわれてきたため、そのことが強いコンプレックスだった。しかしトウインクルシリーズで皐月賞ウマ娘に輝き、天皇賞春秋制覇したことで今ではコンプレックスだった身体の小ささを武器に出来ている。

この二人組はそんなナリタタイシンに自分たちが発してきた心無い言葉を謝罪。それもわざわざトレセン学園まで正式に面会の手続きもして謝りに来たことで、ナリタタイシンももうその頃はそんなこと忘れてたが二人からの謝罪を受け入れ、その頃から二人とは交流す

るようになったのだ。

そんな二人が何故夏合宿中なのにその現場までやって来たのかと言うと、友達のナリタタイシンや彼女のチームメイトたちに差し入れを持って来たのもあるが、実は二人して将来はトレーナー業に就きたいという夢が出来、見学にやって来たのである。そう思えたのも、ナリタタイシンが夢を実現させて見せてくれたから。

「おお、君らが見学の子らか。俺は——」

「タイシンの今のトレーナーの伊藤幸福さんですね！」

「私たちタイシンのレースを見てから、タイシンのファンになっちゃって、前のトレーナーさんの頃から今の伊藤トレーナーさんのインタビュー記事まで全部読んでます！」

二人は既にタイシンのファンで、幸福のことも知っていた。

食い気味に言葉を遮られ、幸福は唾然としたが、二人の意欲的な姿勢に小さく頷いた。

「そうか……なら自己紹介はいらねえな。見学の件は学園とタイシンから聞いてる。何か気になることがあれば気軽に訊いてくれ」

『よろしくお願ひします！』

背筋を伸ばし、しっかりと頭を下げる二人。

それから二人はここへ来る途中にあるコンビニで買ってきたアイスをエアグルーヴたちに配り、皆もそれを笑顔で受け取った。

トレーナー業の見学は基本的に15歳以上（中学生は不可）であれば性別関係なく誰でも出来る。

ただ見学するには学園に見学したいチーム名またはトレーナー名と見学したい理由と見学希望の日付と時間帯を添えた申請書の提出が必要。申請書はトレセン学園に問い合わせれば無料で郵送してくれる。

届いた申請書に事務員が目を通し、そのトレーナーに見学をさせても良いかどうかを告げ、トレーナー側から良いと返事があれば晴れて見学することが出来る。

しかし大切なレース前や担当バが不安定な時期によってはトレーナー側から断られるので、大抵はこういう合宿時期に見学の許可をす

るトレーナーが多い。

幸福は基本的に見学を断っている。何故なら見学希望者が多いからだ。

それだけチームデネボラと幸福が注目されているのもあるが、見学者たちの相手をして担当の子たちの指導が出来ないといった事態を回避するためというのが本音のところ。

ウマ娘の指導があるのに、見学者たちからの質問にまで親切丁寧に答えてはられないのだ。

スピカのトレーナーに至っては器用なこともあつて見学者は基本的にいつでも大歓迎しているが、幸福は別ということ。因みにリギルのトレーナーも断っている。彼の場合は見学云々より彼のファンが会いたくて来る場合が多いからだ。

ただ今回はナリタタイシンから「出来れば見学させてあげたいんだよね」と言われたので、そのことも踏まえて見学を許可したという経緯がある。

「よし、それじゃあ次のメニューに行くぞ！ エアグルーヴはタイヤ引き！ アイネスとウンスは砂浜ダッシュ！ 残りのメンバーは砂浜斜面でうさぎ飛び！」

『はいー』

皆はそれぞれ幸福に言われたメニューを開始。

「あの、どうしてエアグルーヴさんだけ別メニューっぽいんですか？」
そこで髪の毛長い方の子が質問してきた。

「エアグルーヴはこの合宿での課題が精神面の強化だ。君らが見てたかどうかは知らないが、前回の宝塚記念で最後のスパートでエアグルーヴは競り負けたからな。スパートはスピード、スタミナ、パワーも重要だが、ああいった場面では精神面が物を言う。負けたくない……勝つのは自分だつていう精神力が。こればつかは時代遅れだと言われても精神論になっちゃう。よって熱い砂浜で重たいタイヤを引くことで、挫けない根性を身につける。加えてパワーとスピードの強化にも繋がるんだ」

「なるほど……」

「すごい……」

女子高生らは持つてきたメモ帳に幸福の説明を書いていく。それだけ彼女たちも真剣なのが伝わり、幸福は『こういう子らが次のスターを生み出すんだろうな』と内心嬉しくなった。

「それじゃあ、気をつけて帰って」

「ありがと。でも帰りは最寄り駅に親が迎えに来てくれるから」

「そっちも残りの合宿頑張ってるね。見学させてくれてありがと。みんなよろしく伝えて」

「ん」

本日のトレーニングメニューが終わり、海も夕焼け色に染まった。

ナリタタイシンは二人と別れの挨拶をしたあとで、ふわりとした笑顔を浮かべながらチームの宿泊部屋へと戻る。

「ただいまー」

「ああ、戻ったか、タイシン」

部屋にナリタタイシンが戻ると、そこにはエアグリーブだけがいた。

「あれ、他のみんなは？」

「皆は今施設の購買に向かったところだ。入れ違いだな」

「ああね。アタシ階段使ったし」

「私は見ての通り留守番だ。誰かが我々の部屋に訪ねて来る場合もあるからな」

「相変わらず真面目だね。トレーナーと離れ離れで寂しいんじゃないの？」

「私は子どもか、たわけ」

「あはは、ごめん」

二人はあまり接点がないように思われるが、実は結構接点がある。それはナリタタイシンが皐月賞を獲る前、居残りトレーニングをトレーニングコースの使用時間外でも走っていて、エアグリーブがその頃は良く注意していたのだ。

彼女のストイックさはエアグリーブも見做っていたが、いつも余裕

がなくて見ていて辛かった。

何か言葉をかけてやりたくても、身体的に恵まれている自分が言うことで返って言葉の本質が届かないと思い、エアグルーヴはずっと歯痒い思いをしていたのだ。

だから彼女がトレーナーを得て、大成した時は嬉しかった。それでいて向こうからも『今まで世話掛けてごめん』なんて言ってきたのだから、これには思わずエアグルーヴも笑ってしまった。

二人はその時から良き友になった。

故に、

「どう、トレーナーとの進展は？」

「……正直、良く分かん」

ナリタタイシンがエアグルーヴにこうしたプライベートな話題を振っても、彼女は素直に受け答えしてくれる。

ナリタタイシンも恋をしたことがないし、あまり他人のプライベートに首を突っ込むタイプでもない。しかし恋愛に関しては良く分からないが、友達の恋は応援したいと思っている。何よりナリタタイシンから見て、エアグルーヴと幸福はゴールドシチーには悪いがお似合いなのだ。

「そっか。でも焦ることないんじゃない？ ゴールドシチーは強敵だろうけど、何だかんだエアグルーヴの方がトレーナーから色々してもらってると思うし」

「それはまあ……あやつとは長い付き合いだからな」

「アタシから見ても、トレーナーっていい人だと思うからね。エアグルーヴとトレーナーの結婚式に参列するの楽しみだし」

「お、おい、何を口走っているんだ」

「だってそうなるでしょ？ 恋人になったらそれで満足なの、エアグルーヴって？」

彼女の得意技である鬼脚の如き追撃に、エアグルーヴはぐうの音も出なくなる。

恋人になりたいと願っているが……まだそうなってもいない内から将来のことまで思い描くことが出来ないのだ。

「ま、トレーナーのことだから誰が恋人になっただとしても浮気はしないでしょ」

「ああ、それは当然だ」

「なら最後は結婚って話になるじゃん？」

「それはそうだが……」

「エアグルーヴってき、ホント変なところで狼狽えるよね。カールに会うためとかそれらしい理由付けてトレーナーのマンションに上がり込んでるくせに」

「あ、あれは……」

容赦ない鬼脚にエアグルーヴはほのかに頬を赤くして俯いてしまう。

ナリタタイシンだけでなく、チームの耳年増組のヒシアマゾンやアイネスフウジン、セイウンスカイも彼女が幸福のマンションに行く本当の理由に気がついていてる。

最初はみんなでカールに会いに行き、そこから徐々に一人でも行くようになっただけだから。

近頃は恋心を自覚したのもあって毎週のように通っているのだから、ナリタタイシンたちは『通い妻（仮）』なんて思っている。

「まあトレーナーもそっち方面は鈍感だからね。苦労するだろうけど、頑張つてよ。あれだけ前から好き好きオーラ出しまくってたんだからさ」

「……そんなにかな？」

「あ、そうだった。あの時の好き好きオーラは今と違って無自覚だったもんね、ごめん忘れてたよ」

「おい」

「あはは、ごめんて」

エアグルーヴに凄まれ、今度はちゃんと謝るナリタタイシン。

「ほら、前にエアグルーヴの後ろをちよこちよこ追い掛けてた子いるでしょ。鹿毛でメジロ家の子」

「ああ、ドーベルのことか」

「そそ。その子がいつだったか、うちのトレーナーにトレーニングの

相談しに来たことがあったじゃん」

「ああ……ドーベルも男性が苦手だな。しかし私のトレーナーであやつのウマ娘との距離の取り方が良いこともあって、あやつには普通に接することが出来るんだ。その甲斐あって今は他の男性トレーナーとも挨拶は出来るようになった。彼女の担当は女性だがな」

「そう。でき、その時のエアグルーヴはアタシらから見たら嫉妬心丸出しでさ。普通の距離なのに近いつてトレーナーとその子の間に割って入っててさ。んでトレーナーに『そう怒るなよ』って首筋撫でられてニッコニコになつてて、マジで芝生えたんだよね♪」

クスクスとナリタタイシンに思い出し笑いをされ、エアグルーヴは頬を赤らめて不満そうにそっぽを向く。

「……ドーベルにもあのあとで『先輩の大切な人を取ったりしませんから安心してください』と言われた」

「ほらね。やっぱバレバレじゃん。良かったね、自覚出来てさ」

「現在進行形だからかわれているのか？」

「それは仕方ないよ。普段から熟年夫婦感出まくってるのに、変なところで乙女になるんだもん。見てるこっちは面白いからいいけど♪」

「貴様……」

エアグルーヴが凄んでも、ナリタタイシンは何のその。クスクスと可笑しそうに笑うのみ。

なのでエアグルーヴはこめかみを軽く押さえながら、自分を落ち着かせるように冷めた紅茶を口に含んだ。

「たっだいまー!」

「そしていいニュースですわー!」

「近くで縁日やってるからこれからみんなで行くよ!」

部屋に戻って来るなり、マーベラスサンデーとカワカミプリンセス、ヒシアマゾンがそう叫んだ。

「え……アタシはパス。人混み苦手」

ナリタタイシンは即座にお断りしたが、

「タイシンが好きそうな古着屋も特別セールで店出してるよ。福袋も売ってるって」

ゴールドシチーが付け加えると、彼女はすかさず「行く」と立ち上がり、いそいそと財布を取り出した。

「待て。行くのはいいが、皆持参する金額は使い過ぎないようにくらまでと決めてからにしろ」

ここでエアグルーヴがしつかりと釘を刺す。

去年は近所で花火大会があつてみんなで屋台巡りをしたが、主にヒシアマゾンとマーベラスサンデーとセイウンスカイが散財した。

なのでそうなることを見越してのエアグルーヴの発言だった。

その後、みんなで縁日に向かい、夏の楽しい思い出を作った。

因みに幸福の両サイドには常にエアグルーヴとゴールドシチーが陣取っていたという。

女帝の決意

私は、今物凄く後悔している。

自分でも後悔などとは思わないと思う。

だが今回ばかりはどうか許してほしい。

「で、先生。今回はこうして生きるネタ帳をこの場に呼び出した訳だが、どうだ？」

「コードネームシャドー、そう急かしたらダメだよ。あたしも先生の新作は楽しみだけど、変にプレッシャーを与えたら良くないと思うんだ。コードネームサイボーグもそう思うよね？」

「はい、私もコードネームマツスルと同意見です。先生はプレッシャーを苦手としていますし、今はバッドステータス『困惑』を確認していますので」

「えっと、本当にごめんなさい……エアグルーヴ先輩」

今は8月の頭。我がチームの夏合宿も無事に終わり、残りの夏は学園で穏やかに過ごすつもりだ。

実家には合宿前に数日だけ帰って、お母様に近況をご報告したからな。

それで今日は日曜日で花の水やりさえ終われば、トレーニングも自主的にやる以外は自由な身だった。

いつもならこういう日はカールに会いに行くところだが、あいにく今日はあやつが用事とのことでカールに会いに行くことは叶わなかったのだ。

同室のファインは何やら長野県までラーメンのスープ研究のために出向いているので、自室で静かに読書でもしようかと思っていた矢先、ブライアンが『緊急事態なんだ。助けろ』とメッセージを送ってきた。

人に助けを求める態度にしては不遜というか大変失礼であるが、ブライアンらしくないメッセージに驚きつつ、私は彼女が指定してきた学園の生徒たちが良く利用する駅前にある可愛らしいカフェへ急い

で向かった。

カフェの前ではライアンを始め、私も良く知るメジロライアンとメジロドーベル、そしてミホノブルボンが私の到着を待っていた。因みにブルボンは私が夏合宿中にニシノフラワーと共に私の花壇へ水やりをやってくれていた花好き仲間だ。いつか3000mの花壇を作るという野望もあるらしい。

私たちはテラス席に通してもらい、それぞれ頼んだ飲み物が届いてから、私は取り敢えず深刻そうにしている皆からの言葉を待っていた。

すると――

『エアグルーヴ。先生がスランプなんだ。お前は現在進行形で恋する乙女……言うなれば生きるネタ帳だ。だから先生にネタを提供してやってほしい』

――などとライアンに言われたのだ。私はどうすればいい？こやつ顔面を思い切り蹴飛ばしてもいいだろうか？

ライアンの説明が端的過ぎて、他の皆から説明を受けたが、状況を把握するのに小一時間も掛かってしまった。

なんでも、彼女たちは『少女漫画同盟』というグループらしい。少女漫画ならばもっと可愛らしい名前があったのではないか？せめて愛好会とか。

ただ彼女たちはその趣味を周りには公言しておらず、隠れた同志の集まりだと言う。故にコードネームで呼び合っているそうだが、顔も隠してなければコードネームも安直過ぎるため、隠す気があるのかと思ってしまった。

それで先程から皆が先生と呼んでいるのが、私の可愛い後輩ドーベルだ。

何でも彼女は昔から少女漫画が好きで、ノートにオリジナルの少女漫画を描いていたという。

それをライアンに見つかってしまい、それを気に入ったライアンがこっそりと同志たちにドーベルの作品を読ませてもらったところ大好評で、そこにノートを探しにやってきたドーベルがうっかり『アタシの

ノート返して!』と叫んでしまつて身バレしたらしい。

ここままで彼女らのグループが出来るまでの大まかな説明だ。

で、本題はここから。

ブライアンたちが言うには、ドーベルがスランプで新作が描けずにいるらしい。もう4ヶ月近く新作が無いため、ファンとして力になろうとした。

ただこの三人は色んな少女漫画は読んできたが、恋愛経験がないと言う。

私からすればブライアンはともかく、ライアンとブルボンは自身の専属トレーナーと仲睦まじく映っているのだがな。

そんな疑問を抱いていると、ブライアンが私に耳打ちしてきた。

『あの二人も恋する乙女だが、やはり自分の恋バナを先生にネタとして提供するのには恥ずかしいだろう。それに私の大切な同志だ。だから私がこうして一肌脱いだんだ』

私の恋バナをネタにするのは恥ずかしくなくても言いたいのだろうか、このやけにドヤ顔をしている無遠慮の野菜嫌い肉食怪物は？

思わずこやつ顔面に蹄鉄有りの蹴りをねじ込みたくなつたが、やったところで時間の無駄だ。それにこやつにはお弁当の件もあるからな。遺憾だが、こやつのお陰で今ではお弁当交換を週一で出来るようになった。故に私は蹴らなかつた。自分を褒めてやりたい。

よって私が呼ばれたのは恋バナを聞かせろというものだ。

『あの先輩、本当に無理しなくていいんで……アタシの問題ですから』『無理というか、何というか……恋バナというのがまず私は良く分かんらん』

『何を言っている。前に生徒会室で私たちに聞かせていただろう……』

『時が止まってしまえばいいのに』と』

『おおっ!』

「っ!」

ブライアンの暴露に三人は揃って目を見開いた。あのブルボンまで目が輝いている。こやつもこんな表情が出来たのか……ではなく!

「ブライアン、貴様……」

「？ 何をそんなに震えている？ 会いたくて震えるというやつか？ 何にしても事実だろう。それに私は知っているんだぞ。お前が毎週水曜日にルンルン気分でトレーナー室へ歩いていくことを。手提げ袋から漂う匂いからしてお弁当だろ？ と言うことはお前は毎週水曜日にトレーナーとお弁当を食べている！」

『おおーっ！』

ぐっ……妙にペースを崩される。そして何故こうも変に鋭いんだ！

「いや、まあ……確かに貴様の言う通りだ。別にやましいことをしている訳でもないしな」

「で、あーんまでいったのか？」

「ぐっふっ」

「先輩!？」

「ぐっほっぐっほっ……っ、大丈夫だドーベル。少し変なところに紅茶が入っただけだ」

「それは大丈夫とは言えないような……」

ブライアンのせいでむせてしまった。本当にこやつは遠慮がない。そもそもあーんだなんて……

「ま、前に一度だけ……ゴールドシチーのやつがあやつにせがんでいたのを注意したら『じゃあエアグルーヴもしてもらったら?』と言われて、その流れで……」

……する方ではなく、される方は経験してしまった。あれは確かに癖になる。同じ物だというのに、まるで味が違つて感じられたからな。

『おおっ——！』

「先輩可愛い……!」

くうっ、何なんだこの空気は!? 見世物になった気分だ!

「なるほどな。それにしてもドロドロ展開はないのか。まあゴールドシチーはそういう奴ではないということだろうが、やはり奴の方が上手だな。流石は恋敵だ」

「うんうん！ でもあたしがこの前読んでたやつだと、ヒロインが見てないところでライバルキャラがグイグイ迫ってたんだよ。ゴールドシチーもそのキャラに似てるから、ちよつと連想しちゃうな……」
「私もその作品は読みました。ヒロインとは友達というポジションになりつつ、それによつて意中の相手にも自然に近付き、狡猾に狙うハンターです」

「な、なるほど……でもアタシ、そういうお話はちよつと描きたくないかも。どのキャラも好きになってほしいから」

『流石先生（だね）（です）！』

な、何なんだ本当にこの空間は。私がいる意味が皆無なのだが。帰ってもいいだろうか。

「っ!？」

ふと視線を街中に移すと、トレーナーとカールが歩いていた。それはいい。しかし何故、

「何故ゴールドシチーがあやつの隣にいる!？」

用事とはゴールドシチーとのででで、デートだったということか!?

当然、私の大声に四人は反応して、すぐに私と同じ方向へ目を向けた。

「あ、本当だ。うわあ……腕も組んでる」

「デートの真つ最中つて感じだな。ゴールドシチー……やはり強い」

「これは修羅場が予想されます」

「え、エアグルーヴ先輩……っ」

ドーベルが私に何か言おうとしたが、何故か言葉に詰まった様子だった。

どうしたのだろうか、と思っていると、視界が霞んで来て、頬に何やら温かい感触が伝ってくる。

そう、涙だ。私は後輩や友の前だというのに、ボロボロと涙を流していた。すぐに止めようとしたが、ハンカチで拭いても拭いても涙が溢れてくる。

こんなにも苦しいのだな。好きな男が他の女という瞬間を目の当

たりにするということとは。

これ以上見たくない、と私が俯いて涙が止まるのを待っていると、「あれ、エアグルーヴじゃねえか……って、何泣いてんだ!? 何かあったのか!？」

頭上から聞き慣れた声が降ってくる。

足元にはカールがやってきて、いつもは行儀が悪いからと注意されて以来やらないのに私の膝に前脚を乗せて、私の頬を舐めてくれる。

「何でもない……貴様こそ、どうしてこんなタイミングで来るんだ……」

貴様は隣にいるゴールドシチーとよろしくやっていればいいではないか。今優しくされると、諦めるのが余計に辛くなってしまうのではないか。

「え、いや……ゴールドシチーの蹄鉄と一緒に選びに行つて、それも終わったからここで一休みしようとしたんだ。ここペットもOKだから。んでエアグルーヴたちがいて、声かけたらエアグルーヴは泣いてるし、どうしたんだってなるだろ、普通は。俺ら何年の付き合いだと思つてんだ?」

「っ!？」

ああ……そうだった……この男はこういう男だった。

異性からの好意には鈍感なくせに、接し方や距離感が絶妙で、すぐにこの男の傍が居心地の良い空間になってしまう。

悔しい。こんなにも翻弄される自分が情けないほどに。

愛おしい。こんなにも安堵し、二度とあんな思いはしたくないほどに。

「………エアグルーヴ、ちよつとアタシに付き合つて」

「? な、お、おい、ゴールドシチー……引つ張るな!」

私はゴールドシチーに強引に手を引かれ、店内のお手洗いへ連れて行かれた。

◇

「………一体何だと言うんだ?」

「エアグルーヴが泣いてた理由、アタシ分かってるよ?」
「っ」

ゴールドシチーの言葉に私の胸はドクンと跳ね上がる。

またいつぞやの時のように宣戦布告をしてくるのだろうか。と言うよりは勝利宣言でもするのか……

「呆れちゃったよ、エアグルーヴには。泣くほど取られたくないんだね?」

「……だったら何だと言うんだ?」

「さつさとあの人と付き合え、この通い妻」

「かよ!?!」

い、一体何なんだ? 何が目的でそんなことを言っている? 恋敵ではないのか、貴様は? そもそも蹄鉄選びとは言え、私と違ってあんなに仲睦まじくデートまでしていたではないか。

どうして――

「正直、今日のトレーナーの反応見ていけそうなら告白するつもりだったんだ」

「……そ、そうか」

「でも止めた。だって勝ち目ないんだもん。アタシといて、アタシの蹄鉄選んでるのに、あの人は終始エアグルーヴのことしか考えてなかったんだよ」

「……………は?」

「この蹄鉄はエアグルーヴに良さそう。このデザインならエアグルーヴに似合う。そろそろエアグルーヴの練習用蹄鉄を替える頃。全部エアグルーヴ。聞かされてるこっちは堪ったもんじゃなかったよ。お陰でアタシの恋心はフルボッコにされた」

——そう、だったのか……嬉しい。

「トレーナーは多分、自分からはエアグルーヴへの気持ちは言わないよ。年齢的なのとトレーナーとそのウマ娘っていうことを気にしてそうだから。そこら辺は真面目だからね、あの人」

「……………」

「だからね、エアグルーヴから伝えれば落ちるよ」

「おち……!?!」

「両思いだもん。あとはあの人をその気にさせればいいだけ。学園でもトレーナーとその担当が付き合うことは良くあることじゃん。だったらエアグルーヴから伝えれば万事解決。どう?」

「どう、と言われてもだな……」

どうすればいいのかわからん。そもそも私は初恋なんだ。初恋は実らないとか、恋に恋しているとか、そういう様々な意見がそこら中にあつてだな。

「アタシとあの人腕組んで歩いてただけで泣いてたのに、まだ踏ん切りつかない? 女帝って口だけ?」

「なんだと?」

「ほら、煽られたらすぐ凄む。それが答えだつて気付きなよ」

「……………」

「とにかく、アタシは手を引く。悔しいけど、全くアタシを意識してくれないもん。でもチームを離れるとかしないし、あの人に甘えるのも止めない」

「……………は?」

「だってトレーナーが唯一アタシを甘やかしてくれる存在だし。何よりウマが合うし。あの人の傍って居心地いいし。そもそももうちょい失恋の余韻に浸らせてくれても良くない? 恋愛対象じゃなくても、甘えられる相手はアタシだつてほしいもん」

「私は何とも言えん」

そもそも恋愛に対しての格が違い過ぎる。

私が男であれば、きっと私はゴールドシチーを放つてはおかなかつたはずだ。

それくらいに彼女は同性の私から見ても女としての魅力に溢れている。

「ま、そういうことだからさ。頑張つてトレーナーの女になってよ。もしアタシがここまでして何の進展もなかったから、マジでトレーナーのこと襲つて既成事実作つてアタシのモノにするからね?」

「……………分かった」

「相談には乗るよ。今まで同じ人を巡って争ってきたライバルだし、恋愛面に関してはエアグルーヴ頼りないもん」

「うぐっ」

「ほら、顔洗って。メイク直すならアタシの貸すから。メーカーは違うけど、ちゃんと赤のアイシヤドウあるよ♪」

「……すまない」

本当に女として完膚なきまでに叩きのめされた気分だ。

私が彼女に勝てたのは、あやつが私のことをそれくらい想ってくれているということと共に過ぎてきた年月のみ。

「約束するぞ、ゴールドシチー。女帝として、一人のウマ娘として、あやつを必ず手中に収める」

「ん。ちよつとはマシな顔になったね♪ ここにメイク道具置いてくから。んで、アタシはトレーナーに甘えて来るねー♪」

「おい」

「へへ、悔しかったら早く自分の男にしろっての♪ そんじやお先ー♪」

笑顔で手を振って彼女はこの場を去っていく。

私よりも彼女の方が悔しくて苦しいはずなのに、あれだけ泣いていた私とは違って、彼女は私に涙すら見せず笑顔を見せた。

すまない、ゴールドシチー。

感謝する、ゴールドシチー。

「私は必ず、この想いを告げて、結ばれるぞ」

それから私は顔を洗い、メイクを直して皆が待つテーブルへ戻ったが、ゴールドシチーが彼の左手首に己の尻尾を巻きつけていたのを見て、思わず「たわけー」と叫んでしまったことはどうか許してほしい。

友からの鼓舞？

お盆も終わり、故郷に帰省していたウマ娘たちも続々とトレセン学園へ戻ってくる。

一部はこのお盆を過ぎた時期から夏合宿に入るウマ娘たちもいるので、毎年この時期の寮はウマ娘の出入りが賑やかだ。

「グルーヴ、久しぶりー！ 帰ったよー！」

ここ栗東寮の一室、エアグルーヴとファインモーションが過ごす部屋にはファインモーションが元気に戻ってきたところ。

「……………ああ、久しいなファイン。此度は九州地方だったか？」

ところがエアグルーヴは心ここに有らずといった状態でファインモーションの方ではなく、窓の外を眺めながら言葉を返している。

「違うよー！ アイルランド！」

「アル○ンド……………ああ、鹿島ということとは茨城ということか。茨城は確かご当地ラーメンのスタミナラーメンがあったな」

「誰?! そして茨城にそんなラーメンあるの!? 明日行くしかないね

！ それは置いといて、ア・イ・ル・ラ・ン・ドゥッ！ 私の母国！

実家に帰ってたの！」

「ん……………ああ、そうだったな。すまない」

女帝らしからぬ間違いに覇気のなき。これには箱入りお嬢様でマイペースで有名なファインモーションも小首を傾げた。

いつもならば、

『ああ、帰ったのか。そしてまた手ぶらで帰ってきたのか。自分の荷物くらい自分で運ばんか』

とお決まりの小言を言われる。

ファインモーションは真正正銘のお嬢様。故に実家に連絡をすれば翌日には最寄りの空港に自家用ジェットを寄越してもらい、寮までリムジンが手配される。加えて着の身着のままでも帰っても実家に何もかも揃っている。故に旅支度なんてしたこともなければ、帰り支度もしたことがない。

そして毎回日本へ戻った際に学園の友達らに配るお土産を買い込み、国際便で送る。エアグルーヴはファインモーションのそういうところをいつも『少しは自分のことも出来るようになれ』と注意するのだ。

なのに今回はそれが無い。ファインモーションはそういう思考はないが、エアグルーヴの小言は彼女の優しさ故の言葉だとちやんと理解しているので、言われないことを寂しく感じた。

「グルーヴ、何かあったの？」

ファインモーションはベッドに座るエアグルーヴのすぐ隣に寄り添い、その手を取って、優しく訊ねる。

いつも優しくしてくれる彼女に何かが起こっているのであれば、今度は自分が彼女に優しくする番であるとファインモーションは考えたのだ。それが友達だと、エアグルーヴから教わったから。

「ファイン……」

「私で良ければ話してみて？　一緒に解決策を考えよう？」

「……無理だ」

「どうして？　私じゃ力不足なの？　私がお金持ちで容姿も超絶美少女で能力も超ハイスペックだから？」

「そういうことではない……というか、ナチュラルに自分を上げ過ぎだ、たわけ」

　　こんなく（投げやりな）たわけはく、はくじめてく。

　　どうして……友達がこんなに辛そうなのに、どうして私は何も出来ないの……と悲痛な表情を浮かべるファインモーション。

　　それを見て、エアグルーヴは静かに話し始めた。

「実はあやつともう三日間も顔を合わせていないのだ」

「……………ん？」

「ああ、あやつとは私の愛して止まないトレーナーのことだ」

「うん、それは言われなくても知ってる」

「そうか。とにかく、三日間も顔を合わせていないのだ」

「ケンカでもしたの？」

「そんな訳あるか、たわけ。ケンカなんかしたらその日の内に何とか

して和解し、今頃私はあやつの家罪滅ぼしに向かっている」

あ、ここはいつものグルーヴだ。とファインモーションは少し安心する。

いつもの通い妻グルーヴの思考がだだ漏れだから。

しかしそれでは何故三日間も顔を合わせていないのだろうか。

疑問に思ったことをファインモーションがそのまま訊ねてみると、

「あやつは今、茨城にある学園へ特別トレーナーとして出張しているのだ」

幸福はその腕を見込まれて地方のトレセンへ出張していると言う。

地方のレース競技ウマ娘を専門に受け入れている学園で、その地方で名家のご令嬢たちが通っているところだ。

トレセン学園では主だったレースがない夏の時期になると地方のトレセンから要望があれば、こちらのトレーナーを派遣する。中央はレベルが高いが、地方だからこそ学べることも多くあるので、トレーナーたちも勉強するつもりで出張するのだ。

そして今回は幸福にその話が回ってきた。チームのメンバーもその殆どが帰省し、トレーニングも暫くは自主トレなので二つ返事でその話を受けた。出張は一週間で、主にあちらのトレーナーたちと意見交換したり、地方でのトレーニングの見学や、中央のトレーナーとして地方のトレーナーたちにアドバイスをする。

因みに出張にはカールも一緒に、キャンピングカーをレンタルして寝食を共にするそうだ。レンタル料金は理事長の計らいで半分は学園側で負担。

エアグルーヴから理由を聞くと、ファインモーションは『私の心配した時間を返して』と言いたくなかった。

「まあ、好きな人に会えないのは辛いよね。でも毎日連絡はしてるんですよ？ だったら一週間なんてすぐだよー！」

しかしファインモーションは心優しきお嬢様。なのでどんなにエアグルーヴがくっつからない理由でダメグルーヴになっても、いつもの笑みで彼女を励ます。

「ああ、毎日朝と夜寝る前にメッセージで連絡をくれる。電話もした

いが、声を聞くと私の心がどうにかかなりそうだから我慢しているのだ。あやつも忙しいだろうしな」

「へ、へえ……」

もう末期症状なのでは？とフライングモーションは思ったが、言わない。ツツコミを入れたら負けだから。

「ならそんなに落ち込むことないんじゃない？」

「それもそうなんだが……」

「何か不安なことでもあるの？」

「実はあやつが出張に行く前に、私のばかプチを持っていけど、トレーナー室に飾っておいたものを持たせたんだ。そうすればあやつもぬいぐるみとはいえ、私の前なのだからだらしのない生活はしないだろう？」

「え、あ、うん」

そもそも幸福はそれなりに厳しい母親に育てられたので、エアグルーヴがいようがいまいが生活習慣は徹底されている。故に掃除好きのエアグルーヴでさえ、幸福の掃除スキルや整理整頓スキルには一切口出したことはない。

「しかし持たせたのは私なのに、こう思ってしまうんだ。あのぬいぐるみの私は今もあやつと共にいる。私が共にいけないのに……不公平だ、と」

「そ、そう……」

「だってそうだろう？　もしかしたらあやつと同じベッドで寝ているかもしれないのだ。本物の私を差し置いてだぞ？　腹立たしく思わないか？　愛バたる私でさえまだしたことがないのに」

「そうかな……」

物凄い気迫で熱弁するエアグルーヴに、フライングモーションは思わず手を離して体を逃げるように反らして「落ち着いて」とジエスチャーを入れる。

エアグルーヴはそれでまた元の位置に座り直したが、

「はあ……もうばかプチになりたい」

「え？」

とんでもないことを言い出した。

これは完全に掛かってしまっている。ファインモーションは何とかして彼女の冷静さを取り戻せるように、落ち着いた声色で「どうしてそう思うの？」と優しく訊ねる。

「どうして、か……今こうしている間も、私のぱかプチはあやつの側にいるんだ。あやつのために何も出来ないただの綿の詰め物の分際で！」

拳を握り、何とも言えぬ悔しさを滾らせるエアグルーヴ。冷静さを取り戻すどころか余計に掛かってしまった。

ファインモーションは言葉の選択ミスを痛感しつつ、「まあまあ」とエアグルーヴを宥める。

「でもさ、ぬいぐるみでもトレーナーさんが自分と一緒に眠ってくれてると思うと嬉しくない？ あと男の人なのにぬいぐるみ抱っこして寝てて可愛い、とか」

「……………あやつはいつも格好良くて可愛い」

「はえ？」

「あやつはいつも凛々しくて、スマートで、ふとした時に見せる悪ガキ感が可愛いのだ！」

「ふ、ふーん……………」

ああもうダメだ……………おしまいだ。

ファインモーションはどこかの王子みたいに嘆き、エアグルーヴから夕方まで惚気話を聞かされる羽目になった。

◇

「失礼するよ、ファイン、グルーヴ」

夕方になってエアグルーヴたちの部屋に寮長のフジキセキがやってくる。

ファインモーションがもう惚気話を聞かされたくないあまり、彼女へ『たふせて』とメッセージを送ったのだ。たすけてと送ったつもりが、視線を下げているとエアグルーヴから「聞いているのか？」と言われるので見ずに打った模様。それで察するフジキセキも凄いが、実はもう慣れっこだったりする。

「フジか、何か用か？」

フジキセキにエアグルーヴはそう訊ねるが、ファインモーションは眼だけで『ありがとう！』と伝えた。

「いや何、寮長の仕事も取り敢えず一段落したからね。良ければ一緒にディナーでも作らないか、というお誘いさ」

ファインモーションに『どういたしまして』とウィンクして見せつつ、エアグルーヴにそれとなく友達らしい訪問の理由を告げるフジキセキ。

「もうそんな時間か……そうしよう」

エアグルーヴはフジキセキの誘いに乗り、寮の簡易キッチンへ向かった。

夏季休業中もカフェテリアは開いているが、朝6時から昼の14時まで。

なので寮にいるウマ娘たちは外食するなり、簡易キッチンで自炊するなり様々。大抵は遊びの帰りやトレーニング帰りのついでに外で済ませて来てしまう。中にはカップラーメンみたいな物で済ます者もいるが、それはごく一部だ。

「……………」

手際良く料理をするエアグルーヴとフジキセキ。ファインモーションはラーメン以外の料理は壊滅的なので、テーブルクロスを敷いたりしたあとは優雅にお茶を飲んで料理を待っている。

「なあ、グルーヴ？」

「なんだ？」

「さつきから料理を見つめて深刻そうな顔してるよ。どうしたんだい？」

「いや、あやつはちゃんと食事をしているのかと、不安になつてな」
「それは問題ないと思うよ。向こうにだって食事する場所はあるはずだし、キャンピングカーならキッチンもあるだろうから。君のトレーナーさんは料理上手だと聞くし」

だから大丈夫だろう？とフジキセキが言うと、エアグルーヴはゆっ

くりと首を横に振った。

「違うのだ、フジ……」

「……あまり聞きたくないけど、何が？」

「あやつはモテる。私自慢のトレーナーであるから当然だ。格好良く可愛し優しいからな」

「う、うん」

ファインモーションはまた始まったと思い、耳を垂らして出来るだけ話が聞こえないように遮断する。

「しかもあやつがいるところはご令嬢たちが通う地方のお嬢様校だ。中央のトレーナーでしかも女帝たる私の杖。絶対にチャホヤされて、手料理なんかも食わされているに違いない」

「そ、そうかな？」

お嬢様なら手料理なんかしないと思うよ、とフジキセキは言いたいが、エアグルーヴが口を挟ませない。

「どこのウマの骨とも知らぬメスが作った物を私のトレーナーが食すと思うと、ドス黒い感情が湧き上がってくるんだ」

「……………」

末期じゃないか、とフジキセキもファインモーションも思ったが、何も言わない。病みグルーヴは今に始まったことでもないからだ。毎回幸福が出張したり、帰省したりすると三日目あたりから病みグルーヴと化すから。

「……で、さつきから気になってたんだけどね？」

「なんだ？」

「それ料理だけど、お弁当だよね？」

「あ……………」

エアグルーヴは幸福に会った過ぎて知らず知らずの内に彼のキラ弁を作っていた。

そのクオリティはかなり高く、フジキセキもファインモーションも『才能の無駄遣いだ』と心の中でつぶやく。

「会った過ぎて作ってしまった……………」

「事態を甘く見ていた私が悪かった。それで、それは食べるのかい？」

「食べたいほど愛おしいが、食べるのがかわいそうというジレンマ。納得がいく仕上がりなのに、一周回って虚しくなってきた。何をしているんだろ、私は。女帝が聞いて呆れる」

女帝の独白にフジキセキもファインモーションも『全くだ』と内心呆れた。

こんなにも恋い焦がれているのに、未だにその想いを告げていないのだから。

「もう夏休みが終わる前に襲っちゃえば？」

ファインモーションがお嬢様らしからぬことを口走るが、

「確かに。もう末期だからね……どうにかして彼の女になることを私からも提案するよ」

フジキセキもエアグルーヴの背中を押す。

ぶつちやけてしまえば、二人はもう恋煩いしているエアグルーヴが面倒臭くて堪らないのだ。

「し、しかし……」

「あのね、グルーヴ。余計なお世話かもしれないけど言わせてね？」

「な、何だファイン？」

「いつもガツガツ行くくせに変なところでいつも二の足踏んで何がしたいの？ 今世で結ばれる気あるの？ 来世で結ばれる気？ そう都合良くいくはずないと思うんだ。そもそも来世に賭ける方がリスクーだと思うんだよね」

「わ、私はちゃんと今生きている内に——」

「ならしのごの言っていないで告白しなよ！ 私、グルーヴの結婚祝いにアイルランド旅行プレゼントして、私のお屋敷に呼んで、そこでハネムーンベイビー授かってもらって、適当に妨害して出産するまでは家にいてもらう計画があるのに！」

「おい、何だその無駄に手の込んだ訳の分からん計画は!?!」

とうとうファインモーションまでも暴走してとんでもないことを口走る。

故にフジキセキは、

「まあとにかくグルーヴ。ファインモーションも私も、君たちには

さっさと結ばれてほしいということだよ」

追い打ちすることにした。

「今ここで彼女に逃げ道を与えると、また自分たちがこのくっつたらない惚気マシマシ話の餌食になるから。」

「……………分かった」

エアグルーヴは二人からの後押しに頷く。

ゴールドシチーやナリタタイシンからも常々言われてきた。

いつもみんな背中を押してくれている。ならば女帝らしく、決めてやる……とやっとな決意したのだ。

それを見た二人はやつとこの意味不明な惚気から解放されると、心の中で勝利のファンファーレを響かせたが、

「で、では早速、告白の予行練習に付き合ってもらいたいのだが……いいだろうか？」

地獄はまだまだこれからが本番だったことに恐怖する。

故に二人は付き合ってもらえるかと、幸福のキャラ弁を食べ尽くし、

エアグルーヴに夜遅くまでお説教したそうなの。

夏休みの終盤あるある

夏季休業も残り僅か。

この時期になると、大きく分けて2つのグループが出来上がる。

先ずはグループF

「ぬがあああつ!? 社会科の宿題終わらないっ! 読書感想文も終わってないっ! 今夜は徹夜だっ! 寮長の仕事もあるってのにな!」

「アルバイトし過ぎて宿題全然終わってないのー!」

「モデルの仕事やってると、どうしてもコツチのことまで手が回らないんだよねー」

「マーベラスはマーベラスなのに、どうしてマーベラスな宿題がマーベラスにこなせないのかなー?」

ヒシアマゾン、アイネスフウジン、ゴールドシチー、マーベラスサnderは夏季休業中の課題を貯めてしまうグループ。

それぞれ事情があるのは分かるが、彼女たちは学生。故にだからといって課題免除という慈悲はない。

一方のグループS

「いやあ、合宿前に全て終わらせておいたから、合宿が終わったあとはのんびりと釣り三昧でしたよ。にやはく♪」

「わたくしはキングさんに教わりながらコツコツとやってみましたわ!

あとは最後の読書感想文のみですの!」

「こういうのはさっさと終わらせるに限るよ。後々のこと考えるとダるいだけだし」

「全くだ。そもそも日頃から計画的にやっておけば、ああはならん」

セイウンスカイ、カワカミプリンセス、ナリタタイシン、エアグループは夏季休業中の課題はほぼ終わっているグループ。

セイウンスカイやナリタタイシンは夏季休業前から貰った課題に手を付けているため、夏合宿前になるとほぼ終わっていて、エアグループとカワカミプリンセスは毎日計画的にこなすことで、休業中で

も勉強する時間をほぼ毎日確保している。

今はチームトレーニングが終わったあとで、みんなはエアコンがある快適なトレーナー室へとやって来た。

前者は課題をこなし、後者は優雅にトレーニング後のティータイム。

今日は前者たちのことも考慮して幸福が午後のトレーニングは休みにしたのだ。トレーニングは大切だが、学業に支障が出てはトレーナーも教師陣から注意されてしまう。レース競技ウマ娘とはいえ、彼女たちは学生の身なのだ。

「毎年思うが夏休みの課題とか懐かしいなあ」

そんなメンバーの様子を幸福は己の仕事をしながら、思わずつぶやいてしまう。

「トレーナーがアタシたちと同じくらいの時はどうしてた？」

幸福のつぶやきに反応したナリタタイシンがウマホの画面から視線だけを外して、ふとそんな質問をすると、

「こやつの家は母親がそういうことには厳しかったらしくてな。何でも、7月中旬に全ての課題を終わらせないと何もさせてもらえなかったから、死ぬ気でやっていたらしい」

彼の代わりにエアグルーヴが愉快そうに答え、質問を受けた本人も『そうそう』と言うように頷いた。

ナリタタイシンは「へえ、そうなんだ」と返したが、エアグルーヴが幸福の過去を把握していたことに内心驚いていた。

「(ねえ、あれで本当に付き合っていないの?)」

「(みたいだよ? というか、トレーナーとその担当ってだけであそこまで相手のこと分かっているのって凄いやな)」

小声で訊ねるアイネスフウジン疑問にヒシアマゾンは苦笑いしながら返す。

幸福には聞こえていないが、当然エアグルーヴには聞こえているので、ヒシアマゾンは思い切り睨まれ、即座に姿勢を正して課題に視線を落とした。

◇

「あ、そういえば……スペちゃんから聞いたんだけど、明日近くの神社でお祭りやるんだってー。屋台も結構出るみたいだから、みんなで行かない？ スペちゃんもエルちゃんもグラスちゃんもキングもチームのみんなやトレーナーと行くみたいなんだよねー」

日が傾き始めた頃、まだまだ課題組が必死に手を動かしている中、ソファアに寝そべるセイウンスカイがふと思いついたことをみんなに告げる。

明日は夏季休業中最後の日曜日。チームトレーニングも休みなので、タイミング的にはバッチリだ。

「アタシは先約がある。チケットとハヤヒデに誘われてるんだ。まあでも結局向こうで会うことになるかも。特にチケットは『大勢で回った方が楽しいよー!』とか言い出すに決まってる」

心底面倒くさそうに言うナリタタイシンだが、耳はピコピコと震えている。何だかんだ言いながら楽しみにしている証拠だ。

「にやははく、ならタイシン先輩は現地で落ち合いましょ。他の皆さんはどうですか?」

「アタシは問題ないよ! 今日中に宿題終わらせて、終わったら寝て、起きたらお祭り! 完璧だ!」

「マーベラスも行くー! でもマヤノとカレンとポーノと行く約束してるから、タイシンさんみたいに現地で合流した方がマーベラス!」

「あたしは大丈夫なのー! アルバイトももう終わったし、あとは宿題終わらせれば行けるの!」

「わたくしも大丈夫ですわ。感想文も今しがた終わりましたし」

「アタシも仕事の予定ないから行けるよ。宿題徹夜しないとだけど……」

「私も特に問題はない。生徒会の方で急な仕事があればだが」

ナリタタイシンとマーベラスサンデー以外は最初から一緒に行動出来るようで、セイウンスカイは「じゃあ明日の12時にトレーナーさんのマンション前に集合で!」と言う。

「え、俺の意見は?」

当然、ツツコミを入れる幸福だが、

「いやいや、トレーナーさくん。引率つてのが必要でしょう？ いいんですか？ か弱きセイちゃんたちを街に放り出して？」

セイウンスカイにそう言われれば、幸福は「端からそのつもりだったのか」と苦笑いを浮かべる。

「別に嫌とは言わないが、素直に一緒に行こうって誘ってくれ」

「にやは、トレーナーさんなら二つ返事で来てくれるとセイちゃんは思っていたので♪」

相変わらずのセイウンスカイに幸福は「んな態度してるとウンスには何も奢らないからな」と反撃を食らった。

当然セイウンスカイは「そりやないよトレーナーさくん」とわざとらしい泣き真似をしつつ、幸福の横にやってきてチラチラと盗み見し、そんな彼女に幸福は苦笑いで「お前って本当に調子いいよな」と返して結局許すのだった。

翌日。

幸福はセイウンスカイに言われた通り、引率者としてチームのメンバーたちとお祭りにやってきた。

そこまで大きい規模のお祭りではないが、商店街も協力しているので屋台はそれなりの数があり、学園の生徒たちの多くがお祭りに足を運んでいる様子。

ただ、

『はい』

『ずるっ』

『はい』

『ずるっ』

『はい』

『ふーふー……ずるるっ』

小さなイベント会場で行われている「わんこ蕎麦時々ラーメン」という謎大食いイベントに芦毛の怪物と日本総大将が果敢にチャレンジしていた。

その隣ではホットドッグの早食いをするタイキシャトルとタマモ

クロスがいるが、やはり見応えは前者に軍配が上がる。

お祭りなのでエアグルーヴもあまり目くじらを立てる気はないが、どうしても『貴様らはどうしてもどこでもそうなのだ……』と特に前者二名に対して天を仰いでしまった。

「何か欲しいのがあった場合はその都度俺に言うように。各自三千元まで今までのご褒美で奢ってやる。それと他の人の邪魔にならないように、二列になること」

引率者らしく幸福がそう言えば、みんなは返事をしてヒシアマゾンとセイウンスカイを先頭にして屋台エリアを歩く。幸福は彼女たちの最後尾。

「結構浴衣着てる人多いね。良かったね、レンタルしてきて♪」

「私はゴールドシチーに言われて付き合っただけだからな？」

幸福の前を歩くエアグルーヴとゴールドシチー。二人は昨日の解散後に駅前の呉服屋で浴衣のレンタルを頼み、集合時間前に着付けてもらった。

ゴールドシチーは黒地に赤や白の金魚柄の浴衣で、帯は涼し気な青。左に寄せたサイドテールを青と白の朝顔の髪飾りでまとめている。

一方のエアグルーヴは涼し気な薄水色地の白や赤の牡丹柄の浴衣に、柔らかい黄色の帯。右耳の付け根に白と赤のバラの髪飾りを装着。

これはゴールドシチーがエアグルーヴに提案したことで、普段しない格好をすることで幸福の視線を釘付けにする作戦らしい。

「(どう? トレーナー、見てる?)」

「(見てはいるが……多分引率者として見ているに過ぎないだろう。視線は感じてみずつとではない)」

二人は幸福に聞こえないように言葉を交わす。

ウマ娘の視界は人間とほぼ同じだが、真後ろ以外からであれば視界に入っていない相手も相手を把握出来る。

実際レースで真後ろに付かれると厄介なので、どのウマ娘でも背後を気にして走っている。

彼女たちがコースを全力疾走するのに接触事故が少ないのは、そういう能力的なところが大きいのだ。

「トレーナー、アタシとエアグルーヴの浴衣姿どう？」

「お、おい」

こういう場面で臆さず相手に感想を求めることが出来るゴールドシチーに対して、エアグルーヴは『やめろ』とアイコンタクトする。しかし、

「おう、綺麗だぞ。後ろ姿でも二人共美人って直ぐ分かるしな。役得って感じだなあ」

幸福も幸福で素直に感想を述べてしまう。

当然、エアグルーヴは顔を真っ赤にして俯き、そんな彼女をゴールドシチーは口笛を吹きながら肘で小突いた。

「おや、チームデネボラもお祭り見物かな？」

そこに声をかけてきたのはシンボリドルフ。

彼女の隣には岡部の姿もあり、この二人もお祭りの見物に来ている。因みにシンボリドルフは深緑地の柄のない浴衣を身につけ、帯は赤地に黄や白の花喰鳥文。岡部に至ってはブレずに今日もいつものスーツ姿で汗一つ掻いていない。

「岡部さん、ドルルフ会長、お疲れ様です。そちらは二人ですか？」

幸福が礼儀正しくお辞儀して質問すると、

「いや、チームで来たんだが、みんな何故か散り散りになってな。まあ幼い子どもでもないから好きにさせてるんだ。何かあればこちらの匂いを辿って来るだろう」

岡部が苦笑いで返した。

チームリギルのメンバーは学園内でもかなり個性派揃い。シンボリドルフとナリタブライアンを始め、タイキシヤトルやマルゼンスキーにフジキセキ、エルコンドルパサーとグラスワンダー、テイエムオペラオーと皆癖が強い。

現にタイキシヤトルは既に早食い競争に参加していたし、マルゼンスキーとフジキセキ、テイエムオペラオーは二人の後ろでファンに囲まれ、エルコンドルパサーは何故かグラスワンダーに首根っこを掴ま

れて引きずられている。きつとまた辛い物の食べ過ぎでグラスワンダーに怒られたのだろう。唯一姿が見えないナリタブライアンは多分どこかで肉を食べていることだろう。

「まあそちらも大変だろうが、楽しむといい」

「はい。それでは失礼します」

こうしてトレーナー同士は軽い挨拶で終わったが、

「エアグルーヴ、頑張ってくれ」

「は、はい……ありがとうございます」

シンボリルドルフはしっかりとエアグルーヴを鼓舞するのであった。

お祭りを堪能した一行は、門限を考慮して帰路につく。ナリタタイシンのグループやマーベラスサンデーのグループも合流したので、行きよりもかなり賑やかだ。

セイウンスカイとアイネスフウジン、ヨーヨー釣りで釣り上げたヨーヨーを両手それぞれの五本指に垂らしてパチンパチンしていて、ヒシアマゾンとカワカミプリンセスはくじ引きで当てた50センチほどの大きなテディベアを抱っこしてニッコニコ。

ゴールドシチーは人参アメを幸せそうに頬張り、マーベラスサンデーは綿飴を食べ過ぎたとかでお腹がちよつと出ている。ナリタタイシンは相変わらず手ぶらだ。何でもウイニングチケットとビワハヤヒデが型抜きにハマり過ぎて特に屋台を回らなかつたそう。悪戦苦闘する二人を見ているのはそれなりに面白かつたらしい。

「そういや、その浴衣つてお店に返すんじゃないのか？」

「そうだが、返却するのは翌日だ。今日中だつたらもつと早くに帰るだろう。たわけ」

そんなみんなの最後尾を幸福とエアグルーヴが並んで歩く。

エアグルーヴは相変わらずの調子だが、実際はかなりお祭りを楽しんだ。

幸福が射的で当ててくれたお菓子の詰め合わせやたこ焼きを食べさせてもらったりと、それはもう嬉しいこと尽くしだったから。

「それもそうだな」

「にしても貴様……殆ど奢っていたが、ちゃんと大丈夫なんだろうな？ 奢ってもらっておいて今更だが……」

「大丈夫大丈夫。俺、あんま金使うような趣味ないし、貯まってく一方なんだよ」

「それはそれでどうなんだ……全く」

「仕方ねえだろ？ 俺は仕事が趣味みたいなもんだからな。エアグルーヴたちのトレーニングとか考えてるの楽しいし、エアグルーヴたちがいレースで走ってるのを見ると嬉しいし誇らしい」

「……………たわけ」

今そういうことを言うのは反則だろう！とエアグルーヴは心の中で叫んで、高鳴る胸の鼓動を必死に制御する。

（落ち着け私……狙ってもいないのに格好良過ぎだろう。ドキがムネムネしたではないか！ これ以上私を惚れさせてどうしたいのだからの男は！）

完全に掛かってしまっているエアグルーヴ。

「そう言うなよ。んなことエアグルーヴなら知ってるだろ？ 俺ら何年の付き合いよ？」

「……………たわけ」

「んだよー。俺の愛バなのに薄情だなあ」

「……………うるさい」

「はいよ。それじゃあ静かに歩きますよおつと」

相変わらず軽口を叩く幸福だが、エアグルーヴは彼に対して『うるさい』と言ったのではない。

（愛バだと……言ってくれた……。いや、前から言ってくれてはいるが、何度聞いても心臓に悪い。心臓の音が周りに聞こえているのではないかと思うくらいに……うるさい）

ときめきで自分の鼓動の音がうるさかったのだ。

そんな二人の前を歩く大勢は、

『（なんであそこまでの雰囲気が出てるのに、付き合っていないのこの二人……………）』

と口の中が思わず甘ったるく感じてしまうのだった。

あと一步の勇氣

残暑厳しい9月。

各チームが秋のレース戦線に向けて本格的に動き出す。

「シチー！ アイネスに引き離されるな！ お前の脚はそんなもんじゃないだろ！」

「分かつてるってっ！」

「いくらシチーさんでも捕まらないのー！」

ダート坂で、アイネスフウジンと本番さながらのラストスパート特訓をするゴールドシチー。

来月の前半に京都大賞典を控え、トレーニングも気温が生ぬるく感じられるほどに苛烈さを増していた。

「カワカミはスタートが遅い！ それじゃあ序盤からバ群にのまれるぞ！ どこからでも絶好ポジションを取れるようにスタートを極めろ！」

「何度だってやりますわ！ プリンセスは努力とど根性ですわよ！」

そしてカワカミプリンセスも来月にはトリプルティアアラ路線最後のティアアラ、秋華賞が控えており、ダブルティアアラを狙いに行く。

彼女の後輩ダイワスカーレットが去年は秋華賞を獲った。

ウマ娘は学年関係なく、そのウマ娘にトレーナーが付き、4月からトウインクルシリーズのキャリアがスタートする。

カワカミプリンセス自身、キャリアのスタートが遅くなって当初は焦りもあったが、今はそんなことを気にすることなく幸福を信頼して自信を高めていた。

「休憩っ！ パラソルに入って水分補給だ！」

午後14時になったところで、幸福は休憩を入れる。

この時間は一番気温が高いので、無理してトレーニングをするといくらウマ娘といえど体力の消耗が激しいのだ。

故に幸福はここからはこまめに小休憩時間を取り入れ、長時間のト

レーニングを避ける。

「脚や体調に違和感があるやつは隠さず言えよー？」

幸福の声にみんなはしつかりと己の脚や体調に違和感がないことを確認し、それを各々確認し終えるとパラソルの下に腰を下ろした。

「くあく、キツいなあ」

「お疲れ、ゴールドシチー。ほら」

エアグルーヴがゴールドシチーに冷えたレモン水が入った紙コップを手渡す。

「ありがと。んくんく……はあく、美味しくいつ」

「渴いた体に染み渡るな」

エアグルーヴも隣に腰を下ろし、喉を潤しつつ、穏やかな表情を浮かべた。

「そだね。エアグルーヴはどう、調子のほどは？」

「まずまず、と言ったところだ。緩みも力みもしていない」

「そかそか。次はジャパンカップだったよね？」

「ああ」

「もう出走が決まってる子いる？」

「リギルからはブライアンとエルコンドルパサー。スピカからはトウカイテイオーとメジロマツクイーンが出走するとは聞いているな。こちら私もアマゾンが出走する」

「あれ、ヒシアマも？ ヒシアマって今年もエリザベス女王杯出るとか言ってたなかった？」

エリザベス女王杯とジャパンカップの間は短い。故にゴールドシチーはいくらヒシアマゾンでも短い期間でレースが続くことに懸念を抱いているのだ。

「そうなのだが、アマゾンは今年その二つを目標にされていて、これまでは小さなオープンレース等しか出ていなかったからな。やる気も体調も有り余ってるらしい」

「あく、なるほど。だからあんな元気なのかあ」

ゴールドシチーがそう言って苦笑いする視線の先では、

「トレ公トレ公！ 次は何やればいいんだ!？」

「待て待て。しっかりと休憩しろって言ったばかりだろ」

「頼むよトレ公お、アタシ走りたくて仕方ないんだよお」

「あ、ったく……なら流しで3000走ってこい。それ終わったら泣いても休憩だからな」

「やた！ あんがとトレ公！ 愛してるう！」

ヒシアマゾンが元氣一杯に投げキツスして全速力でターフを駆けていく。

「……あいつ、流しでって言葉分かってねえだろ」

幸福は呆れた様子でヒシアマゾンを見送るが、彼女の気持ちも理解するので、呼び止めることはしなかった。

「相変わらずだね、ヒシアマ」

「……ああ」

「愛してるとか言つてて嫉妬した？」

「いや、私もあんな風に言つてみたいと思つてな」

「言えばいいじゃん」

「出来たらこんなに苦労はしてない」

「まあ、確かにエアグルーヴのキャラじゃないよねー」

ケラケラと笑うゴールドシチーはエアグルーヴは恨めしそうに睨む。

ゴールドシチーやフジキセキ、ファインモーションたちから度重なる後押しを受けてきたエアグルーヴだが、未だにその想いを告げるところまでいっていない。

告げたい気持ちは強くても、どうしてもこういうことには二の足を踏んでしまうのが乙女グルーヴなのである。

「あのさ、そんなんで今世中に結ばれる気あるの？」

「それは無論だ……来世でだって結ばれてやる」

「いや意気込みはいいけどさ、今世中を考えてよ。結ばれないと来世でも無理じゃん」

「た、確かに……巡り会えたとしても、結ばれることは……」

「いやそこじゃなくてね……」

考えていることは乙女だが、ゴールドシチーが言いたいのはそうで

はない。

流石のゴールドシチーも思わず頭を抱える。

「もう占いとかなんでもいいから、口実作ってさっさと付き合え」

「……ああ」

ゴールドシチーの呆れきった嘆きにも近い言葉に、エアグルーヴは申し訳なく思った。

エアグルーヴの調子が下がった。

その次の日。エアグルーヴは昨日ゴールドシチーに言われたことが気に掛かり、精彩を欠いていた。

幸福と過ごしていても、どう思いを告げるかで話が噛み合わず、食事もあり喉を通らない。

体調不良にならないように心掛けてはいるが、この調子が続くと流石にまずいとエアグルーヴも思っている。

しかし、

「あやつのことを考えるだけでずきゅんどきゅんして想いを告げるところではないッ！」

どーきどきどきどきどきどきどきどきしてそれどころではなくなってしまう。

「ああ、私は女帝失格だ……好きの一言も言えないとは、情けない」

机に顔を突っ伏し、嘆く女帝。

そんな彼女を、

「……エアグルーヴ、苦勞しているな」

「というか、とうとう私たちの前でも隠す気がなくなっただけな」

シンボリドルフとナリタブライアンがただ見守っていた。

ナリタブライアンに至っては最初は面白がっているだけだが、

「こうも煮え切らないでいられると、流石に苛立ってくるな。漫画の友達ポジの気持ち少し分かって来たぞ」

今は何とも言えない様子である。

「エアグルーヴ」

「はい、会長……」

「生徒会の仕事のことはいもういい。ブライアンもいることだし、君は彼のところへ行くといい」

「しかし……」

「そんな状態ではとても君に仕事を任せられない。トレーナー君のところへ行かないにしても、もう休んでくれ」

「……申し訳、ありません」

「焦る気持ちも分かる。しかし焦ってもいいことはない。だから今日のところはゆっくりと過ごした方が君のためだ」

「分かりました。ではお言葉に甘えます」

そしてエアグルーヴはよろよろと生徒会室をあとにし、そんな彼女をシンボリルドルフは鼓舞するように見送った。

◇

「はあ……何をしているのだ、私は……」

あれだけ幸福の前になると狼狽するというのに、結局足は幸福がいるトレーナー室に向いており、その前に立っている。

ぼやくエアグルーヴにトレーナー室のドアは何も返さない。

室内からは先程からキーボードを叩く音と幸福の落ち着いた息遣いが聞こえてくる。それだけでエアグルーヴの心は温かくなった。

「……よし」

決意し、トントントンとノックをするエアグルーヴ。

幸福からの返事が来てからドアを開けた。

「あれ、エアグルーヴじゃねえか。もう生徒会の仕事終わったのか？」

「……実は少し調子が優れなくてな。早めに上がらせてもらったんだ」

「ああ、それで寮に戻る前にここで一休みさせてくれたってことか。今日はトレーニング休みだもんな」

「……ああ、構わないな？」

「勿論だ。何か飲むか？ 他に必要な物とか」

「いや、構わなくていい。ソファアを借りるぞ」

そう言っつてエアグルーヴはソファアに腰を下ろし、背もたれに身を預ける。

幸福に至ってはエアグルーヴにそれ以上何も言わず、己の仕事に戻った。

(何も訊かず、ただ甘やかしてくれる……本当に優しいやつだ)

天井を見つめながら、想い人に想いを馳せる。

カタカタとキーボードを打つ音だけが響き、エアグルーヴはただ幸福が傍にいてくれるというだけで先程までのもやもやが晴れていた。(恋とは不思議なものだ。ただ相手を近くに感じていただけなのに、こんなにも安心するとは……)

ちらりと幸福の方を見れば、彼は真剣にパソコン画面を見つめて作業をこなす。それだけなのに、その姿すら輝いて見え、エアグルーヴの鼓動はとくんとくんと小さく甘い悲鳴をあげた。

(はあああ……好き。好き過ぎる)

再度天井を見上げ、自身の奥底から湧き上がる幸福への愛を滾らせるエアグルーヴ。

しかし彼女はそれをまだ口には出来ない。

(トウインクルシリーズを辞す時に告げるべきか。それともジャパンカップを制したあとに告げるべきか……それとも花が咲いた時に、さり気なくというのも……)

乙女心とはとても繊細で難しいものである。

「……ちよつと花摘んでくるわ」

「ああ」

「ついでの購入でコピー用紙買ってくるんだが、何かいるか？」

「……人参プリン」

「はいよ」

普段のエアグルーヴならこうしたおねだりはしないが、幸福の厚意を無下にすることも心苦しいので甘い物を頼んだ。

◇

幸福がトレーナー室を出て行って少しした頃、エアグルーヴは彼が使うデスクの椅子の背もたれに掛かっていたタオルが目止まる。

(あれは……先日もあったな。あやつにしては珍しい。持って帰るのを忘れたのか？ たわけめ)

親切心でエアグリーブはそのタオルを畳んで、彼の仕事鞆の上に乗せておいてやろうとした。

しかし手にした瞬間にエアグリーブの動きが止まる。

「……………ほう」

一晩放置されていたのもあり、タオルには彼の匂いが染み込み、それはエアグリーブの鼻孔をこれでもかと蹂躪した。

30代男性が放つ雄臭さが、恋に悩める乙女に襲い掛かり、気が付けばエアグリーブはそのタオルを顔に押し付けていた。

「すんすん……………はあ……………あやつめ……………ふーっ、ふーっ」

背徳感と高揚感が押し寄せる。何より好いた相手の無遠慮の香りが、無理矢理自分を襲ってくれているみたいで、エアグリーブの表現はとろんと蕩けて、その瞳の奥にはハートマークが浮かび上がった。

「ダメだ……………私は何を……………いや、しかし、これは……………」

抗えん！と自分に言い訳して、それを抱きしめたままソファアに寝転ぶ。

あられもなく制服のスカートがはだけて白い太腿が露わになるが、そんなことお構いなしに愛して止まない男の匂いを堪能した。

「……………いかん。これは私をダメにする」

元々エアグリーブには匂いフェチの気はあったが、これでハッキリしてしまった様子。

(思えば、やつの匂いは最初から好ましいと感じた。最初は草花の香りがするからだと思っていたが、どうやら違ったようだ)

今になって匂いからして好みだったと分かったエアグリーブは、どこか嬉しそうに口端を上げる。

自分がこんなにも最初から幸福のことを好きだったのか、と知れたことが嬉しくて堪らないのだ。

(落ち着く匂いだ……………ああ、これが毎日嗅げたのなら、それだけでバ生バラ色ではないか。あのたわけめ)

するとそこで幸福の足音が聞こえてきて、エアグリーブは我に返る。

こんな変態チックなところを見られてもしたら、想いを告げる前に破滅してしまう。

なのでエアグルーヴは急いで起き上がり、そのタオルを名残惜しく思いながらも幸福の鞆の上へ乗せた。

その後すぐにドアが開く。

「ただいま……って、俺の鞆のどこで何してんだ？」

「き、貴様がこのタオルを忘れていると思ってな。分かりやすいように鞆の上に乗せてやったのだ」

「あく……わざわざありがとな。というか、女の子に汚い物触らせてごめんな」

「気にするな。貴様以外のは触らん。考えただけで蕁麻疹が出る」

「そこまでかよ……まあありがとな。人参プリン買ってきたぞ。もう食うか？」

「……あーんを要求する」

「今日はとことん甘えグルーヴさんで」

「たまにはいいだろう、たわけ」

「弁当交換の時には大抵食べさせてやってる気がするんだが？」

「……………」

「はいはい、そう睨むなよ。ソファアに座って待っててくださいねえ、女帝様」

「それでいいのだ、たわけ……♪」

その後、エアグルーヴは想いを告げることを忘れ、幸福から人参プリンを甲斐甲斐しく食べさせてもらおうのだった。

私は犬である

「私は犬である。名前はカール。」

「ご主人様である伊藤幸福様の誇り高き愛犬だ。」

今日はご主人様が朝になつてもずつとお家にいるから、一緒に過ごせる嬉しい日。

過ごせない日もあるけど、お留守番は私のお仕事でもあるし、お留守番を頑張ったあとはいつもたくさん褒めてもらえる。

私はそれがとっても嬉しい。

それにこういう日は、

ピンポーン

「ワンツッ！」

ガチャリ

「おう、エアグルーヴ。いらっしやい」

「ああ、邪魔するぞ」

「ワンツッ！ ワンツ、ワンツッ！ ハツハツハツッ！」

「カール……元気にしていたか？」

前のご主人様エアグルーヴ様が来てくれる日でもある。たまに来てくれない日もあるけど。

この方は私に名前をくれた最初のご主人様。今のご主人様も大好きだけど、前のご主人様も私は大好きだ。

前はそんなにお家まで来てくれなかったけど、最近はよく来てくれる。

やっとうご主人様たちは番になったのかなって思ったけど、どうやら普通の番とは違うらしい。

「どうしたカール？ そんなに私の顔を見つめて？」

「遊んでほしいんじゃないか？ カールはエアグルーヴと遊ぶのが大好きだからな」

「ふふっ、そうか。では遊ぶとしよう」

前のご主人様はそう言って私の黄色い首輪に青いリードを繋ぐ。

これがないと遊びに連れてってもらえない。だからリードを繋いで
もらうととっても嬉しくなって、自然と尻尾を振っちゃう！」

「ほら、喜んでめっちゃ尻尾振ってる。振り過ぎてお尻も振ってるぞ」
「おい、カールも女の子なんだぞ？ 女の子になんてことを言うんだ
たわけ」

「すみません」

前のご主人様はよく今のご主人様を「たわけ」って言う。この言葉
はいけないって意味。このやり取りを見たら今のご主人様の方が格
下だと思っちゃうけど、実は違うんだ。

「んじや、行くか。ちゃんと用意はしてあるからな」

「そうか。感謝する」

ほら、今のご主人様の方が毅然とした態度で主導権握ってる。だか
ら今のご主人様の方が格上だから、私は今のご主人様が一番だと思っ
てる。

◇

私はご主人様たちと近くの公園にやって来た。ここは噴水もあつ
て私も大好きな場所。

それにここは、

「よし、走るぞ！ ついてこい、カール！」

「ワンツ！」

リードを外してもらって前のご主人様と一緒にいっぱい遊べる場
所なんだ！

今のご主人様と一緒に掛けっ子するとすぐに疲れちゃって終わつ
ちやうけど、ボールを投げてくれたり、ビューンツて飛ぶ平なやつを
投げてくれたりして遊んでくれる。それをキャッチしてご主人様の
ところへ持っていくと、いっぱい褒めてくれるんだ！

「注意して走れよ！ 遊んで怪我するとか勘弁だかな！」

「分かっている！ 誰に言っているのだ、たわけ！」

前のご主人様とっても嬉しそう。私と一緒に尻尾ブンブンだもん。
早くちゃんとした番にならないかな。そうすればずっと一緒にいら
れるし、ご主人様たちも幸せなはずなのに。早く家族になろうよ！

◇

「む……あんなものが出来たのか」

前のご主人様が掛けっ子しながら別の方を見てる。

なんだか、ご主人様が走るところに似てるし、ご主人様と同じウマ娘の小さい子たちが走って遊んでる。

「子ども用の模擬レース場……ふつつ、私もあれくらいの頃はお母様と一緒によく近くの模擬レース場で遊んでもらったな」

ご主人様、優しいお顔をしてる。今のご主人様にする優しいお顔とはちよつと違うけど、私によくしてくれるお顔に似てるかな。

「あー！ エアグルーヴだ！」

「エアグルーヴさんだ！」

「本物だー！」

ご主人様のところに子どもたちが集まってきた。

ご主人様大丈夫かな？ 何かあったら私のご主人様守らなきゃ。

「ああ、私がエアグルーヴだ。レースの邪魔をしてすまないな」

『はわあ〜っ☆』

大丈夫そうだ。みんなご主人様が好きみたい。お目々キラキラしてるし、尻尾もブンブンしてるもん。

「あ、あの、良かったら早く走れる方法を教えてください！」

茶色い毛の子がご主人様をお願いすると、他の子たちも次々にご主人様に詰め寄ってきた。私の出番かな？

あ、でも大丈夫だ。こういう時はいつだって、

「お〜、相変わらずエアグルーヴは人気者だな〜」

今のご主人様が駆け付けてくれるもん！

いつも私たちのあとをゆっくりでも追い掛けて来てくれてるんだよね。流石私のご主人様！

「あつ、エアグルーヴのトレーナーだ！」

「本物だー！」

「男の人なのにお父さんと違ってお花のいい匂いするー！」

今度は今のご主人様も囲まれちゃった。ご主人様たちは人気者なんだなあ。私も鼻が高いや♪

「おーおー、元気なこつて。まあ君らにとっては遊んでたところにスター選手が来たようなもんだからなあ」

「何を他人事のように言っている。貴様はそのスター選手を育てた名トレーナーなんだぞ？」

「おつ、エアグルーヴがそう言ってくれるなんて珍しい。思わず嬉しくなるじゃねえか」

今のご主人様とっても嬉しそう。私たちみたいに尻尾はないけど、嬉しい時の声と匂いだ！

「う、嫌い……それより先程の質問は私より貴様の方が適任だろう。見てやったらどうだ？」

「え、マジか……」

「大マジだ。それに見ろ、この子たちの期待に満ちた眼差しを。貴様はそれを受けても尚拒むのか？」

『エアグルーヴのトレーナー（さん）！ お願いしますっ！』

おー、やっぱり今のご主人様の方が格上なんだな！ みんなご主人様のことしか見てない！ 前のご主人様も見つめてる眼差しが柔らかいし、嬉しいってのが伝わってくる。

「ん、じゃあ走り方見たいから、みんなあっちのゲートからこのコースを一周してくれ」

『はい！』

小さい子たちが走り出すと、ご主人様は顎に手をやって真剣にあの子たちの様子を見た。

前のご主人様は今のご主人様の方ばかり見てる。お顔がちよつと赤いし、心臓の音が掛けっ子してる時より早くて大きい。どうしたんだろう？

◇

「はあ……オフだつてのに、真面目にトレーナーっぽいことしちゃったぜ」

「流石の手腕だったと思うぞ。私も鼻が高い。皆感謝していたし、いいではないか」

「まあなあ。やっぱりウマ娘って走るのが好きだし、それをもっと好

きにしてやれるように手助けするのがトレーナーだと思ってるからな。だから子どもといえど、こればかりはマジになっちまう。性分なんだろうな」

「貴様のことを誇らしく思うぞ」

子どもたちとお別れして、私たちは屋根があつて座るところ（ベンチ）で一休みしてる。

今のご主人様がこういう時は毎回ご飯を用意してくれるんだ。

最近はお前のご主人様も今のご主人様から私みたいに食べさせてもらつてることも増えたから、今のご主人様がリーダーだつてのがよく分かる。

「あー……」

「なんか最近あーんするのがデフォになつてる気がする」

「んう？」

「上目遣いで首傾げられても、俺が疑問に思つてるんだが？」

「ごくん……嫌なのか？」

「嫌つていうか、最近することが多いからさ。なんかあつたのかなつて」

「気にするな。してもらいたいだけだ」

「さいですか」

「ああ。次はそのトマトとツナのがいいな……あー」

「ほいほい」

うーん。私から見ても二人は番で間違いないんだけどなあ。でも一緒に暮らしてないんだよなあ。どうしてだろう？ 番なら一緒に暮らして、子孫を残すために頑張らないといけないのに。ご主人様たちは子孫残さないのかな？ 不思議だなあ人つて。

「ほら、カールも不思議そうに見てるぞ？」

「……だから、甘えたいだけだ。学園にいたら、私は女帝として皆の手本にならなくてはいけないだろう？ しかし、ずっとそれだと疲れるから、俺の前では甘えていいと言つたのは貴様だ」

「確かにそうだが……最近になつて急に頻度が増したからさ。悩みがあるなら言つてほしいんだよ」

「……悩み、か。では一つ聞きたいことがある」

「お、なんだ？」

「貴様のご家族はその……ウマ娘をどう思っている？」

「俺の家族が？ いや、普通だろ。実家の店にもウマ娘を結構雇っているし、叔父さんとはウマ娘専門の料理屋だし……そもそも兄貴は店でアルバイトしてたウマ娘と結婚してるからな」

「そ、そうなのか……なるほど」

「そんなの聞いて何になるんだ？」

「い、いや、級友に……そう、級友に好きな相手がいてな！ それが担当してくれているトレーナーらしく、その想いを告げるか悩んでいたんだ！」

「ああ、なるほどね。よくある青春時代の壁か」

「ご主人様たちが何を話しているか分からないけど、前のご主人様はとても真剣だ。お耳もずっと今のご主人様の方に向いてる。」

「その子のトレーナーはどんなやつなの？」

「その、普段から頼り甲斐があり、わた……その者を長く支え、いつもその者を第一に考えてくれている、らしい」

「ああ、んでそれが担当としてなのかどうなのかって感じか」

「あ、ああ……」

「んー、スキンシップとかは？」

「よく首筋を撫でてくれる、そうだ。尻尾のケアも任せている、らしい。あとよく二人で出掛けたり、相手の家にお邪魔もする、みたいだ」

それ、ご主人様たちのことじゃないの？

「なら相手も少なからず担当の子を信頼してるってことだな。あとは年齢差とかが問題だろうが、ちゃんとその子が恋に恋をしてるんじゃないって、真剣にそのトレーナーとの将来を考えてることを告げればいと思うぞ。俺は当人らが幸せならそれでいいと思うしな。それこそ外野がとやかく言うことじゃねえだろ。まあエアグルーヴもそうだが、学生ってのは多感な時期で、年上に対する憧れでもあるしな」

「だ、だが、ウマ娘はこの人と決めたら決して裏切ることはない！」

「それは分かっている。寧ろウマ娘と人間のカップルで浮気するのいつ

も男側だからな。気持ちが重いとか束縛がとか理由は様々っぽいけど」

「き、貴様もそうなのか？」

「おい、俺はそんな輩じゃねえよ。俺は俺のことを想ってくれる相手にはそれ以上の想いを返すつもりで接する！ 親父とお袋がそうだからな！ というか重いくらいの方がいい！」

「な、なるほど……」

今のご主人様のお話を聞いて、前のご主人様は安心したみたい。変なの。番ならそんなこと気にしなくていいのに。

でも私もいつかご主人様たちの子どもも面倒みたいなあ。だから早く子孫作ってくれないかなあ。そのために早くご主人様たちには一緒に暮らしてほしいんだけど……。

「エアグルーヴは相変わらず優しいな。友達のためにそこまで悩むなんて。あれ？ でもその悩みと俺に甘えるっていうのはどう繋がってくるんだ？」

「た、たわけ！ きゅ、級友の悩みに私も同じように悩んで、それで気が滅入って甘えてるだけだ！」

「あ、なるほどなるほど。なら早くその子に想いを告げちまえて言っというて。悩んでトレーニングに身が入らなくなったりすると、余計に想いを告げるとか出来ないってなりそうだし」

「他人事だと思って、貴様は……」

「だって俺からしたら他人だもん。なのに俺のエアグルーヴが悩んでるなら、早くその悩みを解消させてやりたいってだけだ」

「……くう」

「????」

「つのおく……たわけがー！」

「ワツツ!」

どうして今のご主人様怒られてるんだろ？ 今のご主人様は前の

ご主人様のことを思って言ったのに。意味は分からないけど、今のご主人様が前のご主人様をどれだけ考えてるのは分かるもん。変なの。

それからはなんか前のご主人様はぎこちなかったけど、それでも

ずっと今のご主人様からご飯を食べさせてもらってた。

ご飯のあとはまた前のご主人様とたくさん掛けっ子したり、噴水で水浴びしたけど、掛けっ子は早過ぎて置いてかれちゃった。でもとっても楽しかった！ だから早く毎日こうなるように、番としてご主人様たちには一緒に暮らしてほしいな！

ギアチェンジ

9月の半ば。少しずつだが、残暑も穏やかになってくる。

今日も今日とてトレーニングに打ち込んだデネボラメンバー。今日はゴールドシチーがモデルの仕事で欠席、

また先日、セイウンスカイとマーベラスサンデーがURAFアイナルズ予選に出走したので欠席している。

今日はトレーニングの最後に学園の外をみんなでランニングしたので、その帰りにスーパーの特売があるとかでアイネスフウジンに付き合ってみんなで夕飯のお買い物中。

セイウンスカイとマーベラスサンデーが見事予選突破したのもあるので、今日はその祝勝会をすると幸福が言い出したからだ。用意が終わる頃にはゴールドシチーも仕事から戻ってくるだろう。

「豚バラブロック100グラム、8円！ タイムセール！ 売り切れ御免！」

「まっかせるのー！」

「おっしやー！ 掛かってきな！」

豚バラブロックを巡り、猛者（主婦）たちと死闘を繰り広げるアイネスフウジンとヒシアマゾン。

二人は慣れたもので難なく豚バラブロックを1キロずつ獲得してきた。

「……すげえな」

「ああ、レースの時のような気の入りようだったな」

カートのところまで待機していた幸福とエアグルーヴは、二人の脱げ出し術と垂れ馬回避に思わず拍手。そもそもウマ娘とタイマン出来る普通の人間の主婦が強過ぎる。

一方でカワカミプリンセスとナリタタイシンは、

「キャベツとお好み焼き粉手に入れてきたよ」

「タイムセールでどれも500円以下でしたわ！」

キャベツとお好み焼き粉をそれぞれダンボール1箱分確保してき

た。

ナリタタイシンもこれで実はスーパー戦線を潜り抜けてきた猛者の一人。故に難なくお好み焼き粉をゲットすることが出来た。カワカミプリンセスに至っては持ち前のパワーで難なくキャベツをもぎ取って来たという訳。

「あとは海鮮系だな。鮮魚コーナーに行こう」

「トレ公！ お菓子はいくらまでだ!？」

「あゝ……太り気味にならないくらいまでならいいぞ」

「おっしやー！ みんなアタシに付いてきな！」

ヒシアマゾンが威勢良く言えば、ナリタタイシン以外は意気揚々とそのあとに続く。

「いいのか、あの様子だとまたカートが必要になると思うが？」

「お祝い事の時くらいいいだろ。みんな普段から自制したりしてるんだしさ」

「貴様らしいな……全く」

小言をこぼすエアグルーヴだが、その声色と表情は柔らかい。何だかんだ自分たちをよく分かってくれている幸福の気持ち嬉しいのだ。

そんな話をしながら、エビやホタテ、イカやタコをカートに入れていると、戻ってきたヒシアマゾンたちがカゴいっぱいにお菓子を持ってきたことに、流星のエアグルーヴも声を出して笑った。

◇

幸福の車に食材を乗せて、部室まで運び込み、エアグルーヴたちは外出届を提出しにそれぞれの寮へ一旦戻る。

残った幸福は黙々と下準備を進め、今はキャベツの千切りをひたすら行っていた。

幸い叔父の手伝いで培った千切りスキルが今回のように役立つことは何度もある。その度に幸福はあの日々を思い出し、こうして自らの手で担当するウマ娘たちに振る舞えることを嬉しく思っていた。

「戻ったよトレ公！ それと寮にある大判のホットプレートも持って来たからな！」

そこへ戻ってきたヒシアマゾン。美浦寮の寮長は彼女なので、貸し出しも問題なし。ただ、タマモクロスがたまに借りていたりするので、その時は普通のホットプレートを使う予定だった。

「おう、サンキュ。ならホワイトボードにいつもの頼むわ」
「はいよー」

ヒシアマゾンは頼もしく返事をする、ホワイトボード用のペンを何色も取り出し、そこへ「祝勝会」と大きく書いていく。勿論セイウンスカイとマーベラスサンデーの名前も。

デネボラは部室で祝勝会をすることが多い。ヒシアマゾンが器用なのもあって飾り書きにも磨きが掛かる。

「すまない。ゴールドシチーの分の外出届も書いていて遅れた」

そこへエアグルーヴが戻ってきた。

「おう、気にすんな。エアグルーヴもキャベツの千切り地獄に参加してくれ」

「ふっ、この程度地獄とは言えん」

幸福にエアグルーヴはそう返すと、エプロンを着用し、手洗いをしてから見事な包丁さばきでみるみるうちにキャベツの千切りの山を築く。

そんな二人を見ながら、ヒシアマゾンは『やっぱりこの二人はウマが合うんだねえ』と微笑ましい気持ちになった。

◇
主役の二人とゴールドシチーが部室に来たことで、祝勝会が幕を開ける。

最初はシンプルに大きな豚玉を幸福が焼き、みんなしてその味に舌鼓を打った。

因みに皆は制服ではなくジャージ。制服にお好み焼きの匂いがついてしまうとイケないからだ。それに美味しい匂いを漂わせてしまつては、芦毛の怪物や日本総大将がその匂いで腹減りになって色々つまずい。前にイナリワンがいなり寿司の匂いがついてしまった制服を着ていたら、芦毛の怪物に制服の襟を啜えられたという逸話がある。

「私がリクエストしたことだけど、まさかこんなにたくさん作ってくれるなんてねえ♪」

「マーベラス、トレーナーのお好み焼き大好きー！　次は海鮮お好み焼きがいいー！　チーズもマシマシでー！」

お好み焼きの味に主役の二人は大満足。それだけで幸福は嬉しくなって更に手際よくお好み焼きをひっくり返す。

「頑張って仕事して、帰ってきたらトレーナーの手料理が待っていると最高過ぎるんだけど♪」

「あたしたち恵まれてるよねー♪」

「祝勝会やり過ぎな気もするけど、身内だけならこういうのも案外悪くはないかな。アタシはそんな食べないけど」

ゴールドシチー、アイネスフウジン、ナリタタイシンも幸せそうにお好み焼きを頬張ってにつこり笑顔。

「貴様、先程から焼いてばかりいるが、ちゃんと食べているのか？　貴様のことだ。どうせ私たちが美味しそうに食べているのを見ただけで腹が膨れたとか言って食べていないのだろう？」

そんな中、エアグルーヴだけはしっかりと幸福の隣に陣取る。ただ彼女の背中を押したのはヒシアマゾンとカワカミプリンセスだ。

先程から焼くばかりで幸福が食べていないことを確認し、二人でエアグルーヴに『食べさせてやれ(あげてください)』と囁いたのである。

いつもあーんはしてもらっているが、今回は自分からあーんをする絶好期。故にエアグルーヴはこのチャンス逃しはしない。

「あー、まあ、焼きながらでも食えるし……」

「口を開ける」

「は？」

「口を、開ける、と言ったのだ。貴様は焼きたいのだろうか？　ならば私が食べさせてやる」

「おう、サンキュ……あーん」

「っ」

素直に口を開ける幸福を見て、エアグルーヴは思わずキュンとする。普段は流れるように自然に食べさせることが可能だが、意識した

状態ではやはり乙女グルーヴになってしまうのだ。

「ふー、ふー……ほら」

「んっ、ふまいふまい」

「口に物を入れたまま喋るな。子どもか」

「ごくん……忍びねえな」

「反省すれば構わんさ……ほら、あーん」

「あむっ」

「ここまでの流れを見守っていたメンバーは『おやおや？』、『あらあら？』と二人の様子をにんまりと眺める。

いつもよりいい雰囲気だからだ。エアグルーヴも嬉しそうに、満面の笑みで幸福の口へお好み焼きを運んでいるし、この分なら二人が結ばれるのも近そう、と期待してしまいうほど。

しかし、

「貴様、ほら」

「あむっ……海鮮チーズマシマシ焼き上がったぞ」

「貴様、ほら」

「あむっ……肉爆弾も食べ頃——」

「貴様、ほら」

「あむっ」

エアグルーヴがずっと食べさせていて、みんなは寧ろエアグルーヴの方が食べていないのではと思いつつ、幸福も幸福で素直に口開け過ぎだろと心の中でツツコミを入れていた。

◇

祝勝会も幕を下ろし、後片付け。

幸福は結局最後まで焼き役に徹していたので、みんなから休むように言われて部室の外へ追いやられた。

9月で日の入りも早くなり、外はすっかり暗くなって星が綺麗に夜空に浮かぶ。

近くのベンチに腰掛ければ、今日は月も見えていて、府中の空で美しく輝いていた。

その一方部室内では、

『エアグルーヴ』

部屋の床掃除をしているエアグルーヴにゴールドシチーたちが詰め寄る。

「どうした?」

「どうした、じゃない!　なんでアンタも当然のように後片付けしてんだよ!」

「ヒシアマの言う通りだよ!　トレーナーのどこ行きなよ!　何のために外に追いやったと思ってるの!?!」

「そ、そう言われても……」

ヒシアマゾンとゴールドシチーに攻められ、思わずたじろぐエアグルーヴ。

「先輩、アタシ恋ってよく分かんないけど、今はトレーナーの傍にいた方がマーベラスだと思うな!」

「わたくしもそう思いますわ!　女は度胸でしてよ!」

「ここは逃しちやいけないでしょ?　大物を狙うなら今だと思うな!」

「てことで、エアグルーヴも外に行きなよ」

「後片付けはあたしたちに任せるの!」

しかも他のメンバーたちからも言われ、背中を押されて否応なしに外へ放り出された。

呆然と立ち尽くすエアグルーヴだったが、

「おう、後片付け終わったのか?」

幸福の方から声をかけられ、退路が断たれる。

「い、いや……その……」

歯切れの悪いエアグルーヴの様子に幸福は小首を傾げながらも、「座ったらどうだ?」と手招きして、ベンチに誘った。

そんなエアグルーヴに業を煮やし、ヒシアマゾンが「焦れたいねえ!　ちよつとアタシがいやらしい雰囲気にしてくるよ!」と追い込もうとしたので、流石にゴールドシチーが止めた。

好きな相手から手招きされれば、エアグルーヴに断れるはずもなく、するすると彼の隣に腰を下ろす。

ちらりと視線を横にやれば、好きな相手は真っ直ぐに星を眺めており、エアグルーヴはその横顔に釘付けになった。

「ソースでも顔に付いてるか?」

「いや」

「なら何をそんなに見てるんだ?」

「……………」

「……………ああもう、いいや」

「ど、どうした、貴さ——」

「エアグルーヴ、好きだ。俺と付き合ってくれ」

「——ふえ?」

己と向き合い、真剣な眼差しで、両肩を優しく掴まれて言われた彼からの愛の言葉。

エアグルーヴは一瞬何を言われたのか理解出来なかったが、

「年齢とか、担当とか、学生と社会人とか、んなの関係ない。惚れてんだ、俺は。初めて出会ったあの日から。だから付き合ってください。俺の最愛の愛バになってください」

片膝を地面に突き、エアグルーヴの左手を取って、見上げながら再び愛の言葉を口にする幸福。

それでやつとエアグルーヴは告白されたのだと気付き、目からは大粒の涙が溢れてくる。

当然、部室の窓から二人の様子を見ていたデネボラメンバーからは『おー!』と歓喜の声が上がっていた。

「……………たわけ……………グスツ」

「好きだ」

「……………たわけ……………えぐつ、ううつ」

「返事は聞くまでもないな? 自惚れていいよな?」

「ひつぐ……………えうつ……………ふええんつ」

嗚咽しながらも、必死に何度も何度も頷き返すエアグルーヴ。

それを見て幸福はゆっくりと立ち上がり、今度は正面から彼女の背中を回し、落ち着かせるようにトントントンと背中を叩いてやった。

「……これでも結構我慢してたんだ。エアグルーヴが卒業してからとか、エアグルーヴが大人になったらとか、色々……。なのに会う度に可愛くなるし、甘え上手になるし、辛抱出来なかった」

「独白するように静かに語る幸福の声に、エアグルーヴは耳をピコピコさせながら傾ける。」

「鈍感なフリするのは辛かった。でもエアグルーヴが恋に恋してるなら、いつかそれに気が付く日が来て、虚しくなると思った。だから自己保身のために予防線張ってた」

「でもダメだった。だってエアグルーヴが俺にしか見せない顔をたくさん見せてくるんだからなあ。んなの期待するなつてのが無理な話だ」

「二生、エアグルーヴの杖になることを誓う。それだけ俺はエアグルーヴと一緒にいたい。一緒に人生を走りたい」

幸福がそこまで言うのと、エアグルーヴはやっと顔を上げる。

「……私も貴様のことが……幸福さんのことが大好きだ。これからもよろしくお願いします……んっ！」

先に想いを告げられた。ならば、とエアグルーヴはその唇を先に奪って見せた。

後ろからの視線や声なんてどうでもいい。今は私と彼だけの世界なのだから、と。

「はあ……なんだよ、自分からしておいて、そんな蕩けた顔をして」

「う、うりゆしゃい、ちゃわけえ……」

若干呂律が回っていないが、幸せなのは伝わってくる。何せエアグルーヴの瞳の奥にはハートマークがしっかりと浮かんでいるのだから。

女帝の運勢

チームデネボラは秋のレース戦線に乗り出し、絶好調。

「秋華賞を見事に制したのはカワカミプリンセス！ 負けない乙女が無敗でダブルティアラの称号を獲得しました！」

カワカミプリンセスが秋華賞を制し——

「ゴールドシチー！ まさに圧巻の走り！ 京都大賞典を制した勢いのまま、天皇賞秋を制しました！」

ゴールドシチーが不調から脱し——

「逃げた逃げた！ 逃げ切った！ アイネスフウジン！ 富士ステークスを風神の如く走り抜きました！ マイルチャンピオンシップにも期待がかかります！」

アイネスフウジンが余裕の逃げを見せ——

「驚異の追い込み！ 驚異の末脚！ 女傑の二つ名は伊達じゃない！ ヒシアマゾンが二度目のエリザベス女王杯を手にしました！」

ヒシアマゾンが余裕の貫禄で差し切り——

「鬼脚炸裂！ やはりこのウマ娘には目が離せない！ アルゼンチン共和国杯を圧巻のごぼう抜きで制して見せました！」

ナリタタイシンが驚異の鬼脚を見せつけ——

「赤いリボンが中山レース場に跳ねています！ 中距離URAファイナルズ準決勝を制したのはマーベラスサンデー！」

マーベラスサンデーは競り勝って決勝戦へ駒を進め——

「余裕の大差でトリックスターがまたも逃げました！ 異端の逃亡者を捕えるウマ娘はいないのか!？」

セイウンスカイも他を圧倒して決勝戦への切符を手にした。

各メデイアはチームデネボラを連日大きく取り扱う。

もうその人気はリギルやスピカと同等だと言われ、本格的に三強の一角としてメデイアからもファンたちからも認められた。

好調の理由はチームリーダーであるエアグリーブがチームトレー

ナー幸福と恋人になれたということから、メンバーのこれまでのやきもきが晴れてチームの雰囲気がこれまで以上に盛り上がったからだ。

二人の交際は公にはしていないが、ちゃんと理事長と生徒会には報告済で、どちらからも祝福され、交際を認められている。

加えて周りの生徒たちも、幸福から漂うエアグルーヴの匂いが強くなったことで勘のいい子ほど察してしまい、二人の仲がこれまで以上に進んだとバレバレだった。

一方でエアグルーヴはこれまでの憂いが晴れたことで、絶好調をキープし、トレーニングにも模擬レースにもその調子の良さが表れており、ジャパンカップの出走表明記者会見の時点で一番人気に推された。

まさに最高の雰囲気なのだが――

「……………そんな」

――エアグルーヴはまるで絶望の底へ蹴落されたようなショックを受け、顔が青冷め、信じられない物を目の当たりにし、思わず口を両手で覆い、カタカタと小刻みに肩を震わせる。

「……………シラオキ様の言うことは絶対です。残念ですが…………」

神妙な面持ちでエアグルーヴにそう告げるのは、机を挟んで向かい合って座るマチカネフクキタルだ。

今は座学も終わって放課後。いつもならばトレーニングや生徒会の仕事が残っているが、エアグルーヴはジャパンカップが近いのもあってそれらはお休み。

幸福は当然ながら他のメンバーのトレーニングを見ている。

故にエアグルーヴは今日は気ままな放課後を過ごす予定だった。

そこに友達であり、ライバルのサイレンススズカが声をかけてきた。聞けば彼女もオフで、暇を持て余していたという。

なので二人で少しカフェテリアでお茶でもしようとしたら、マチカネフクキタルに呼び止められて今に至る。

「エアグルーヴ、そんなに気にしない方がいいわ。フクキタルの占いってほぼ信用ならないから」

「酷いですよ、スズカさん！」

「だって本当のことだし……」

マチカネフクキタルの占い被害者であるサイレンススズカ。前にトレーナーとデートする時に占ってもらい、ラッキーアイテムである銀色の大きな鯛のお守りを押し付けてきたのだ。

それを持って行かないと成功しないと言われ、その時のサイレンススズカも気持ちいが掛かり気味だったのもあって、デートにそのお守りを背負って行った。

そうしたら当然、安藤トレーナーに「すっげえね、これ」と笑われた。引かれなかったただけ良かったが、あんな恥ずかしい思いをしたので、サイレンススズカは未だにそれを根に持っている。

そもそも前に金色の鯛のお守りも押し付けられ、その時も安藤トレーナーに笑われたのだから。

ただ、サイレンススズカは知らない。安藤トレーナーが彼女のことを『面白い子』として自身の一番のお気に入りウマ娘だということ。それで、今回もまた何かの鯛のお守りを押し付けるの？ 私の時みたいに？」

あのお守りの鯛の如く、ハイライトが消えたサイレンススズカがマチカネフクキタルに詰める。

「い、いえ！ そんなことはしません！ というか、私は善意で渡したんですよ！ 実際にお守りの効果はあつたはずですよ！ 証拠にスズカさんのトレーナーさんは鯛のお守りのことでスズカさんを弄っているではありませんか！ それが嬉しいって尻尾と耳に出てますからね!？」

鋭いツツコミに流石のサイレンススズカもたじろいだ。

しかし今はそんなことよりエアグルーヴのことだと彼女は誤魔化し、マチカネフクキタルに本題に入らせる。

「ええとですね……恋愛面で不穏な兆しが出ているのです」「具体的には？」

「えっと……エアグルーヴさんのトレーナーさんにストレスが溜まっているとありますね。何か心当たりありませんか？」

マチカネフクキタルがそうエアグルーヴに尋ね、サイレンススズカ

も「何かある？」と尋ねた。

するとエアグルーヴは、

「これと言って思い浮かぶ事柄がない……」

更に肩を落とす。

当然だ。エアグルーヴは無自覚無意識なのだから。

それを知らない二人はうーんと悩み、一先ずエアグルーヴから最近の幸福とのやり取りを聞くことにした。

「最近、エアグルーヴはトレーナーさんとどんな風に過ごしているの？ その、お付き合いしているのは知ってるから、話せる範囲でいいわ」「いや何をそんなに躊躇っているのか分かんが、何も隠すことはないぞ。そうだな……幸福さ……こほんっ、あやつと付き合いって一ヶ月は経ったが、私たちは至って健全な付き合いをしている。どこぞの逃亡者のようにトレーナーと二人きりでトレーナーを逃げられない状況に追いやってホテルに泊まって朝帰りするなんて暴挙は起こしてないしな」

「あ、あれは違うの！ トレーナーさんが私の野外トレーニングに付き合ってくれて、それが嬉しくていつもより遠くまで走っちゃって、そうしたらが夕立に降られて、急いで近くの建物に雨宿りしに避難したの！ そしたらそこがその……ら、ラブのホテルで、仕方なく適当なお部屋に入って、トレーナーさんが風邪引くといけないからシャワー浴びてこいって言うから浴びて、出てきたらトレーナーさんが気持ち良さそうに眠ってて、その寝顔が素敵だったから、近くで見てたらしいの間にか私も寝ちゃってただけで、トレーナーさんとは本当に何もなかったの！ フロントからの電話もトレーナーさんが眠って気が付かなかったし、疲れてるなら起こすのが可哀想で、一泊しちやっただけだったの！」

首まで真っ赤になり早口で当時の朝帰り騒動の弁解をするサイレンススズカに、エアグルーヴもマチカネフクキタルも思わず『おお』と謎の感動を覚える。

エアグルーヴもまさかサイレンススズカがここまで掛かるとは思わず、何だか申し訳ないことをした気持ちになり、一方でマチカネフ

クキタルは彼女と安藤トレーナーの進展具合が実に気になった。

「こほん……そんなことよりエアグルーヴの話よ！ 一ヶ月の間にエアグルーヴのトレーナーさんがストレスを溜め込んでるんだから、それが何なのかハッキリさせないと！」

「む……それは確かにそうだな」

「私が言うのも何ですが、トレーナーをしている時点でストレスは多々あるでしょうからね。チームデネボラの皆さんはこのところ絶好調ですし」

マチカネフクキタルが言うように、チームデネボラは絶好調。しかしそのお陰で取材も増え、マスコミ対応も出来るだけウマ娘たちに負担が掛からないように、ほぼほぼ幸福が行っている。加えていつものトレーニングメニュー考案や模索、対戦相手のデータ収集等々の仕事があるのだから、仕事に忙殺させる日々だ。

「最近是我的トレーニングに付きつきりになってくれていたしな。水泳でスタミナと根性を強化し、実にいいトレーニングが出来た」

「なるほど……でも水泳のトレーニングを見ててどうしてストレスが？」

「トレーナーさんも一緒に泳いでたり？」

「そんなことあるかたわけ。私はオグリキャップではない。水泳は普通に泳げる」

では何故なのか。エアグルーヴを始め、三人はうーんと悩む。

するとマチカネフクキタルが閃いた。

「エアグルーヴさん、トレーニング終わりにストレッチしてます？」

「当然だ。あやつが直々に親切丁寧に施してくれる。それがまた心地良くてな……トレーニング後の疲労感もあって何度か眠ってしまっただけもある」

エアグルーヴの答えに、マチカネフクキタルはピンと来る。つまりはそういうことだ。

「分かりました」

「何がだ？」

「エアグルーヴさんのトレーナーさんのストレスの原因です」

「聞かせてくれ」

「ズバリ！ エアグルーヴさんが原因です！」

「な、何だってー!？」

「スズカ、それは私のセリフではないか？　というか、スズカ……貴様は普段そういう乗りはしないだろう」

「あ、ごめんね。つい……」

変に乗りのいいサイレンススズカにエアグルーヴは苦笑いするが、マチカネフクキタルの言葉が引つ掛かる。何せどこをどうしたら自分が原因なのか分からないからだ。

「ストレッチされてる時の状況を教えてください」

「分かった。いつもは——」



「それじゃあ、今日のトレーニングメニューも終わったし、そのマットの上でうつつ伏せになってくれ」

「ああ。今日もよろしく頼む」

「おう。痛かったら言ってくれ」

すると幸福はエアグルーヴの体が冷え過ぎないように背中にバスタオルを掛けて、首・肩・両脚と入念にストレッチしていく。

「痛くないか？」

「ん……ああ、心地良いくらいだ……あつ」

「相変わらず首が弱いなあ」

「う、嫌い……気持ちいいんだ……んひっ」

「ほら、こうやって首筋コリコリされるの好きだろ？」

「んにゃあ……調子に、ああつ、乗る、にゃあ……んうっ」

「気持ち良くて唇震えてるじゃん」

「む、無意識に、あんっ、こうなる、んんっ、だっ！」

幸福の男らしい太い指で首筋を隅々までストレッチされると、エアグルーヴは自然と熱い吐息が漏れてしまう。

ウマ娘は基本的に首を触られるのが好きなので、当然恋人である男性にされるとその感度は増すのだ。

故にエアグルーヴはウマ娘特有の気持ちいい時に出る、お口モゴモ

ゴが止まらない。

「そうしてつと女帝らしさがなくなつて、ただの可愛い女の子だな」

「た、たわけ……はあはあ、ふう」

散々ストレッツチされ、エアグルーヴの息は絶え絶え。なのに体は軽いという不思議。エアグルーヴにとつてはストレッツチとはいえ、好いた相手に触れてもらえていることの方が何よりも嬉しいのだ。

◇

「こんな感じだな。全く、あやつにも困つたものだ。二人もそうは思わんか？」

話し終えたエアグルーヴが二人に同意を求めるが、二人は信じられないものを見るように唾然としている。

何しろ二人からすれば、あのエアグルーヴが普段からそんなに自分のトレーナーに甘えているなんて思つてもいなかつたらだ。

しかも最初はうつ伏せだったが、仰向けでもしてもらっている。うつ伏せだけでも男性のトレーナーにとつて色々と来るものがあるだろうに、仰向けなら尚更だ。エアグルーヴのエアグルーヴボールはたわわ過ぎるし、ストレッツチ中は色っぽい声をあげているのだから。

寧ろ、こういうことを平然と話せてしまうエアグルーヴも凄いが、彼女はこの一連の話に疚しさを感じていないので話せている。

「……エアグルーヴのトレーナーさんつて大変ね」

「ですね。しかしそれはトレーナーさんが選んだ道ですから、私たちでは救えません」

「? どういう意味だ？」

「エアグルーヴ、きつとあなたのトレーナーさんは疲れてるつてことだから」

真実を告げるのは簡単だが、それではこの二人の甘いひと時に水を差すことになる。なのでサイレンススズカは誤魔化すことにした。

「そ、そうか。確かにあやつは私に劣らぬ忙しさだな」

「だから恋人として、何かしてあげたらいいと思うの。お料理とかお洗濯とか……ほら、エアグルーヴはそういうこと好きだし」

「ほう……その手があつたな」

サイレンススズカの提案にエアグルーヴは目がギラリと光る。

前々から何かもつと一緒に過ごせないか探していたエアグルーヴは、まさに天啓を得た気持ちになった。

そうと決まればやることは一つ。まずは幸福に連絡して、一緒に帰ることを告げる。そしてフジキセキに外出届を提出しに寮へ走った。

「……私、エアグルーヴのトレーナーさんにとって余計なことしたかも」

「気にしてはいけません。我々は何も見なかったし、何もしなかった。そうしましょう。シラオキ様もそう仰ってます」

「シラオキ様どれだけ万能なの……」

こうして残された二人は『もう知ーらね』と開き直り、寄り道してたい焼きを食べながら寮へ帰った。

トレーナーのコンデションが下がった。

エアグルーヴは絶好調をキープしている。

揺らぐ女帝

ジャパンカップが明後日に迫った今日。

エアグルーヴは相変わらず軽い調整メニューだが、調子はすこぶるいい。

今朝もいきなり押し掛けてきた記者団に対して、女帝らしい余裕の受け答えをしていた。

そんな彼女は今日も座学が終われば生徒会の仕事に精を出す。

来月は早いもので師走に入り、トレセン学園も色々と忙しくなる。受験を受けにくるウマ娘たちに対する案内図の作成やクラス分けをするための模擬レースの手配等々、生徒会が決めなくてはいけないことは盛り沢山だ。

しかし最近はエアグルーヴのやる気とサボり魔ブライアンが彼女の恋バナ聞きたさにサボり魔の汚名を返上したため、去年より遥かにスムーズに事が進んでいる。

故に、

「この時期にこうしてゆったりとお茶が飲めるとは……去年からは想像も出来ない」

「去年は私も自分のことで会長には多大なる負担を強いてしまいました。しかし今年は違いますから、私のやる気も去年とは比べ物になりませんし」

今は仕事を終えて、生徒会室でティータイムと洒落込んでいた。何しろこのところ先の先までの仕事まで終わってしまい、差し迫る仕事がないのだ。

いつも忙しくしているシンボリルドルフも、エアグルーヴやナリタブライアンが仕事をいつも以上に肩代わりしてくれるお陰で、とても助かっている。

「ところで、ブライアンは最近、ティータイムになると決まってその雑誌を読んでいるが……そんなに面白いものなのか？」

近頃のナリタブライアンは仕事が終わると毎回同じ出版社の雑誌

を開く。相変わらず空いている手には彼女お気に入り Beef ジャーキーがあり、それをもぐむしやしながら行儀悪く雑誌のページを捲っていた。

少し前ならエアグルーヴの厳しい叱責が飛んでいただろうが、最近の彼女は自他共に余裕を持っているので、ナリタブライアンの行儀の悪さも少しは目を瞑る。

エアグルーヴがそうだったことで、ナリタブライアンも生徒会室で過ごすのに煩わしさがなくなっていた。

「ん、ああ、これか？ 別に私としてはこれと言って面白いから読んでるんじゃない。ただ、同志たちが読んでいて、少女漫画でもこの手の雑誌に載っているような性格のキャラがいるから私も目を通していいだけだ」

シンボルドルフの質問にナリタブライアンがそう返しながら、雑誌を閉じる。

「……男性に嫌われる女性の特徴？ 女性誌か」

ふと表紙の文字が目に入り、読み上げたシンボルドルフ。

「なんだ、会長もこういうことは気になるか？」

「まあ、気にならないと言えば嘘になるな。自分で言うのも悲しいが、私はその……あまり気軽に接してくれる友が少ないからな。そういうところでも何か自分の改善点を得られるかもしれないと思うんだ」

それは時折あなたが反応し難い駄洒落を言うから……とエアグルーヴとナリタブライアンは思ったが言わない。あの遠慮を知らないナリタブライアンでさえ、これを言えばシンボルドルフがしよげてるルドルフになってしまうと理解しているのだ。

「……なら読むか？ 私はもう全て目を通し終えたからな」

ナリタブライアンが勧めると、シンボルドルフは「ではお言葉に甘えて」と雑誌を手を取った。

「なになに……『男性が嫌いな女性の性格の代表的な3つの性格』……1つ目は『特定の男性にだけ優しいぶりっ子』で、2つ目は『自己中心的な女性』……そして3つ目が『拒否しても引かないしつこい女性』か……うむ、これは同性の私からしても苦手と感じるな」

「同性だからこそ、余計にそう感じるのだと思います。私ならそんな輩を見れば叱りつけていると思いますし」

「いや、エアグルーヴは自他共に厳し過ぎるんだ。今はちよつとマシになったがな」

ナリタブライアンのぼやきにエアグルーヴは鋭い睨みを返すが、そんなのナリタブライアンにとっては慣れたもの。故に余裕綽々で次はチーズかまぼこをモヒる。完全に好みが酒のつまみだが、誰も気にしない。

「ここからが本題だな。どれどれ……『男性に嫌われる女性の特徴13』か。なかなか結構な数があるな」

「あくまでも娯楽の提供ですから。気にははいけませんよ」

エアグルーヴがそう言えば、シンボリルドルフも確かにそうだと頷いて特集を読み進める。

「その1、常に何をしているのか尋ねてくる——」

そのワードにエアグルーヴの耳が僅かに動いた。勿論それをナリタブライアンは見逃さない。

「その2、誰に対しても上から目線で話す——」

ピクリとまたエアグルーヴの耳が震える。

「その3、損得勘定でしか動こうとしない——」

今度は安堵したのか耳がやや外側に向いた。

「その4、常に他人の悪口を言う——」

今度も耳は反応せず、外側を向いたままのエアグルーヴ。

「その5、何をすることも否定する——」

微妙だが少し上向きになった。ナリタブライアンはその耳の動きに笑いを堪えるのに必死である。

「その6、嫌いな相手に対する態度が見るからに悪い——」

耳が外側に向いたので、これは安心した様子。

「その7、不機嫌な時に手がつけれなくなる——」

ピクピクツとこれまでで一番の反応を見せたエアグルーヴ。その表情も真つ青である。

「その8、相手の気持ちを考えずに行動する——」

ちよつと冷静さを取り戻せた様子。しかしまだ安心出来ないのか、耳はシンボリドルフの方に向けられている。

「その9、些細な感謝が伝えられない——」

顔色が少し戻ってきた。もうそれを見ているだけで、ナリタブライアンは笑いが込み上げてくる。

「その10、品がない——」

これは大丈夫だ、とばかりにエアグルーヴの耳が外側に向いた。

「その11、人の秘密でも構わず他人に話してしまう——」

これも大丈夫だ、とばかりにエアグルーヴの表情は晴れやかなる。

「その12、金遣いが荒い——」

余裕の表情でエアグルーヴは紅茶を啜った。

「その13、色んな男と常に遊んでいる……以上の項目の内、1つでも当てはまっていたら、自分を見つめ直してみよう。恋人がいる場合は失恋の原因になるかもしれません……か。ふむふむ、なかなか勉強になるな。娯楽とはいえ、この手の雑誌も興味深いものだ」

シンボリドルフは読み終えた満足感に微笑むも、

「あ……あ……あ……」

エアグルーヴはカップをソーサーに置いて、カタカタと小刻みに震え出す。まるで壊れたレディオのように。

「なんだ、エアグルーヴ。何故急にウマトムスメの神隠しに出てくるウマナシのモノマネをし出したんだ？」

ナリタブライアンは珍しくエアグルーヴがモノマネをしていると勘違いしているが、シンボリドルフが「違うぞ、ブライアン」とツツコミを入れる。

「エアグルーヴは紛れもなく恋人がいる女性だ。だからこそ、失恋する可能性があることに危機感があるのだろう」

私も少し思うところはあから気持ち分かる……と付け加えれば、ナリタブライアンも「なるほど」と頷き、再び雑誌の特集に目を通した。

「この1、2、5、7の項目でお前の耳が反応していた。心当たりがあ

るのだろうか?」

何故かドヤ顔で言うナリタブライアンにエアグルーヴは壊れたからくり人形のように、ぎこちなく頷きを返す。

「1つでも当てはまっていたら、と書いてあるのに……わ、私には4つも……4つも当てはまっていた!」

「ブライアン、エアグルーヴに温かい物を! 人参ポタージユを早く!」

両手で震える自身の体を抱きしめるエアグルーヴを見て、シンボリルドルフが即座に彼女を抱きしめてナリタブライアンに指示を飛ばす。

ナリタブライアンは『何これ面白い』と心の中で爆笑しながら、シンボリルドルフのお財布を預かってすぐ近くの自販機へと走った。

◇

「買ってきたぞ」

「ほら、エアグルーヴ……飲むといい。大丈夫だ、私の奢りだ」

「す、すみません……はあ」

温かい人参ポタージユを飲んで冷静さを取り戻せたエアグルーヴ。

それを見て、ナリタブライアンはくつくつと笑いながら、

「そんなに不安になるほど身に覚えがあるのか?」

と尋ねる。

するとエアグルーヴは「ああ……」と弱々しく返した。

特徴その1は付き合ってから、理由もなく『今何をしているんだ?』

とメッセージを飛ばしてしまう。それで暇しているのであれば、電話を掛けて他愛もない話をする。それが幸せなのだ。

昨夜も確認のメッセージを送ると、すぐに資料整理してるところと返ってきた。そして邪魔しては悪いからと、『そうか。無理しないようにな』というメッセージと共に自撮り写真を控えめにピースサインをして撮って送った。すると幸福からも『ありがとう』のメッセージと共にエアグルーヴのぱかプチを抱っこした彼の写真が送られてきて、埃が立つほどに尻尾を振った。

なのにそれが破局の原因になると知り、エアグルーヴは前が真っ暗

になる。

特徴その2に関しては、出会った頃から現在に至るまで続いているため改善不可。仮に直したとしても、幸福に不審がられるからだ。

ただ二人きりの際には素直に甘えているので、ちよつと不安なだけ。

特徴その5は今は大丈夫だが、出会った頃は彼の意見に毎回拒否反応を示していたのもあり、不安なのだから。

特徴その7に至っては、自分でもどうしようもなく、不機嫌になると当たってしまう。大概は掃除することで何とかなるが、幸福の家に押し掛けてまで掃除をさせてもらったのも一度や二度ではない。そもそも彼は掃除もキッチンとしているので、普段は出来ないトイレや寝室といったプライベートなどを掃除させてもらっているのだ。

「……………嫌だ。別れたくない……………こんなに幸福さんのことが好きなのに……………こんなに毎日愛が溢れているのに……………振られたくない」
顔を真っ青にして震えるエアグルーヴをシンボリドルフは必死に宥めるが効果は薄い。

それを見てナリタバライアンがいつの間にかエアグルーヴのウマホを彼女の学生鞆から取り出して、幸福へ電話を掛けていた。

「もしもし、お前は伊藤トレーナーだな？ 少し時間をくれ。私はコードネームシャドーと言うものだ。お前の大切な恋人が不安に陥っている……………何か言葉を掛けてやれ」

一方的な要求を強引に通し、無責任にウマホを持ち主であるエアグルーヴに手渡すナリタバライアン。

「こ、幸福さん……………」

『おう、どうした、エアグルーヴ？』

「わ、わた、私は、あなたと別れたくないっ」

『は？ 別れる気なんて俺にはないぞ？』

「し、しかし！ 私は……………！」

『どうしてそんな不安になってるのか知らねえが……………告白の時も言ったが、俺はエアグルーヴに惚れてる。だから心配するな。不安なら俺のところにもいつでも来い。それか俺を呼べよ。折角会える距離にい

るのに、彼女が不安ならそれを消してやんのが彼氏だろ。大丈夫。愛してるよ、エアグルーヴ』

「ああ……ああっ、私も幸福さんを愛してる!」

電話の向こうで生徒たちの黄色い声が聞こえてくるが、幸福は構わず「んじや、あとでトレーナー室に來いよ」と爽やかに誘い、エアグルーヴはそれに何度も頷き、電話の向こうから小さなリップ音がして電話は切れた。

エアグルーヴの不安は見事に解消され、今は幸せいっぱい、火照った頬を両手で押さえて、いやんいやんと頭を振る。

シンボリルドルフはもう大丈夫だ、と安心して席に戻るが、

「最高かよ……」

ナリタブライアンは目の前で練り広げられた甘いラブストーリーに、ウイニングチケット宜しく感涙していた。

当然エアグルーヴからは「煩い」と一蹴される。

「しかしいいものをまた見せて……いや、聞かせてもらった。それでトレーナー室でどんなイチャイチャをするんだ?」

「貴様に話す義理はない、たわけ!」

「そうか。ならば私の勝手にする。……そうだな、きつとあのトレーナーのことだ。エアグルーヴの不安が消えるまでキスしてくれるんじゃないか? それも膝上でお姫様抱っこした状態で、愛を囁きながら、な」

「……最高かよ……」

ナリタブライアンの妄想を思い浮かべ、思わずそう零してしまうエアグルーヴ。

これには流石のシンボリルドルフも「落ち着け、エアグルーヴ」とツツコミを入れてしまった。

深刻な問題が解決し、穏やかなティータイムが戻り、その後エアグルーヴはご機嫌に生徒会室をあとにする。

シンボリルドルフとナリタブライアンはそんな彼女の背中を微笑ましく見送るのだった。

女帝の気苦勞と戯れ

ジャパンカップ。

東京レース場で開催する日本の国際G1である。

近年では日本のウマ娘たちが勝利を挙げることが多いが、今年もアメリカ、フランス、アイルランド、イギリス、ドイツと様々な国から名馬が集まった。

その中で最も注目を集めたのはエアグルーヴ。

マイル距離を主戦場としてきた女帝がジャパンカップの舞台に降り立ったことに、ファンはそれだけで大興奮だ。

各国のウマ娘たちも、勿論日本のウマ娘たちも、女帝エアグルーヴを徹底的にマークする。

しかし――

「圧倒的な実力差でレースを制したのは我らが日本の女帝！ エアグルーヴ！ 他の追隨を全く許さなかった！ 正真正銘の絶対的女帝が今まさに君臨しました！」

――結果はエアグルーヴが2着のヒシアマゾンに5バ身引き離しての優勝を飾った。

ヒシアマゾンも最後尾から驚異的な追い込みでエアグルーヴに迫ったものの、女帝の末脚の持続力には敵わなかったのである。

「やった………ついにやったぞ！」

女帝が手を大きく空高く挙げると、今日一番の大歓声がレース場を揺らした。

「かあああつ、届かなかつたあああつ！」

それに対抗するようにヒシアマゾンが大声で悔しさを爆発させる。

当然それはエアグルーヴに「騒ぐな」と一蹴されるが、すぐに二人は互いの健闘を讃えて握手し、それを見た他のウマ娘たちもそれぞれ握手を交わすのだった。

そんな熱狂に包まれたジャパンカップの翌日。

各メディアやマスコミは女帝エアグルーヴの話題一色に染まっている。

しかしその内容はレースの結果や内容のことではない。

「……何故、私と幸福さんが熱愛だと報じられているんだ……？」

内容は女帝エアグルーヴとそのトレーナー伊藤幸福の熱愛報道ばかり。

教室で級友たちから主にウマ娘のことを取り扱うレース新聞を突き付けられ、エアグルーヴは女帝として、生徒会副会長として、まずいことになったと内心焦る。(今更感が強い)

何しろ悲願のジャパンカップ制覇ということで、エアグルーヴは嬉しさのあまり幸福の胸に飛び込んでしまったのだ。

見つめ合う様子はまさに相思相愛のカップルそのもので、各報道機関はビッグカップル誕生に歓喜し、ファンもこの報道に各SNSで昨日からお祭り騒ぎである。当然昨晩は母親から『一度掴んだら手離すな』と言われ、色々と焦ったエアグルーヴ。

学園内外で常に生徒たちの手本となるべき自分が、浮ついた報道をされた。

故にエアグルーヴはこれでは皆に示しがつかないと、内心後悔するのだが、

「やつと付き合ったんだね！」

「おめでとう、エアグルーヴ！」

「焦れなかったけど、ようやくね！」

「結婚式は呼んでよね！」

やつと付き合ったのかとお祝いされ、

「いやいや、私は前から気付いてたよ？」

「あたしもあたしも！」

「報道陣情報遅いよねー」

「もう前からラブラブしてるのにねー」

既に二人の関係を知る子たちは呆れていた。

なのでエアグルーヴはどう反応したらいいのか分からず、らしくもなくオロオロしてしまう。

級友たちからの反応と自分が思い描いていた反応とのギャップがあり過ぎたから。しかも廊下にも他のクラスの同級生たちがその様子を見に来ていて、流石のエアグルーヴもお手上げ状態。

「もう予鈴はなってますよー!」

そこへクラス担任がやってきたことでその場は取り敢えず収まるのだった。

◇

「はあ……」

「お疲れのようだな、エアグルーヴ」

「はいその、まあ……はい」

座学も終わり、今は生徒会の仕事をこなすエアグルーヴ。

しかし彼女の表情からは疲労の色が滲み出ていた。

何しろ休み時間やお昼休みと、事あるごとに幸福とのもことで質問攻めに合っていたのだ。

馴れ初めは、相手を意識したのはいつか、どちらが先に惚れたのか、一目惚れか、その他云々……フジキセキやヒシアマゾン、ファインモーシヨンといった友達らがその都度フォローしてくれてはいたが、それでもこの有様。

しかしそれも仕方のないことだろう。トレセン学園に通っている生徒たちは、常に厳しいレースの世界に身を置いており、仲間意識が強い。

そこに目標的、模範的ウマ娘が自分の担当トレーナーと恋仲になるという恋愛ドラマがあれば、多感で色恋沙汰に飢えている女子生徒であれば誰もが食いつくネタである。

恋愛ドラマや恋愛漫画、恋愛映画、恋愛小説……恋愛をテーマにする作品はいくつもあるが、現実には自分の身近な存在が恋愛してれば、嫌でも意識してしまうのが年頃というやつなのだ。

なので当然、シンボリルドルフもエアグルーヴの恋路には興味を引かれている。

彼女も彼女で現在進行形で自身の担当トレーナー、岡部に片想いなのだから。

「私も二人の恋愛関連の話にはとても興味が湧いている。何だかんだ今日も君はトレーナー君とお昼を共にしていたしね」

「周りの反応に気疲れしたからとはいえ、彼と過ごさない理由はありませんから……」

一秒でも長く一緒にいたいですし……と若干頬を赤らめてぽつりと零すエアグルーヴは、シンボリルドルフも思わず『可愛い』と感じてしまい、これなら他のみんなも放っておけないはずだと内心笑ってしまう。

「仲が良くて何より。そしてジャパンカップも大勝。まさに順風満帆だな」

「ええ、否定はしません」

「しかし、エアグルーヴのトレーナー君の方はどうか？ 彼も彼で

君と同じく、今日は色々大変だったんじゃないか？」

「いえ、それがそうでもないようで……彼は何を訊かれても平然と毅然に答えてました」

それがまた格好良くて、惚れ直してしまいました……と恍惚な表情を浮かべるエアグルーヴ。

シンボリルドルフはそんな彼女を見て、思わず口の中が甘くジャリジャリするような感覚を覚えた。

「エアグルーヴのお陰で先生もペンが乗っている。次から次へと新作ラッシュで私は嬉しい。是非とも今後も先生の生けるネタ帳として君臨してくれ」

そこへ書類整理を終えたナリタブライアンがホクホク顔で言うと、エアグルーヴが眼光鋭くナリタブライアンを睨んだ。

自分は貴様の娯楽になるつもりは毛頭ない、と言わんばかりに。

しかしそんなのナリタブライアンには何のそののである。

現にエアグルーヴにそれだけ睨まれていながら、何食わぬ顔でお気に入りのビーフジャーキーをモヒっているのだから。

「順風満帆、と言うことならこれ以上のことはない。これからも仲睦まじくあってくれ」

「ええ、言われずともそのつもりです」

あんないい人は他にいませんので……とエアグルーヴが付け加えれば、シンボリドルフも「そうか」と満足そうに頷く。

「で、今日はどんな甘々エピソードを聞かせてくれるんだ？ 今日の仕事ももう終わったところだしな」

そこへナリタブライアンが相変わらず空気を読まずに容赦なく突撃。

最近では生徒会の仕事が終われば、エアグルーヴの恋愛相談という体で彼女からの甘酸っぱい恋愛エピソードを聞くのが仕事終わりのティータイムの肴になってしまっている。

エアグルーヴはイマイチ釈然としないが、ナリタブライアンがサボらずに生徒会の仕事をするのは大変結構なものと、友として信頼している二人に話をするので何かしらアドバイスをもらえるので、つい話してしまうのだ。

「まあ待てブライアン。その前にお茶を淹れよう」

「それもそうだな。エアグルーヴ、頼む」

「どうして貴様が得意気なのだ……少し待っている」

◇

エアグルーヴが手際良くお茶淹れ、ティータイムが始まる。

今日は幸福特製バラのジャムを使用するロシアンティー。

因みにロシアンティーは濃いめの紅茶にジャムを入れるのではなく、紅茶を飲みつつジャムを舐めるというもの。

ウクライナやポーランドでは紅茶に直接ジャムを入れるのがピュラーな飲み方なのか。

「うむ、濃いめの紅茶にジャムの甘さ……そして二つの香りがとても良い」

「私はジャムの甘さがビーフジャーキーの塩気と合うから好きだ」

二人の反応にエアグルーヴは思わず表情が綻ぶ。幸福のジャムが褒められていると、まるで自分のことのように嬉しいから。

すると唐突にシンボリドルフとナリタブライアンが小さく声を出して笑う。エアグルーヴがどうしてか分からずに小首を傾げると、「いや、恋する乙女は愛らしいと思ってね」

「恋人が褒められて喜ぶ顔は、実に甘い。話を聞かずともこちらまま
で笑顔になつてしまった」

二人からそう言われ、彼女は首まで真っ赤にして俯いた。

しかしそんなことをしても、二人はエアグルーヴのことをただただ
可愛いと思うばかりで、ジャムの甘さより彼女の甘さの方が存分に上
回るのだった。

◇

「ということが、今日の生徒会であつた……」

「ふーん。楽しそうで何より」

「何を言うか、たわけ。幸福さんは私の苦勞が分からないから、そんな
ことを言えるんだ」

「だって俺は恥ずかしくないしー」

「……たわけ」

生徒会の仕事も終わり、時刻は18時を回る。

いつもならば寮へと戻る時間帯だが、今日はお昼しか共に過ごせな
かつたので、エアグルーヴがトレーニング終わりで戻ってきた幸福の
ことをトレーナー室で待っていた。

付き合ってからチームのメンバーも何かとエアグルーヴと幸福
のために気を回すようになり、こうして二人の時間を過ごせる。

当然、以前のようにみんなまでワイワイすることもあるが、二人の時
間が増えたことでエアグルーヴはより充実した学園生活を送れてい
た。

そんな訳で今はソファーに幸福を座らせ、彼の膝枕を堪能中のエア
グルーヴ。

首筋をトントントンと撫でられつつ、無意識にモゴモゴしてしまう
唇を空いている手で弄ばれるのは、くすぐりたいと思ひながらもとて
も心地良いと感じていた。

「……可愛いなあ」

「……は？」

「？俺の彼女は可愛いなあって思つて」

「……」

唐突に幸福から褒められ、エアグルーヴは気恥ずかしくなって顔を彼のお腹側に向けて隠れる。

幸福は急にこういうことを平然と言ってくるため、エアグルーヴはそれにまだ慣れない。

嬉しい気持ちは強いものの、面と向かって言われたらどう返せばいいのか分からないのだ。

「好きだぞ、エアグルーヴ」

「ああ……」

「エアグルーヴは？」

「言わないと分からないのか？」

「言われたいんだよ。言葉は口にしないと伝わらない。態度や仕草で伝わるのでもいいが、俺は言われたい。惚れてる相手からなら特に」

「………しゅきい」

消え入りそうな声で赤面して言うエアグルーヴに、幸福は満足そうに何度も頷き、良く出来ましたとばかりに彼女の首筋をトントントンと無でる。

「太ももと腹がめっちゃ熱いんだが？」

「……たわけ」

「何もたわけてない。熱いから事実を言ったまでだ」

「……いじわる」

「好きな子には優しくしてるんだがなあ？　不思議だなあ？」

「むう……」

ころんと仰向けに戻り、膨れっ面で不満を示すエアグルーヴ。

しかし幸福は、

「可愛い顔……ほいっと♪」

「んにゅう……にやにをしゆる」

「膨れてると潰したくなるじゃん」

「むう……」

膨れた頬をむにいと親指と人差し指で摘み、弄ぶ。

エアグルーヴは当然不満の色を強くするが、眼はしっかりと蕩けているため、構ってもらえていることにごく満悦。その証拠に尻尾も体の

下にあるのに先がパタパタと揺れている。

「さて、そろそろ時間だ。寮まで送るぞ」

「……なんだか、いじめられて終わった気がする」

「嬉しいくせに。耳と尻尾は口ほどに物を言っているぞ？」

「……ふんだ」

エアグルーヴは口を尖らせてそっぽを向くが、幸福が左腕を差し出すとすぐに彼の腕に両手を回し、寮までの短い帰り道を優しくエスコートされるのだった。

寮の玄関までその状態だったので、寮の玄関からは他生徒たちの黄色い声が栗東寮に響いていたという。

女帝と杖のお出掛け

ジャパンカップが終わって初めての休日。

今日はエアグルーヴにとつて、待ちに待った日だ。

何故なら、

「おう、お待たせ。早いな。約束の時間より一時間も前だぞ？」

幸福と恋人になつて初デートなのである。

「た、楽しみで早くに目が覚めたただけだ……あと、着いたのは数分前だ」

「そかそか。待たせるのもあれだと思つて一時間早く出たんだが、次はもう少し早く出ることにするよ」

「しなくていい。それだと結果的に早朝に待ち合わせることになりかねんからな」

「……まあ、それも有り得そうだな」

お互いに相手を待たせるのは性に合わない。故にデートを重ねて行く度に、待ち合わせ時間がより早くなつていくのも容易に想像出来たので、幸福は素直に頷いた。

今は冬とは言え、快晴で日差しも暖かい。

エアグルーヴは白のロング袖縦セーターにデニムのショートパンツ。そして黒の冬用タイツに、青のパンプスというコーデ。青と黄のギンガムチェックマフラーをリボン結びにしているし、尻尾の付け根には前に幸福からプレゼントされた赤いリボンを結んでいる。

対して幸福は黒のスリムダウンジャケットに、紺色のカーゴパンツ。ジャケットの下には黄色の無地のトレーナーを着用。靴は歩きやすい灰色のスニーカーだ。

「その服装初めて見たな。可愛いぞ、エアグルーヴ」

「こ、幸福さんだって、その……素敵だ、ぞ……」

「おう、ありがと。んじや、折角一時間も早く揃ったし、近くの喫茶店でモーニング堪能してから繰り出そうぜ」

そう言つて幸福がエアグルーヴに左腕を差し出すと、彼女は「ああ」

と小さく頷いて、しっかりと彼の腕に両手を絡める。

服装を褒めてもらったのも、何も言わなくてもエスコートしてくれるのも、優しい笑顔を向けられるのも、幸福にされることが全て嬉しいエアグルーヴ。

決して素直に言葉には出せないが、その代わりにエアグルーヴは幸福の二の腕に頭をピツタリとくっつけて尻尾も幸せそうに彼の太ももに当たっているのだった。

◇

「モーニングセット2つ。飲み物はアメリカンとストレートティーで」

店員に注文をすると、店員は一礼して幸福たちのテーブルをあとにする。

「なあ、モーニングを2つも頼む理由はあったのか？ 私は朝食を取って来たのだが？」

「ああ、俺が2つ食べるから気にしなくていいよお。実はデートってことで年甲斐もなく緊張しちまってな。朝飯食べれる状態じゃなかったんだ」

「そ、そうか……」

それほどまでに自分とのデートを楽しみにしてくれていた感じ、エアグルーヴは胸の奥が温かくなった。

自分ばかりが楽しみにしているのではないと分かり、嬉しいエアグルーヴ。

「んで、エアグルーヴの顔見たら安心して、腹減ったんだよなあ」

「……たわけ」

いつもの言葉を幸福に返すと、彼は柔らかく笑って返してくる。なのでエアグルーヴもそれにつられて、小さく微笑んだ。

その後、店員が運んできた飲み物とセットのトーストと卵サラダ、コーンポタージュを幸福はペろりと平らげる。因みに途中、何度か幸福がエアグルーヴにアーンをしてやったりもしたので、彼女の調子もすこぶる絶好調になった。

◇

二人が初デートに選んだ場所。それは駅前にあるデパ地下だ。

初デートなのにいいのか、と疑問に思われるかもしれないが、二人は遊園地や水族館といった如何にもデートスポットという場所は既に何度もお出掛けで行っている。

なので今日は二人で行ったことのない場所に行こうということ、デパ地下になったのだ。

「今日は何かの物産展やってるかなあ？」

「昨晚調べておいた。今日は北海道の物産展をやっているらしい」

「お、いいな。カニがあつたら買おう！」

「散財はするなよ？」

「おう」

表情が明らかに輝き出した幸福を見て、エアグルーヴも思わず笑顔になる。

彼のこうした少年っぽさがエアグルーヴは愛おしくて堪らないのだ。

「そこのお似合いカップルさん！ 生キャラメルの試食やってますよ！ おーっ如何ですか？」

物産展に入ったと同時に職員から声を掛けられる二人。

幸福に至っては「お、美味そう」と平常運転だが、エアグルーヴは「お、お似合い……ふへへ」と女帝の仮面が早くも崩れ落ち、乙女グルーヴがこんにちはしている。

「頂きます……びゃあ、うまいっ！ エアグルーヴも食べてみるよ。あーん」

「ふえ？」

「口開けるよ、あーん」

「あ、あーん……」

人前なのに、とエアグルーヴは一瞬躊躇いを見せたが、愛する人からのあーんという誘惑に負け、素直に口を開けた。

幸福は『栗みたいな口してんな……可愛い』と思いながら、ひよいと彼女の口に生キャラメルを運んでやる。

するとエアグルーヴは生キャラメルが美味しいのもあるが、人前だ
というのに愛する幸福からあーんをしてもらった背徳感で尻尾の付
け根が思わずピリピリと甘い電流が走ったような感覚を覚えた。

「彼女も気に入ったぽいんで一袋ください」

「ありがとうございます♪」

こうして幸先良く、幸福は生キャラメルを購入した。

◇

二人が仲良く肩寄せ合って物産展を見て回っていると、

「あそこにスピカの子らがいるぞ」

「テイオーにスズカにスペシャルウィークか」

お馴染みのウマ娘たちを見つけた。

三人も私服姿で、何やらワチャワチャしている。

「何かトラブルでもあったのかな？ 声かけた方がいいか？」

「ちよつと待て」

向かおうとする幸福をエアグルーヴが止め、エアグルーヴは三人の
方へ耳を傾けた。

三人がワチャワチャしている理由は、

「え、スペちゃんはイクラを耳に入れて遊んでたの!？」

「こわっ！ スペちゃんこわっ！」

「ち、小さい頃のお話ですよ！」

「そもそも、イクラを耳に入れてどう遊ぶの？」

「えつとですね……耳にイクラをこう、入れて……放置するんです！」

「カッピカピになるじゃん！」

「それをペリペリ剥がすのが楽しかったんですう！」

「もうしてないわよね？」

「しませんよ！ 今は食べる専門です！」

『良かった。私（ボク）の知ってるスペちゃんだ……』

何ともまあ頭が痛くなる会話だった。

「お、おい大丈夫かエアグルーヴ？」

「……ああ。とにかく、あの三人は問題ない。それより少し疲れた」

「んじや、時間も時間だしフードコート行くか。カニ食えるって」

「幸福さんは本当にカニが好きなんだな……ふふっ♪」

こうして二人はトウカイテイオーたちから離れ、物産展の側にあるフードコートへ向かった。

◇

フードコート内のメニューは北海道の特産品が目白押し。

その中で幸福は振れずにカニ海鮮丼を頼み、エアグルーヴは北海道産のじゃがいもをふんだんに使用したポテトグラタンを頼んだ。

「カニ♪ カニ♪ カニ〜♪」

「子どもか」

「いやあ、カニってガキの頃滅多に食べなくてさ。ガキの頃初めて食った感動が忘れられなくて、大好物なんだよ!」

「……そうか。食べるのが出来て良かったな」

「おう」

んじゃ、頂きまーす!と手を合わせて、カニを頬張る幸福。

そんな彼を見て、エアグルーヴはこの上ない愛おしさが溢れ、思わず目を細めた。

可愛い……幸せ……好き……と彼に対する愛が止めどなく溢れ、尻尾もふわりふわりと揺れて、耳も彼の方にしか向いてない。

「なあ、エアグルーヴ……」

「ん、どうかしたか?」

「……そんなに見詰めないでくれよお。流石に恥ずい……」
「っ!?!」

私のトレーナーが、ずきゅんどきゅんカワイイ〜♪

ばきゅんぶきゅん、カワイ過ぎる〜♪

こんなく、思いはく、はくじめて〜♪

幸福の珍しい赤面に、エアグルーヴのやる気は天元突破。

その証拠に尻尾はもう千切れんばかりに揺れ、耳もハチドリ羽の如く高速で揺れていた。

「す、すまん……」

「いや、別に……こういうの慣れてないから」

「私が初めて、なのか?」

「まあな……学生の頃に仲良くなった子と遊びに行ったりはしたけど、恋人自体初めてなもんで……」

「恥ずかしそうに頭を掻いて言う幸福。」

しかしエアグルーヴはこの上ない幸せを感じてそれどころではない。

年齢が離れているため、流石に初めての相手ではないと思っていた。なのに、本人の口から「初めて」だと言ってもらえた。

「……今日が私の命日なのか？」

「は？」

「こんな幸せを過剰摂取してるんだ。いずれ倒れるはずだ」

「おい、死因が幸せとか聞いたことねえぞ」

「死ぬほど幸せというのはこういうことを言うんだな。我が生涯に一片の悔いなし、だ」

「どこぞの世紀末覇者かよ」

完全に掛かってしまったエアグルーヴ。

その後も暫くエアグルーヴは「幸せ過ぎる」とうわ言をつぶやき続け、ポテトグラタンも幸福に強引に口に運ばれ、またあーんをしてもらったことで「私は今日死ぬのか……」とつぶやき続けた。

◇

食事のあと、食後のティータイムでエアグルーヴは冷静さを取り戻し、我に返って羞恥心に苛まれる。

しかし幸福が気にすることはない、と笑ってくれたのでエアグルーヴは何とか立ち直ることが出来た。

そしてそれから物産展を隅々まで回り、帰る頃には幸福がそれなりの量を買ってしまっていた。買ったのは当然カニ。他にもホッケやモツツアレラチーズやら、北海道の美味しい物をたくさん手に入れた。

「運んでくれてありがとな、エアグルーヴ」

「気にするな。普段幸福さんには私の買い物で手伝ってもらってるから、そのお礼だ」

幸福が住んでいるマンションへやって来たエアグルーヴ。

当然今日は留守番をしていたカールも、エアグルーヴも一緒ということで大興奮で出迎えてくれた。

今はそれも落ち着き、自身の寝床であるドラ焼きクッションの上で、丸まって眠っている。

「外出届けは出して来てるんだよな？」

「当然だ。流石に外泊までは出来ないが」

「いやいや、外泊はダメだろ。主に俺の人生が詰む」

「……私が養うからいいのに」

ボソツとエアグルーヴがつぶやくが、当然幸福の耳には入っていない。

「まあ何にしても、まだ時間には余裕があるな。晩飯食ってく？ それとも寮まで送る際にどっかで食べてくか？」

「では後者で頼む。今は幸福さんと触れ合っていたいんだ」

「はいよ」

幸福はエアグルーヴの願いを聞き入れると、ソファアに座って両手を広げた。

するとエアグルーヴは花が満開になったかのような大輪の笑顔を浮かべ、幸福の胸に飛び込んだ。

膝上に腰を下ろし、端ないと思いつつも、スンスンと肺を愛する人の匂いで一杯にする。それだけで表情は蕩け、ぽうつと頬が紅潮した。

「可愛いなあ、エアグルーヴは……」

「ん、はう……ほっぺをむにむにすゆなあ……わらひはカールではないんだじよ？」

「カールみたいなものだろ。カールもこうされるの好きだから、きつとエアグルーヴに似たんだな」

「ちやわけ……んにい」

「あはは、めっちゃ可愛い♪」

「んゆ……」

頬をこれでもかと揉みしだかれ、エアグルーヴは胸の奥がとくんとくんと甘い悲鳴をあげる。

すると幸福との顔の距離が更に縮まった。

これは……そういう合図だろう。そう感じ取ったエアグルーヴは、そつとまぶたを閉じる。

すると幸福から「愛してる」と囁かれたあとで、唇を吸われた。初めてではないが、何度しても、心が満たされる彼とのキス。

心はとても満たされるのに、卑しくもそれをもっともつと欲してしまう部分もある。

「……はあ。好きだぞ、エアグルーヴ」

「はあはあ、私も、しゅきい……なあ、もつとお」

なのでエアグルーヴは再度口づけを強請った。

幸福はそれに優しく応じ、またエアグルーヴの唇に自身の唇を重ね合わせる。

エアグルーヴは前に映画で見た時のように首を振って、互いの唇をちよつと深く絡みつかせてみた。

互いの唇同士が複雑にくねり、溢れ出した唾液がピチャピチャと卑猥な音を鳴らす。

(こんなに気持ちいいキスは初めてだ……素敵)

そう思いながら、エアグルーヴは幸福との幸せなキスに夢中になった。

「んっんっ……んんっ……んっ……」

「んっ、ちゅっ……」

エアグルーヴが首を振れば、幸福もそれに応え、更に唇を深く絡みつけてくれる。

(こんなに気持ちいいことを知ってしまったら、もう知らなかった頃には戻れないな……幸福さんのせいだぞ)

そんなことを感じつついると、

「んっちゅっ……んちゅっ……んんっ!!」

「エアグルーヴの唇……凄く柔らかいよな……」

幸福がキスをしながら唇を動かして言った。

「んっっ!」

キスしながらの甘い言葉。それも褒め言葉にエアグルーヴは背筋

がゾワゾワする。

「よ、余計なことを言うな……それよりもっとキスに集中しろ……たわけ」

「ごめんごめん……んっ」

「んむう♪」

再度幸福に唇を吸われ、思わず吐息が弾むエアグルーヴ。

幸福はそれを愛おしく思い、今度は離れないようにエアグルーヴの後頭部を右手で優しく押さえつけた。

「ちゅっ……んっちゅ……んっんっ……なあ」

「ん？」

「舌……出してくれないか……？」

「舌？」

「早くう……んあ……れろっ……れろれろ♪」

お強請りするように幸福の唇を舐め回すエアグルーヴ。

こんなに大胆なエアグルーヴは初めてなので、幸福は戸惑いつつも、素直に舌を出した。

「んんっ!？」

言われた通りに幸福は舌を出し、舌だけをヌルヌルと動かし始める。

するとエアグルーヴは思わずビクンと腰が跳ねた。

見様見真似のエアグルーヴだったが、幸福からされた艶かしい動きに、全身が蕩けそうになる。

「ああんっ、んっ……ああっんっ……んぱっ、ちゅぱ……んおあ、れろお……こうふくさ……あん、こうふくさあん……」

初めてした大人のキスの喜びと、幸福の隠れたキステクの凄さに、エアグルーヴはつい腰がふにやっつと砕けてしまった。

ビクンビクンと小刻みに腰が跳ね、熱い吐息が漏れるエアグルーヴ。

そんな彼女を落ち着かせるように、幸福は彼女の背中を優しく擦ってやった。

「はあ……はあ……はあ……」

「よしよし」

まるで超長距離を全力疾走したあのような息遣い。こんなことはジャパンカップのあとでもなかった。

それほどまでに幸福とのキスがエアグルーヴにとって凄かったということだろう。

「なあ……」

「ん、どした?」

「本当に、幸福さんは、キス初めてなのか?」

「初めてだけど?」

「そうか……」

それだけ言うと、エアグルーヴは力尽きたように彼の肩に顔を押し付けた。

(初めてなのにあんなに気持ち良かった。そもそも私もキスは初めてだから、上手い下手の基準は良く分からない。だが、あれは気持ち良かった。いや良過ぎた。こんなの毎日していたら、おかしくなるっ！)

眼がグルグルと混乱するエアグルーヴ。

彼女がそんなことを考えているとは露知らず、幸福は優しく彼女の後頭部をポンポンと撫でていた。

やがてゆっくりとエアグルーヴが頭を上げると、耳はしおしおに垂れ、しかしその眼の奥にはハートマークがしっかりと浮かんでいるのが分かった。

「幸福さん……」

「んー?」

「ずるい」

「何が?」

「私をこんなにして、ずるい」

「んなこと言われても……」

「ずるいものはずるいんだ……だからこうしてやるー!」

「痛っ!?!」

首筋をエアグルーヴが噛んだ。血は出てないが、そこにはくつきり

と彼女の歯型が残り、これは暫く消えないだろう。

「いきなり何すんだよ……おーいて……」

「ふん。私をこんなにした幸福さんが悪い」

「ええ。舌出せって言ったのはエアグルーヴの方なのに」

「文句を言うな……たわけ」

「はあ……分かったよ。それより」

「どうした？」

「俺が痛いって言ったから、カールが心配してこっち見てる」

「……………私は無実だ」

「いやそれ、カールに言ってくんね？」

その後、エアグルーヴはカールに「違うぞ。喧嘩はしてないぞ」と取り繕い、門限の時間も迫っていたので簡単なおにぎりと即席味噌汁で夕飯をぱぱと済ませ、エアグルーヴは幸福とカールに寮まで送ってもらうのだった。

大切な記念日を控えて

世間は師走。

今月末に行われる今年最後の大きなレース有馬記念には、デネボラメンバーの中でカワカミプリンセスとゴールドシチーが出走する上、元旦に行われるウインタードリームトロフィーから1週間後にはURAファイナルズの決勝戦が行われる。

セイウンスカイとマーベラスサンデーは共に距離は違えど決勝に駒を進めているため、それに向けたトレーニングも佳境に差し掛かっていた。

あのセイウンスカイですら、URAファイナルズの決勝ということと並々ならぬやる気をキープしており、楽しみの釣りというおサボりも幸福に「暫くはおサボりをお休みします」とまで言ったほどだ。

マーベラスサンデーに至っては相変わらずだが、連日楽しみ過ぎて眠れずに同室のナイスネイチャに注意されているのだとか。

当然、有馬記念に出走するカワカミプリンセスとゴールドシチーも二人に負けじとトレーニングをこなす日々。ゴールドシチーに至っては有馬記念を最後にドリームシリーズに移籍することになっているため、有馬記念が終わるまではモデルの仕事も事務所と相談した上で休業中。

そうしたことから、他のメンバーもその四人からいい刺激を貰い、この四人に負けてなるものとトレーニングに身が入った。

そんな中、エアグルーヴに至っては先月のジャパンカップを最後にトウインクルシリーズからドリームシリーズに移籍することになっていたもので、今は来年度から始まるドリームシリーズに向けての準備期間に入っている。

ただエアグルーヴに至っては、この時期はそれよりも重要な時期であった。

それは、

「トレーナーの誕生日プレゼントが決まらない？」

愛する幸福の誕生日が近いからだ。

よってエアグルーヴは連日、彼に渡すプレゼントのことで頭を悩ませ、まだ決まっていない。

幸福の誕生日は元旦。今はまだ12月の初めなのでぶっちゃけまだ先なのだが、エアグルーヴは昨年も一昨年もプレゼント選びに1か月以上時間を費やした。

それに今回は恋人になって初めて迎える彼の誕生日という大切な記念日。故にプレゼント選びはかなり重要。故に難航を極め、ああでもないこうでもないと言った頭の中がグツチャグチャになっていた。(それでも日頃の生徒会の仕事やトレーニング等は完璧にこなすというウマ娘の鑑)

なのでエアグルーヴは素直にチームのメンバーたちに助けを求め、今に至る。

今日は幸福がトレーナー会議でトレーニングもお休み。そしてトレーナー室の鍵はエアグルーヴが合鍵を預かっているため、みんなをトレーナー室に呼んで相談に乗ってもらおうことにした。

みんなも自分の予定があるのに快く集まってくれたので、エアグルーヴはそんなみんなに心から感謝し、相談をするのだった。

「前は何をプレゼントしたの?」

「確か去年はベルトだったよね?」

「んで、その前は手帳だったな」

ゴールドシチーが思ったままを訊ねれば、エアグルーヴではなくセイウンスカイとヒシアマゾンが答え、それに対しゴールドシチーは顎に手を当てて思案する。

「あたしとしては、トレーナーならエアグルーヴさんからのプレゼントなら何でも喜ぶと思うの」

「それは言ってるね。何だかんだエアグルーヴのことが一番だもんね、あのトレーナー」

アイネスフウジンとナリタタイシンがそんなことを言うと、エアグルーヴは照れ隠しに紅茶を啜る。

しかし二人の言ったことに対して誰も反論はない。

何故なら、幸福のエアグルーヴに対する溺愛は恋人関係になったことで爆発したのだ。

学園内外問わず、エアグルーヴの側にいれば何処へ行くにも必ずエスコートするし、仕事で学園外へ行けばその先で必ずエアグルーヴにだけは装飾品を買ってくるし、会う度に彼女への愛の言葉を囁く。

そんな彼の変わり様に、デネボラメンバーだけでなく、他にも多くのトレーナーやウマ娘が『よく今まで我慢してたな』と呆れ返ってしまうほど。

だからこそエアグルーヴは日頃の彼に対する愛を込めたプレゼントがしたくて、悩みに悩んでいるということだ。

「あむあむあむ……ごくん。だったらお料理作ってあげたら？ 何処かにデートしに行くとかより、トレーナーは誕生日は好きな人と二人つきりで甘々に過ごしたいってタイプだの思うもん！」

今までエアグルーヴにおやつとして出してもらった人参プリンに夢中になっていたマーベラスサンデーがそんな提案をする。

彼女は何も聞いていないように見えて、しつかりと相手の話は耳に入っているのだ。

それにマーベラスサンデーはこれまで何度も幸福をお出掛けと言って、連れ回したじやじやウマ娘でもあるため、幸福のことはエアグルーヴの知らない部分まで意外と把握していたりいる。

「なるほど……確かに幸福さんはロマンチストだから、落ち着いた静かな雰囲気をお好む傾向があるな」

天啓を得たとばかりに頷き、席を立った。

メンバーが揃って首を傾げると、

「そうと決まれば材料を買いに行つて、どんな料理を幸福さんに食べてもらうか決めなくては。皆、すまないが手伝ってくれるか？」

◇ 今度は料理の相談を持ち掛けられ、メンバーは快くそれに頷いた。

そんな訳でエアグルーヴたちがやって来たのは、寮の近くにある商店街。

昔ながらのお店が並び、ウマ娘たちも良く訪れる場所なので活気が

ある。更に言えば幸福は商店街の雰囲気が好きなので、エアグルーヴもここで調達した食材で料理を提供したいと考えたのだ。

「何を作るとかもう浮かんでるのか?」

ヒシアマゾンがそう訊くと、エアグルーヴは首を横に振って「いや、まだだ。まずは色々を見て回って決める」と返す。

「というか、誕生日もそうだけど、世間的には先にクリスマスが来るよね? そっちの方は考えなくていいの?」

そこへナリタイシンが疑問を投げると、

「そのことならばもう決めてある……というよりは、幸福さんに直接聞いて、クリスマスに二人で買いに行く予定だ」

エアグルーヴは平然と返して来た。

「何を買う予定なんですの? もしかして指輪ですの!? そうですね!?! あく、トレーナーさんと先輩がついに……憧れますわ憧れますわ憧れますわ〜! お二人の挙式は是非ともお父さんの会社のグループがやっているチャペルで挙げてくださいませ! わたくしがお父さんに言えば無料になりますわ!」

「ウェディングのリングかあ……いやあ、女帝様は仕掛けが早いですなあ♪ 学生結婚とは、ねえ?」

「バツ、ち、違うぞ! 違うからな!?! クリスマスに買うのはフォトブックだ! そこに恋人になってからの思い出を残そうと……だから決して指輪ではない! そもそもまだ早いだろう、たわけ!」

カワカミプリンセスとセイウンスカイに言われ、顔を真っ赤にして否定するエアグルーヴ。

因みにヒシアマゾン、ナリタイシン、ゴールドシチーの三人は『フォトブックを買う理由が甘過ぎる』とエアグルーヴの無自覚惚気に内心苦笑いした。

「あつ、あそこの八百屋さんの大根、とっても安いのー!」

「あー、気怠ねこのガチャポン! まさかここにあるだなんて、マーベラスー!」

一方でアイネスフウジンとマーベラスサンデーは早くも目的が変わっている。因みにマーベラスサンデーが言った『気怠ねこ』は、猫

が怠そうに地べたに寝そべっている様子を模したカプセルトイ限定のミニチュアフィギュア。ナイスネイチャやマヤノトツプガンとハマって集めているそう。フィギュアのポーズはどれも同じだが、猫種が全25種類プラスシークレット1種類があるのだとか。

「アタシはエアグルーヴと回るから、みんな自分の好きなどこ行きなよ。えっと今が15時半だから、17時にまたこの商店街の入口に集合ってことにしよ」

「ああ、ならアタシがアイネスとマーベラスのこと見てるよ」

ゴールドシチーの提案にヒシアマゾンが手を挙げると、アイネスフウジンもマーベラスサンデーも彼女の手を引いて一旦別れた。

「他のみんなも好きなどこ行っていいよ?」

「アタシは別に何も目的ないからこのまま付いてくよ。そもそもエアグルーヴのために付いて来ただけだし」

「わたくしもですわ。それに荷物持ちならお任せあれですわよ!」

「セイちゃんは一緒に回りながらフラフラさせて頂きますよ〜♪」

◇ こうして二手に別れ、それぞれ商店街を見て回った。

◇ 「そう言えば、何でクリスマスプレゼントはトレーナーに聞けたのに、誕生日プレゼントは聞けないの?」

ヒシアマゾンたちと別れて少しした頃、ゴールドシチーが思い出したようにエアグルーヴに訊く。

「ああ、それはあれだ……。クリスマスはみんなの記念日だが、幸福さんの誕生日は彼だけの記念日だ。だからクリスマスのように軽い気持ちでは聞けない。ただそれだけのことだ」

彼女かそう返すと、それを聞いた誰もが『エアグルーヴらしいなあ』と微笑んだ。

当然ゴールドシチーに「乙女だねえ」と茶化され、セイウンスカイからは「お熱いですなあ」とからかわれ、エアグルーヴのたわけという叫びがこだました。

◇ 「一通り見て回ったけど、何か思い付いた?」

ゴールドシチーの問い掛けにエアグルーヴはしつかりと頷く。

「ああ、決めた。カニ料理と誕生日ケーキを作ることにする」

エアグルーヴは商店街を見て回っている途中、ケーキ屋の前でアイデアが浮かんだ。

幸福も甘いものは好きだし、誕生日ケーキならば喜んでもらえるだろうと思っただけだ。それと無類のカニ好きなので、今の時期のカニ料理はとても喜んでくれるだろうと。

「ん、いいんじゃない？ 何ケーキにするの？」

「幸福さんはチーズケーキが好きなんだ。だからチーズケーキにしようかと思う」

「あ、確かにスイパラ行った時とか良くチーズケーキ持って来てたかも」

セイウンスカイがふと思いつくと、他の面々も確かにと頷く。

「でしたらレアチーズケーキなんてどうですか？ 色々アレンジも出来ますし、それこそトレーナーさんの手作りジャムを使ってマーブルにも出来ますし！」

カワカミプリンセスは自分が食べたい物を正直に提案すると、エアグルーヴが「いいな」と目を輝かせて頷いた。

「あはは、カワカミ、そう言えば試作ケーキ食べられると思って提案したな？」

「ギクウツ!? そ、そんなこと……ありませんとも……」

ゴールドシチーの指摘に目がこれでもかと思いでしまうカワカミプリンセス。

すると、

「マーベラスも先輩のレアチーズケーキ食べたーいっ！」

「あたしも食べたいのー！」

マーベラスサンデーとアイネスフウジンが合流するなりエアグルーヴにお願いする。

彼女らの後ろにはヒシアマゾンもいて、その手には何故かビニールに包まれたチャーシューの塊があった。

当然、それはどうしたとエアグルーヴたちから訊ねられ、

「いや、1キロ千円だったし試食したら美味かったから、つい衝動買いしちゃってね」

苦笑いで答えた。

すると何故かゴールドシチーが「千円チャーシュー……あはは♪」と笑い出したが、みんなはスルーする。ゴールドシチーの笑いのツボはちよつとズレているからだ。

「まあ取り敢えず、買う物は決まったね。魚屋のおっちゃんは知り合いだから、アタシがカニの予約しとくよ」

「いいのか、タイシン？」

「ん。エアグルーヴには世話になったからね。そのお礼」

「ありがとう、タイシン」

「いいって、別に。カニはこれがいいとかある？」

「毛ガニがいいな。今が旬だ」

「予算は？」

「1万円前後で頼む。高過ぎると幸福さんが遠慮してしまうからな」

「じゃあ今から行って当日に受け取れるように頼んでくるよ」

ナリタタイシンはエアグルーヴから聞いたことをウマホのメモアプリに残し、そそくさと知り合いの魚屋へ向かった。

「タイシンって普段クールというか、ドライだけど友達のためなら喜んで動いてくれるよな」

「確かタイシンの親がやってる花屋ってここの商店街にあるよね？だから知り合いつてことなんだね」

「ツンデレキャラの鑑ですなー♪」

ヒシアマゾン、ゴールドシチー、セイウンスカイがそんな話をしていると、少し離れたところからナリタタイシンが「うっさい！」と叫び、みんなそれに思わず笑う。

エアグルーヴは『本当に私は周りに恵まれているな』と思い、試作ケーキとはしないで感謝を込めてケーキをご馳走しようと心に決めた。

トレセン学園のウマ娘は学生

12月も中旬ともなれば夜になると、この時期の街は色とりどりのイルミネーションやクリスマスMASの装いが増えが、道行く人々を楽しませてくれる。

世の中はすっかりクリスマススムード一色であり、ウマ娘たちもそのためか何処か浮足立っていた。

しかし――

「……回答欄が一個ズレてて赤点。小学生でもこんなミスしないだろう」

「にやは、眠くってつい……ね♪ そう怒らないでくださいよ、エアグルーヴ先ぱい♪」

「たわけ」

――昨日まる一日を使い学内で一斉に行われた学力テスト。そのテストでセイウンスカイは社会科のテストで凡ミスをしてめでたく追試となった。

レース競技ウマ娘とはいえ、彼女たちは学生。

学生である以上、勉強にも励まないといけないのだ。

デネボラメンバーは幸い、エアグルーヴやヒシアマゾン、ナリタタイシンといった頭のいい子がいる。

なので今日は幸福がトレニングを休みにし、みんなをトレーナー室に集めて勉強会をすることにしたのだ。

因みにゴールドシチーとマーベラスサンデーも追試組である。ゴールドシチーは数学でマーベラスサンデーは理科を落とした。

「追試じゃないやつは適当に課題やるなり、もう配られてる冬季休業中の課題をやるように。俺は仕事してるから何かあつたら言ってくれ」

幸福が声をかけると、みんなはそれに返事をしてそれぞれテーブルに課題を広げる。

「数学ってマジでワカンナイ。泣ける……」

「アタシも理科はキラ〜い」

「数学はパズルみたいなものなの。基本を理解すれば応用も簡単なの」

「アンタは名前にマーベラスってあるんだから、勉強もマーベラスになるように頑張んな。ヒシアマ姐さんがしつかり教えてやるから」

追試の生徒にのみ配られた復習プリントを前に項垂れるゴールドシチーとマーベラスサンデー。そんな彼女たちに優しく声をかけるアイネスフウジンとヒシアマゾン。

二人に言われ、ゴールドシチーたちは渋々シャーペンを手にした。

「セイウンスカイ。貴様はそこに正座だ」

「はいは〜い」

「はいは一回」

「は〜い」

「伸ばすな」

「はい」

一方、セイウンスカイはエアグルーヴからのお説教を受ける。

しかしながら床に直接正座すると足を痛めるので、ふわもこクッションを用意した上でお説教するのがエアグルーヴの優しいところ。

なのでセイウンスカイも逃げず素直にエアグルーヴのお説教を受けている。

「貴様は頭がいいし、要領もいい。しかし詰めが甘過ぎる。もう少し緊張感を持ってだな……」

「はい」

そこでセイウンスカイが挙手したので、エアグルーヴは言葉を止めて「なんだ？」と発言を許した。

「社会科のテストはお昼を食べたあとにやりました。お腹が膨れています。お腹が膨れれば眠くなるは当然。よって私が眠くなったのも致し方ないので、そんなにイジメないでください」

真剣な表情で弁明するセイウンスカイ。しかしエアグルーヴからすれば、『貴様は一体何を言っているんだ?』と思わずこめかみを押さえる。

前のエアグルーヴならばここでいつもの『たわけ！』というたわけ砲が炸裂するが、

「イジメてなどいない。貴様の成績に響くから口煩く言っているんだ」

今のエアグルーヴはちよつぴり甘さを見せれるようになった。

そうなったのも、

「まあまあ、エアグルーヴ。ウンスがそうなのは前からだし、本人はちゃんと学力があるからそう目くじら立ててやるな。ウンスもちやんと分かつてるから」

幸福という甘さが加わったからだろう。

その証拠に、

「幸福さんがそう言うなら……。そういうことだ。追試で同じ過ちをするなよ、セイウンスカイ？」

「はい、しっかりとやります♪」

長時間のお説教はしなくなった。

このエアグルーヴの変化にはセイウンスカイを含め、ナリタブライアンやダイタクヘリオス、トウカイテイオーといった彼女から常々お説教を受けてきたウマ娘たちにとって、それはもうかなりの変化でありがたい事この上ない。更には幸福のお陰か彼女の言い方も柔らかい物となり、彼女が持つ本来の優しさが強く表に出るようになって前よりも多くの生徒たちに慕われている。

「本当に熟年夫婦って感じだねえ」

「変なところで二の足を踏むけどね」

ヒシアマゾンとゴールドシチーがコソコソとそんな話をすれば、他の面々もうんうんと頷いて、みんなの声が聞こえているエアグルーヴだけ咳払いして課題に視線を落とした。

◇

なんだかんだ集中して課題をこなすエアグルーヴたち。

トレーニングにしろ、ダンスレッスンにしろ、一度集中すると途切れないのがウマ娘。

しかし、

「お腹減ったあ〜」

空腹に耐えきれなくなったマーベラスサンデーが一番に音を上げた。

それでもいつもはおやつを食べたりするのに、今日は勉強のためにおやつも食べず集中していたので、それも仕方のないことかもしれない。

どこの誰とは言わないが、ウマ娘たちの中には空腹が極限に達すると枕に入っている綿や蕎麦殻を食べてしまう子だっているのだ。

「もういい時間だしな……よし、全員切りのいいところまでやったら今日は終わりにするか」

幸福がそう言えば、終えた者から背伸びをしたり腕を伸ばしたりとリラックスする。

「ふい〜、疲れたあ」

「知恵熱出そう……でもこれなら多分追試イケるわ」

セイウンスカイとゴールドシチーがそう零すと、他の面々は苦笑いを浮かべながらも二人に労いの言葉をかけた。

一方で、

「マベさんではありませんが、わたくしもお腹が空きましたわ……」

「アタシも腹減ったなあ」

「あたしもなのー」

カワカミプリンセス、ヒシアマゾン、アイネスフウジンも腹減り娘になっている。

「んじや、せっかくみんな揃ってるし、みんなでカフェテリア行くか。俺もなんか腹減ったわ」

◇ こうしてみんなでカフェテリアへと対うことにした。

トレセン学園のカフェテリアは昼間と比べると、訪れているウマ娘の数は多くない。

みんな大抵夕飯は外へ食べに行ったり、寮で自炊したりするからだ。

ヒシアマゾンたちがメニューを即決する中、幸福だけは「どうすつ

かなあ」と悩んでいる。

「幸福さんにしては珍しいな。何でそんなに迷っているんだ？」

幸福にエスコートされているエアグルーヴがそう訊ねると、

「普通の日替わり定食にするか、人参ハンバーグにするかで悩んでる」
素直に考えていることを口にした。

「好きな物を頼んだらいいだろう？」

「ああ、そうなんだが……人参ハンバーグって俺食ったことないんだよ。叔父さんのところにもあったけど、手伝いをして結局一度も味見たことなくてな。どんな感じ？」

「どんなと言われても……人参ハンバーグは人参ハンバーグとしか」
「だよな」

エアグルーヴの困り顔を見て、幸福は苦笑い。

人参ハンバーグは提供する店によって様々なバリエーションがあるが、幸福の叔父の店もこのカフェテリアでも人参ハンバーグはシンプルである。

デミグラスソースがかかったハンバーグステーキの中央に人参を一本丸ごとぶつ刺してあるというインパクト大の料理。因みに普通の人用だと人参は茹でてある物が蒸した物が刺さっている。

「ならば私が人参ハンバーグを頼む。それなら味見が出来るだろう。私も今日は勉強会で頭を使ったから、夕飯はガッツリ取りたい気分だからな」

「ならそうするわ。あんがと、エアグルーヴ。好きだよ」

「……………私もだ」

ただ夕飯のメニューを決めていただけなのに、二人の周りに花びらやらハートマークがこれでもかと舞い散っている。

「アタシ麻婆豆腐にしようかな。辛い」

「ならアタシもそうするかねえ。口ん中が甘くてやってられないよ」

そんな二人を見て、ナリタタイシンとヒシアマゾンのは口の甘さをかき消すためにあとから辛い物をチョイスするのだった。

◇

「いただきます！」

『いただきます！』

全員揃って幸福の言葉に声を合わせ、明るい食卓が幕を開ける。

「タイシンちゃん、それすっごく辛そうだけど大丈夫なの？」

「いや、見た目より辛くないよ。まあいつものよりは辛いけど、口の中くっつき甘いから丁度いい感じかな」

真つ赤な麻婆豆腐を見てアイネスフウジンは心配しているが、当のナリタタイシンは至ってクールだ。

何故なら、

「幸福さん、あーん」

「あく……うんっ、美味しい！ こりやみんな頼むはずだ」

「口に合ったのであれば良かった。ほら、もう一口……あーん」

「あーん」

ナリタタイシンの斜め前で激甘シユガーダービーが繰り広げられているのだから、それはどんな辛い物でも緩和されてしまうだろう。

これでエアグルーヴは無自覚惚気なのだから余計に甘い。

「アタシ、あれに張り合ってたんだなあ。負けて当然って感じるわ……」

「ゴルシチ、それは考えちゃあいけないよ。まあアンタはしっかりタイマン張ったんだ、胸を張りなよ♪」

「アリガト」

これには流石のゴールドシチーも苦笑い。かつての恋敵エアグルーヴがそのお相手と仲睦まじいのは見ていて気持ちがいい分、傍から見る立場になると何とも言えないのだ。

しかし恋がどういうものかもゴールドシチーは理解しているので、二人のラブラブも仕方ないと思っている。

「マーベラスもあーんってする！ カワプー、はいあーん♪」

「あらまあ……では失礼して、はむっ。んーっ、たまごグラタン美味しいですわ〜♪ それではお返しに、わたくしのカツ丼も一口召し上がってくださいまし♪ あーん、ですわ♪」

「ありがとー！ あむっ……んっ、マーベラス！」

こちらはこちらでデネボラの天使たちが戯れ、セイウンスカイは

『この二人眩しいなあ』と目を細めていた。

因みにカフェテリアの出入り口でアグネスデジタルが安らかに倒れているが、誰もがスルーしている。唯一の優しさはみんな踏まないように跨いで行ってくれているところだろう。

「たわけ。ご飯粒が付いているぞ、全く……ぱくん」

「いや、これはお恥ずかしい。すまんね、ありがとう」

「可愛いから許してやる……ふふっ」

こういう具合にメンバーは二人のラブラブを目の当たりにしつつ、お腹を満たした。

後日、追試は全員合格点を取り、集中してトレーニングに励めたそう。

女帝が杖と過ごす聖夜

世間はクリスマス。

それはトレセン学園で過ごすウマ娘たちも同じで、冬期休業にも入ったこともあり生徒たちは余計に浮かれている。

ただ明日に有馬記念を控えているウマ娘たちは、夢のグランプリ前ということで浮かれ過ぎないようにしていた。

クリスマスにはトレセン学園のカフェテリアで関係者のみ参加することが可能なクリスマスパーティーが開かれる。

帰省前ということもあり、多くの生徒やその担当トレーナーらが参加するが、パーティーは夕方から。

なのでチームデネボラは揃ってクリスマスの街に繰り出している。クリスマスパーティーではプレゼント交換もあるので、そのプレゼントの用意と明日に有馬記念を控えているカワカミプリンセスとゴードシチーの緊張を解すため、幸福がみんなを駅前の大きな雑貨屋へ連れ出したのだ。

ただエアグルーヴはパーティーの準備があるので、それに遅れないようにする予定。

当然、幸福はしっかりとエアグルーヴをエスコートしており、それを見てマーベラスサンデーが真似っ子してカワカミプリンセスをエスコートしている。

「プレゼントはいくらまでだっけ？」

「1000円以内だ。高額のになってしまうと色々問題があるからな」

セイウンスカイの質問にエアグルーヴが答えると、彼女は「了解です」と返してプレゼントになりそうな物を物色。

「俺は無難にペンにでもするかな」

「いいんじゃないか？ 貰って困る物ではないし」

「エアグルーヴは何にする予定？」

「私は去年と同じくメモ帳だ。男性のトレーナーに当たっても使える

ような物を選ぶ」

「そういうのもありだな」

共に意見交換をする二人を見て、メンバーは『何あの熟年夫婦』と内心思う。

それだけ二人の信頼関係が洗練されている証拠なのだが、エアグルーヴに至ってはしっかりと幸福の横顔を見つめて乙女顔。

「マベさんは何にしますの？ わたくしはこのかわいいブタさんの絵が描かれているマグカップに決めましたわ」

「アタシはねえ……あ、この気怠ねこの付箋にする！ 可愛いけど男の人でも使えるからマーベラス！」

一方、天使組は仲良くプレゼントを見つけた様子。

カワカミプリンセスが言うブタのマグカップはゆるキャラっぽい
が、可愛いかどうかは本人次第だろう。

「アタシはこれでいいや」

「タイシン、流石に適當過ぎない？」

「そういうシチーだって、適當に決めたっぽいじゃん」

「あく、このあぶらとり紙は安いけどアタシのおすすめ品だよ？」

「ふーん……ま、何でもいいじゃん。一応このキーホルダーだって、
フィジエットトイ付いてるからいいかなって思ったし」

「へえ、意外と考えてんだ？」

「……うっさい」

照れ隠しにそっぽを向くナリタタイシンに、ゴールドシチーは苦笑
いで謝った。

なんだかんだちゃんと考えているのがナリタタイシンのいいところ。

因みにフィジエットトイとは単調な動作を延々と繰り返して遊ぶ
種類の玩具を総称する言い方で、彼女が選んだキーホルダーにはフィ
ジエットキューブが付いている。

こうして各々でプレゼントを選び、ショッピングを楽しんだ。

最終的に幸福は消しゴムで消せるボールペン。エアグルーヴが青
いメモ帳。ヒシアマゾンが白と青のチエック柄ハンカチ。アイネス

フウジンが小物入れ。セイウンスカイはマグロを模したストラップというラインナップになった。

◇

ショッピングが終わると、エアグルーヴが学園へ戻るのにいい時間だったので、みんなして学園へ戻ることに。

するとその途中で、何やらいい匂いが漂ってくる。

少し早いけど14時を過ぎているのもあり、マーベラスサンデーとカワカミプリンセス、セイウンスカイがその匂いにつられた。

匂いの正体はたい焼きの移動販売車。公園に停まっついていてマーベラスサンデーたちに『食べたい!』とおねだりされ、幸福は苦笑いで「奢ってやるよ」と承諾した。

「おじさん、こしあん一匹くーださい♪」

「わたくしはカスタードを一匹くださいな♪」

「私は……クリームチーズでお願いしまーす♪」

三人が我先にと注文すると、たい焼き屋の大将は「毎度!」と豪快に返してたい焼きを手渡す。

「アタシは小倉で!」

「アタシは……白あん」

「あたし抹茶白玉がいいのー!」

「アタシこの小倉&クリームチーズで♪」

「はい、毎度!」

ヒシアマゾン、ナリタイシン、アイネスフウジン、ゴールドシチーとたい焼きを注文し、

「私はチョコレートを頂きたい」

「俺はこっちのホワイトチョコのやつをください」

「へい、毎度!」

エアグルーヴと幸福もそれぞれたい焼きを受け取り、幸福がちゃんと全額払った。

みんなお行儀よく、公園のベンチに座って『いただきます』と声を揃え、たい焼きを頬張る。

そんな中、幸福はたい焼きを見つめて「へえ」と声を漏らした。

「幸福さん、どうしたんだ？」

「ん、このたい焼きメスだから、珍しいと思っただけな」

「メス？」

エアグルーヴが聞き返すと、幸福は「そう、メス」と頷き、他のメンバーも『メスなんだ……』と驚いた様子。

「それとあのおっちゃんが使ってたのは一丁焼きだったから天然物だ」

「たい焼きに天然物があるということは、養殖物もあるのか？」

「あるぞ。養殖物は一度で多く焼けるやつで作ったたい焼きのことだ」

「なるほど、奥が深いんだな。それで、オスメスの見分け方はどうするんだ？」

「口を見れば分かるぞ」

幸福はそう言って、自分のたい焼きの口をみんなに見せる。

「一概にそうだとは言いがたい切れないが、たい焼きの口のとこが円弧になってるだろ？　こうなってるのはメスで、四角いのはオスなんだ。ただその店によってパリパリがオスでふつくらがメスだったり、中身ぎっしりがメスで、少なめがオスだったりあるって俺の叔父さんから教わったんだよ」

説明を聞くとみんなは揃って「へえ」「ほう」と頷いた。

実際、口のとこが円弧になっている型を使うのは関西に多い。

「というか、クリスマスにたい焼き食べてるなんて、アタシらしいよね」

「あはは、確かに！」

「普通はみんなケーキとかチキンだもんな！」

「まあうちらしくていいだろ。それにたい焼き美味しい」

ゴールドシチーの言葉にアイネスフウジンとヒシアマゾンがそう言っただけで、幸福の言葉にみんなして頷き、たい焼きを頬張った。

因みにこういう時によく出る頭と尻尾どちらから食べる論争は、頭派が勝利した。

ヒシアマゾン、アイネスフウジン、マーベラスサンデー、セイウン

スカイが頭から。

ゴールドシチー、ナリタタイシンが尻尾から。

エアグルーヴは半分に割ってから。

そして幸福はエラからという結果。

エラからという理由は幸福曰く、エラをやらないと逃げてしまうからなのだとか。本人はたい焼きが動かないのは知っているが、父親と兄が某たい焼きくんの歌みたいに海に逃げたら大変だから、まずはエラからいけと教わったので今でもそうしているのだそう。

それを聞いてみんなは笑ったが、エアグルーヴだけは『私の恋人が可愛過ぎる……』と内心悶えていた。

それから時間が過ぎて、クリスマスパーティーが始まる。

今年はオグリキャップとスペシャルウィークに加え、タイキシャトルがいるため、参加しているみんなはお目当ての料理がなくなる前に確保に走った。

当然、三人はそれぞれのトレーナーが他の食べ物で気を引いていたのでみんなは比較的ゆつくりと確保することが出来た。

「今年も去年とあんま変わんねえ光景だな」

「……お馴染みということで良しとするしかあるまい」

幸福が愉快そうに言う隣で、エアグルーヴはこめかみを押さえながらそう返す。

料理はテーブルの上に乗り切らない量を用意したが、参加する者も年々増えているし皆良く食べるために満腹になるのは難しい。

だからといって全員が満足する量となるとそれだけで予算の確保が難しくなる。これは学園の予算ではなく、生徒会の予算で行っているのだから。

「まあでもパーティーの雰囲気を楽しんでくれればいいんじゃない？

足りなきや足りないでみんな他で食べるだろうし」

「ああ、そうだな」

「エアグルーヴもそんな難しい顔してないで、ほらスマイルスマイル」

「……たわけ」

幸福がへらりとした笑顔を浮かべれば、エアグルーヴもそれにつられて笑顔になった。

そしてエアグルーヴは『ああ、私は本当に幸せ者なのだ』と彼の優しさに胸の奥が温かくなる。

いつの間にかエアグルーヴは周りの目があることを忘れ、そつと幸福の肩に頭を寄せて甘える仕草をみせていた。

そんな二人を――

「うわあ、エアグルーヴ先輩とそのトレーナー……ラブラブ過ぎでしょ……」

「あの二人からステータス『ラブラブ相思相愛』を確認。それにより、私にも『高揚』が与えられました。眼福です」

「いいなあ、エアグルーヴ……あたしもトレーナーさんと……つて、何考えてるんだ、あたしい！」

「デイ・モルト（非常に）、デイ・モルト良いぞ」

――お馴染みの同盟員たちは食い入るように見ている。ナリタブライアンが少々何キャラなのか分からなくなっているが、雰囲気や二人の甘さでハイになっているということだけは理解してほしい。

「エアグルーヴとそのトレーナー君は仲睦まじいな」

「こうして人間とウマ娘の歴史がまた未来へと繋がるんだろうな」

「ああ、美しいな……私も君とそうありたいが」

一方でシンボリルドルフは岡部トレーナーの隣で人參ジュースを嗜みながら、エアグルーヴたちを羨ましそうに見ている。

「ん、最後は何だった？」

「い、いや、いつものジョークだ。気にしないでくれ」

「そうか。グラスが空いているな。おかわりいるか？」

「ああ、お願いしよう」

しかしながら、なんだかんだ言ってシンボリルドルフも岡部と恋仲ではないにしても、とても落ち着いた甘い雰囲気であった。

故に――

「生徒会長さんも、凄いなあ」

「あの二人からはステータス『信頼』を確認。これは是非とも恋愛へ発

展してほしいところです」

「会長も頑張ってるんだなあ……あたしも頑張らないと……とりあえず、有馬記念が終わったらお祖母様に紹介して……ブツブツ」

「あちらもあちらで実に良い。頑張れよ、会長」

——同盟員たちはシンボリルドルフたちのこともしつかりと観察するのだった。

「あ、デジたん、こんなところで寝てたら踏まれちゃうよー？」

「尊みパーリナイ……ぐへへへ」

「ボーンちゃん、デジたんが踏まれないようにあそこのデジたん専用物干し竿に掛けてあげてー」

「はーい♪」

こうしてパーティは甘い雰囲気撒き散らし、尊みの犠牲を一人だけ出して無事に終えた。

グランプリ後の記念日

有馬記念。

年末に行われるグランプリ。

夢の舞台に舞い降りた16名のウマ娘。

夢を掴み取るのはどのウマ娘なのか。

「カワカミプリンセス！ 先頭に躍り出たぞ！ 後続のウマ娘たちが離されていく！」

ワアアアアツッ！

「ゴールドシチー！ ゴールドシチーです！ 輝くプラチナブロンドを靡かせて！ 後輩カワカミプリンセスと並んだぞ！」

◇

「はあはあ……くうっ!!」

「やるじゃん、カワカミ……でも今回は勝たせてもらうから、恨まないでね！」

また一つギアを上げるかのように加速するゴールドシチー。

それに食らいつくカワカミプリンセスだが、徐々にその差は開いていく。

「プリンセスは……！ 気合と……ど根性……！ ですわあああああつ!!!」

ワアアアアツ!!!

歓声がまた大きく響いた。
当然だ。

一度千切られたはずのカワカミプリンセスが、またゴールドシチーと並んだのだから。

両者一步も譲らない。いや、譲れない。

負け続け、諦めずに来た夢の舞台。

勝ち続け、また勝つために来た夢の舞台。

勝つのは――

「アタシだ――――っ!!!」

「わたくしですわー！ー！ー！ー！っ!!!」

——三女神が微笑みを向けた者のみ。

◇
ワアアアアアツ!!!!!!

「纏れるように両者ゴー！ー！ー！ー！ンツ！ 結果は……写真判定っ！
勝利はどちらが掴み取ったのでしようかつ!?!」

レース場が静まり返る。

どちらが勝ったのかと固唾を呑んで見守っている。

素晴らしいレース運びを見せたゴールドシチーか、はたまた驚異の粘りを見せたカワカミプリンセスか。

ワアアアアアツ!!!!

今日一番の大歓声！がレース場を揺らす。

「ゴールドシチー！ ゴールドシチーです！ 年末のグランプリを制したのはゴールドシチー！ トウインクルシリーズ最後となる夢の大舞台で大輪の花を咲かせ、ドリームシリーズに駒を進めますっ！
そしてまさに今年はチームデネボラの年になりましたっ！」

勝利はゴールドシチーがもぎ取った。

スタンドに押し寄せたファンたちは彼女へ大きな拍手を送り、彼女がターフを去るまで「シチーコール」が鳴り響いた。

◇
「やった……やったーっ！」

スタンドの声にはクールに振る舞っていたものの、控室に入るなりゴールドシチーはその喜びを爆発させ、カワカミプリンセスに抱きつく。

カワカミプリンセスは惜しくも2着となったが、彼女はゴールドシチーがどんな思いでレースに臨んだのかを常に肌で感じてきた。

故に今は負けた悔しさより、幼子のように無邪気に喜ぶ先輩を見れた嬉しさが溢れている。

「おめでとうございます、ゴールドシチー先輩。ドリームシリーズでもより一層のご活躍を祈っていますわ」

「アリガト、カワカミ！」

「ええ……それと——」

「？」

「ドリームシリーズへ行っても、またこれまでのように並走トレーニングとかしてくださいね？ 一緒にトレーニング出来ない寂しいですから……」

「……あはは、何それ？ やるに決まってるじゃん！」

カワカミプリンスはゴールドシチーにとってはもうただの後輩ではない。

同じチームのメンバーであり、かわいいかわいい、ちよつと世間とはズレた後輩ちゃんなのだ。

「おう、二人共。お疲れさん」

そこへチームトレーナーの幸福が入ってくると、二人は満面の笑みを彼へと向け、ウイニングライブの音がスタッフから掛かるまでうんと褒めてもらうのだった。

有馬記念を終え、日が経ち、時は大晦日。

多くのウマ娘は帰省しているが、帰省せずに寮へ残って来年に向けてトレーニングに励む子もいる。

チームデネボラのメンバーは今年は幸福とエアグルーヴがイチヤイチャしやすいようにと、モデル業で年末年始は何かと忙しいゴールドシチー以外は皆有馬記念が終わった次の日には帰省した。それでもみんな元旦の夕方に帰ってくる予定。

元旦は幸福の誕生日。いの一歩はエアグルーヴに譲るが、みんなも幸福の誕生日を祝いたい気持ちは同じ。

なので元旦の夕方には今度はみんなで幸福の誕生日パーティをするのだ。

よって今、エアグルーヴは大晦日の夜を外泊届けを出してトレーナーがカールと暮らすマンションで過ごしている。

当然誰にも憚られずに過ごしているのだが、

「……………」

「なんでそんな縮こまってんだ？」

「……………」

「おいおい、そんなに離れてちや寒いって」

「ひう……………」

エアグルーヴは先程から首まで真っ赤にして、あぐらをかく幸福に抱え込まれるように抱っこされて思考停止に陥っていた。

幸福はエアコンの暖房の風が苦手なので、真冬でも滅多にエアコンを使わない。その代わり灯油ストーブやこたつを使って暖をとる。

エアグルーヴはウマ娘であるため寒さに強く、人間と比べると体温も高い。なので幸福にいい湯たんぽにされているのだ。因みにウマ娘の平熱は37.38度。レース直後だと43度になる子もいる。

幸福から抱っこされている今の状態は彼女にとって嬉しいことこの上ないが、後ろからずっと…………もう日が落ちてからずっとこの状態なので流石に恥ずかしさが勝ってきた。

なのに飼い主に似たのか、エアグルーヴが伸ばしている脚の上にはカールがぐでーんと寝そべっているため、逃げることは不可能。

「な、なあ、今更だが、本当に今夜は泊まってもいいのか？ 前に泊まるのはダメだと言っていたのは幸福さんなんだぞ…………？」

「理事長とたづなさん、それとエアグルーヴのご両親にも話は通したから大丈夫だ。仮に俺がエアグルーヴに対して不埒な真似をすれば俺が物理的にも社会的にも抹殺されることになってるからな」

「それはそれでいいのか？」

「俺は構わないよ。恋人と誕生日を過ごしたいだけだし、過ごすだけで不埒な真似なんてする気起きねえし」

「…………幸福さん」

幸福の誠実な言葉にエアグルーヴの胸の奥はトウソクと跳ねる。

「ってことで、元旦になるまでエアグルーヴは俺とカールサンドの刑なよ」

「罰を受けているのか、私は？」

「そ。俺を夢中にさせた罪で」

「……そっくりそのまま返してやる……たわけ」

こうしてエアグルーヴは幸福にされるがまま、ゆったりと甘い年越しをするのだった。

「はい……はい……はい、誓って娘さんには無体を働いたりはしません」

0時を過ぎた元旦。

幸福は電話の向こうにいる相手に誠心誠意の言葉を返す。

電話の相手はエアグルーヴの父親で、妻から幸福のことは聞いているが、今回は状況が状況なだけに釘を刺しに娘に電話を掛けて電話口を代わってもらったのだ。

『もしも私たちの娘に何かあれば、私は私の持つ全てを利用して貴様を社会的に抹き……始末することになる。娘は私の妻に似て美人だ。据え膳なんたらとか考えようものなら』

「大丈夫です。決してそのような真似はしません」

『私の娘はそんなに魅力がないというのか!? 娘が選んだ相手でも愚弄するならば容赦はせんぞ!』

「いえ、そういうことではありません。彼女は学生の身ですし、私に至っては社会人です。今回はただ健全なお付き合いの内の外泊ですので」

『ペチャクチャと口が上手い男だな……そういうやつに限って——』

エアグルーヴの父親から放たれる言葉は刺々しいが、父親はもうとつくに幸福をエアグルーヴの伴侶に相応しいと認めている。

そもそもウマ娘である以上、いくら親が反対したところで意味はない、エアグルーヴもこれらのウマの骨を選んだりしない。

初めてエアグルーヴの実家へ挨拶に行った時なんかは言葉や態度は相変わらず刺々しくても、甲斐甲斐しく皿へ料理をてんこ盛りを取って「貴様のために妻が用意した料理だ。食え」とソワソワしながら押し付けてきたので、幸福も『このお父さんかわいいな』と思ってしまうほど。

幸福は彼女の父親のそういうツンデレなところを見て、つくづく親子だなあと気持ちちが萎縮するより逆にほっこりしたそうな。

「お父様、そろそろよろしいですか？ それとも私が選んだ相手を信用出来ないとでも？ それはお父様が私を信用してくれていないということになりますか？」

『わ、私はお前のためを思って……』

「そう思うのでしたら信用してください」

『エアグルーヴ……少々冷たくないか？』

「いつも通りです。どうせこのあとお母様とよろしくするのでしょう？ いつも娘の前だというのにイチャイチャイチャイチャと」

『た、たわけ。今はそういうのは——』

「そつくりそのままお返しします。たわけ。それではお母様によろしくお伝えください。落ち着いたら実家に顔を出しますので」

『その時は相手も連れてくるんだろうな？』

「言われなくても連れていきますよ。ようやく出来た息子と酒を飲みたいのでしよう？」

『た、たた、たわけ！ まだ息子じゃない！ それと言うんじゃない！』

「ふっ……」

『今鼻で笑ったな？ パパ泣いちやうぞ？ パパはエアグルーヴのパパぞ？ 織細ぞ？』

「電波のせいです。では」

『おい、話はまだ——』

父親からの電話を強引に切ってしまったエアグルーヴ。

対して父娘のやり取りを見聞きしていた幸福は可笑しそうに肩を揺らしている。

「……笑うな」

「ああ、ごめんな。でもさっきのやり取り聞いてると……ははっ、やっぱり親子なんだなって思えてな」

「それは当たり前だろう、たわけ」

恥ずかしそうにふんつと鼻を鳴らしてそつぽを向いてしまうエア

グルーヴを、幸福は謝罪の意味でそつと抱きしめる。

そうすればすぐにエアグルーヴも背中へ両手を回し、ご機嫌に尻尾を揺らした。

「……お父様の電話のせいで遅くなったが、誕生日おめでとう。これからも私が一番最初に幸福さんの誕生日を祝うから、覚悟しておけ」

「おう、ありがとう。俺は幸せだよ」

「女帝を無礼るなよ?」

「愛していますよ、女帝様」

「このたわけめ……ふふっ」

そして二人は今年初のキスをして、歯を磨き、床に広い布団を敷いて、カールを挟んで眠りに就いた。

◇

元旦の早朝5時。エアグルーヴはまだ眠る幸福を起こさないように布団から出て、洗面と歯磨きを済ませてから料理を始める。

ナリタタイシンのおかげで大きな毛ガニを二杯仕入れることが出来た。

エアグルーヴは毛ガニを水でよく洗い、沸騰した鍋の中に塩を入れ、甲羅を下にして茹でていく。

毛ガニが茹で上がったら、一杯を取り出し、粗熱を取る。

粗熱が取れたら、身を取り出し、ボールに移し、みじん切りにした生姜とすり胡麻を用意。

もう一つのボールにケチャップ、酒、醤油、水を入れてよく掻き混ぜておき、それが終わったら熱したフライパンに米油を入れ、生姜とすり胡麻を入れたあとで豆板醤を加えて火を通す。

豆板醤が絡み、火が通ったところでカニの身を入れてボールに作っておいた調味料も加えて和えていく。

最後に水溶き片栗粉を回し入れ、とろみが出て来たら皿に敷いたカットレタスの上に盛り付ければ完成。

エアグルーヴ特製のエビチリならぬカニチリだ。毛ガニが大きいためパツと見は三人前くらいあるが、幸福ならばぺろりと食べられるだろう。

それから冷蔵庫に入れておいた幸福のジャムを使ったマーブルレアチーズケーキをテーブルの中央に鎮座させ、チョコプレートにホワイトチョコペンで『Happy♡Birth day』と書き、その右隣に茹でた毛ガニをドドンと置き、反対にはカニチリ。ご飯が欲しい時のためにご飯も昨晚炊飯器でセットしておいた。

取皿と箸。カニの殻を入れるボールを用意すれば、誕生日プレゼントの用意が見事に終わった。

朝から重いかもしれないが、今日は重いくらいが丁度いい。それがエアグルーヴの愛だ。

「我ながら完璧な仕上がりだ」

青いエプロン（紐の部分は黄色）を外し、満足げに頷くエアグルーヴ。

幸福が起きてから作る手もあったが、幸福が猫舌なので作り終えてから起こした方がすぐに食べられるだろうとエアグルーヴならではの気配りも完璧である。

◇

「幸福さん、起きてくれ。誕生日プレゼントが出来上がったぞ」

「ん……おお、おはよう」

「おはよう……何かいいな、こういうの」

「俺も同じこと思った」

幸福が同意しながら体を起こし、エアグルーヴを抱きしめると、彼女は「くすぐりたいな」と返しながら抱きしめ返した。

今は朝の6時だが、普段はこれより早くから活動を開始する幸福なので、寝起きはバツチリ。それでいてエアグルーヴが起こしてくれたのだから、調子は絶好調。

そして――

「カニチリうまああああいつ！」

「存分に味わうといい。まだまだあるからな」

「ケーキもうまああああいつ！」

「そう言ってくれて嬉しい。もつと食べてくれ」

「エアグルーヴ愛してるううううっ！」

「たわけ……私も愛しているぞ」
——エアグルーヴが心を込めて作ってくれた料理と愛を心から
堪能するのだった。

女帝は杖と共に

大きな声援がレース場を揺らす。

押し寄せたファンのお目当ては――

「各バ最終コーナーを回って、ラストの直線へと入ります！ そしてやはり来ました！ エアグルーヴが上がってきた！ 皇帝シンボリルドルフと異端の逃亡者こと同チームの後輩セイウンスカイに追いつけるか！」

――女帝エアグルーヴ。

ウインタードリームトロフィー。

トウインクルシリーズを駆け抜けた者だけが走れるその名の通り夢のシリーズ。

出走3度目となるエアグルーヴは、このレースを最後にレース競技を引退する。

このレースにはURAファイナルズを制した同チームの後輩セイウンスカイとマーベラスサンデーも出走しているが、最大のライバルは皇帝シンボリルドルフだ。

最後のレースとなる舞台は彼女が母との誓いを果たしたオークスの時と同じ東京レース場。

天候はあの時と同じ晴れ。バ場も良好。

しかし――

「あーっと！ エアグルーヴ、落鉄！ 落鉄です！」

――アクシデントがエアグルーヴを襲う。

落鉄。それはウマ娘が使用するレースシューズに装着する蹄鉄が外れたことを意味する。

脚に問題は無い。しかし人間で言えば走っている最中にシューズが脱げることと同等だ。

よってエアグルーヴはバランスが崩れてしまう。

「くっ……私としたことが！」

左右の足の重さが変わり、体重移動が乱れる。

踏み外したことによる自分の失態にエアグルーヴは奥歯を噛み締めるが、反省するのは今ではない。

「こんなもの……どうとでもなるっ！」

体勢を低くし、加速していくエアグルーヴ。

しかし本来のスピードに上がりきれない。

現役ラストレースだというのに、とエアグルーヴが諦め掛けたその時だった――

「エアグルーヴ！ まだ負けてねえ！ 最後まで前を見ろっ！ お前は女帝だろうが!!!」

――愛する男の声がハッキリと耳に届く。

僅かに視線をやれば、男……幸福は今にも泣きそうに顔を歪ませながら檄を飛ばしていた。

「何だその顔は……それではまるで私がこれから負けるみたいではないか……たわけ」

エアグルーヴの瞳に青焰が浮かぶ。

次の瞬間、彼女の本来の差し切り体勢に戻る。あの短時間で両脚の感覚を調整し、本来のフォームに戻れたのだ。

「これが……女帝の走りだ!!!」

ぐんぐんと加速していくエアグルーヴに、集まったファンたちは喉を枯らす勢いで声援を飛ばす。

「エアグルーヴ！ 残り100というところで先頭の皇帝を捉えました！ このまま行くのか!? 女帝か!? 皇帝か!? 3着争いはセイウンスカイで決まっているぞ！」

そして――

「勝ったのは女帝！ エアグルーヴ！ 落鉄というアクシデントを見事に乗り越え、皇帝シンボリドルフを差し切りました！ そして女帝のラストレース！ 有終の美を見事に飾り、女帝は女帝のままターフを去ります！ 感動をありがとう、エアグルーヴ！」

――エアグルーヴはどうとう夢のレースで皇帝シンボリドルフを破り、勝利を勝ち取った。

割れんばかりの拍手と女帝コールが東京レース場を揺るがし、女帝

は女帝らしく杖にエスコートされてターフを去る。

背中から同チームのセイウンスカイのニヤニヤした視線とマーベラスサンデーのニコニコした視線を浴びながら。

エアグルーヴが引退してから時は流れ、トレセン学園の卒業を迎えた。

彼女が卒業した翌日――

「新郎伊藤幸福、あなたはエアグルーヴを妻とし、健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、妻を愛し、敬い、慰め合い、共に助け合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

「新婦エアグルーヴ、あなたは伊藤幸福を夫とし、健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、妻を愛し、敬い、慰め合い、共に助け合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

――幸福とエアグルーヴの結婚式が特別に東京レース場にて執り行われた。

純白のタキシードとウエディングドレス。

新郎新婦が同時に神父が待つ壇上までの赤いバージンロードを歩く様は、まさに女帝とその杖だった。

誓いのキスを終わると、レース場に押し寄せたファンや二人の関係者たちが大きな拍手と祝いの言葉を掛け、幸福にだけは多くの者たちが米粒を己の妬みに従い投げつける。

痛がる幸福をエアグルーヴは可笑しそうに見つめ、ブーケトスはブーケ獲得ダービーとなって18人のウマ娘がスターティングゲートに並び、大いに盛り上がった。

因みに一番人気はシンボリルドルフ。二番人気にメジロライアン。

三番人気にナイスネイチャとなり、ブーケ獲得の1着はナイスネイチャとなった。

そんな幸せな結婚式から数年の時が過ぎ、エアグルーヴも夫婦生活が馴染んで妻としての役目が板に付いた。

おはようのキス。朝ごはんを作ってくれたお礼のキス。朝ごはんを残さず食べてくれたお礼のキス。ネクタイを締めてくれたお礼のキス。見送ってくれる妻へのお礼のキス。行ってらっしゃいのキス。行ってきますのキス。

事あるごとにキスをするおしどり夫婦（キス魔夫婦）は、マンションでも有名だ。

「ふう……幸福さんも無事に送り出せたことだし、私は妻としての役目を果たそう」

エアグルーヴは意気込むと、服の上からエプロンをつけて両腕の袖を捲くり上げる。

彼女は現在専業主婦。たまに母親からお願ひされて母親の仕事を手伝うことはあるが、それも全て家で出来る内職のみ。

堅い性格故に妻は家の留守を預かる者として捉えているのもあるが、幸福が変わらずトレセン学園のトレーナーとして忙しく働いているため、彼のために家のことは全てしてあげたいという気持ちの方が強い。

「ワンツ」

「そうかカールも手伝ってくれるか。お前は本当に賢いな」

愛犬カールは相変わらず元気で、最近では洗濯機のアートボタンや幸福が出し忘れた洗濯物を持ってきてくれたり、ゴミ出しを手伝ってくれたりする。

買い物にもついて行くし、お利口に待っていて荷物を運ぶのも手伝うため、近所のスーパーや商店街では名物犬だ。

「幸福さんのために頑張るぞ」

「ワンツ♪」

◇

夕飯の支度を終え、幸福から『これから帰るよ』とメッセージが送られてくると、エアグルーヴとカールは玄関先に待機して彼の帰りを待つ。

幸福はトレーナーとしてトレセン学園に在席しているものの、結婚をしてからは新しいウマ娘の担当を持つことはなく、チームデネボラも今いる最後の子たちが引退すれば解散予定。

理由は理事長から、昨年解散したチームスピカの安藤トレーナーと共に新人トレーナーの教育係員に任命されたからだ。因みにチームリギルの岡部トレーナーはシンボリドルフと昨年結婚して、実家の牧場を受け継いでいて、リギルは後輩トレーナーを後任トレーナーとして存続させている。

チームを存続させるのも考えたが、新しいスターチームもスターウマ娘も出ているのなら、彼らに任せようと二人は考えたのだ。

因みに安藤トレーナーに至ってはサイレンススズカと来年の天皇賞秋の時期に結婚を控えている。

「ただいま」

「おかえりなさい」

「ワンツ♪」

幸福が予定通りに帰って来ると、

『お邪魔しまーす』

彼のあとからかつての仲間たちが続々と姿を現した。

エアグルーヴが驚いて目をパチクリさせていると、

「なんかエアグルーヴを驚かせたくて、俺にみんなして連絡して来たんだよ」

幸福が悪戯成功とばかりに輝く笑顔を見せたので、エアグルーヴは「仕方のないやつだ」と笑い、みんなを招き入れる。

夕飯の支度はしていたものの、幸福からのリクエストがクリームシチューだったので、エアグルーヴは合点がいった。

ヒシアマゾン肉じゃが。アイネスフウジン唐揚げ。ゴールド

シチーは高級人参ジュース。ナリタタイシンはパエリア。セイウンスカイはカレイの煮付け。マーベラスサンデーとカワカミプリンセスは有名店のホールチョコレートケーキ。

あつという間にパーティの準備が整ってしまふ。

「しかしどういふことなんだ？」

エアグルーヴがそう尋ねれば、

「あの頃のメンバーで集まりたいってことだろ」

幸福が答え、エアグルーヴは「なるほど」と微笑んだ。

今いるメンバーはチームムネボラの黄金期を支えたウマ娘たち。その後に入ってきたメンバーには悪いが、彼女たちにとってはこのオリジナルメンバーは特別な存在なのである。

故に同窓会みたいなことを今回のように突発的に年に何回かするのだ。

因みに今いるメンバーも学園を卒業してそれぞれ仕事に就いている。

ヒシアマゾンとはトレセン学園の寮管理職に就き、アイネスフウジンとはトレセン学園の購買部店員として働き、ナリタタイシンは実家の花屋で働き、セイウンスカイはキングヘイローが立ち上げた勝負服ブランドの受付係をし、マーベラスサンデーは東京レース場の誘導バを務め、カワカミプリンセスは実家の仕事を手伝っており、ゴールドシチーに至っては未だ現役の読者モデルだ。

「ほらほら、せっかく集まったんだしパアツと行こう、パアツとキー」
ヒシアマゾンがそう言えば、マーベラスサンデーやセイウンスカイも『そうだそうだと煽り、エアグルーヴは「分かったから落ち着け、たわけが」と注意しつつ、人参ジュースが注がれたグラスを掲げた。

◇

盛り上がったパーティは終電前にお開きとなり、メンバーは家路につく。

みんなを見送ったあとで、エアグルーヴは「片付けは私がやるから、幸福さんはお風呂に入るといい」と言ってお手際良くパーティの後片付けをした。

幸福が風呂から出て来ると、完璧に終わっており、彼は妻にありがとうのキスとご苦労様のキスをして、今度はエアグリーブが風呂へ入る。

「待たせたな」

「いや、仕事の整理しながらだったから気にしなくていいぞお」
「そうか」

エアグリーブが寝間着姿で寝室へやって来ると、幸福はノートパソコンを閉じた。

するとエアグリーブはすぐに幸福の隣に座り、その肩に頭を預ける。

「どうした？」

「今日は懐かしいメンバーが来たからな。会えるのは嬉しいが、二人の時間が取れなかったからだ」

「確かに……でも俺が出張とかで取れない時もあるだろ？」

「それは仕事だから我慢するし、わがままは言わん」

「何かあればすぐに連絡出来るじゃんかよ」

「ああ、だが私は幸福さんに甘えたかった」

エアグリーブが素直に胸の内を吐露すると、幸福は妻が可愛くて思わず固まってしまった。

「仕事ならば仕方がないと割り切れるが、それ以外ではやはりダメなんだ、私は……」

「……………」

「そのせいで普段よりももっと幸福さんに甘えたくなくなってしまったんだ」

「それにしたってさっきまでみんなと楽しくお喋りしたろ？」

照れ隠しに幸福は言葉を返すが、

「私は本気だぞ？」

エアグリーブの言葉に余計に照れてしまう。

何しろそう言うエアグリーブがしゅんと耳を垂らして告げたのだから、可愛さ倍増だ。

「な、なるほどな……」

「本当だ」

エアグルーヴはそう言うのと一気に距離を詰める。

しかし吐息が触れる距離で、エアグルーヴは一瞬動きを止めた。

嫌なのであれば今拒んでほしいと、まるで幸福の気持ちを確かめるように。

そんな愛らしい妻を幸福が拒む理由はなかった。

互いの気持ちが一つになったあの日から、何度も口づけを交わしてきた。

それでも口づけを交わす度に、相手への愛は増すばかり。

最愛の相手の唇の感触を堪能し、舌を絡めていくと、最初は優勢に立っていたエアグルーヴが幸福に巻き返され、肩で息をしていた。

「はあ、はあ……何故だ……」

「何が？」

「何故、私が……こんなになっているのに、幸福さんは息ひとつ切らさんのだ？」

「愛の違いかな？ 俺、エアグルーヴへの愛なら誰にも負けないからさ」

「私だって、そうだ……」

「でも毎回俺の大差勝ちだよなあ？」

「うう……ズルいぞ」

「愛のなせる業だな」

「くう……私がいいと言うまで甘えさせろ」

「心ゆくまでどうぞ、愛する女帝様」

「杖のくせに、こんなに好きにさせおつてえ……たわけ」

「嫌なのか？」

「あ、ダメしゆき」

「即答だな」

それから幸福はエアグルーヴが求めてくるだけ、うんと彼女に愛情を注いだ。

これからも二人の愛のレースは続いていく。